

魔人ちゃんはがんばらない【完結】

難民180301

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ニート幼女が泣いてる魔法少女を拾ってきて百合イチャイチャする話。

目次

6.	5.	4.	3.	2.	1.
再会／エピソード	モチ期	闇狩り	蜜月	急接近	出会い
157	129	84	59	41	1

# 1. 出会い

うちの近所に魔法少女がいる。

その子は発育のいい曲線的な体にパステルカラーの装束をまとい、ハートを象った大剣を無造作に足元へ転がして、いつもベンチに腰掛けスマホとにらめっこしている。

閑静な住宅街の公園では明らかに浮いてる存在なので、私含め通行人のみんながちらちら視線を送っているけれど、彼女は周りを気にしない。食い入るようにスマホを見つめては顔を青くしたり頬を赤く染めたりニマニマ笑ったり、百面相するのに忙しい。ショートボブの前髪ぱつっんなので表情がよく見える。それをご近所さんたちは微笑ましさで好奇心半々くらいの面持ちで見守っている。有名どころの魔法少女を見るとすぐ群がって握手やサインを求めに行くミーハー共とは一線を画した、穏やかな距離感がここにある。

その距離感を私は今日、壊すことにした。

「う、ううつ、ぐすつ、うえええええ……」

「まだ泣くか。ほら、チーンてしな」

「ぶびいーっ!」

「きたね」

私は彼女を家に連れ込んだ。涙と鼻水でくしゃくしゃの顔にティッシュをあてがうと、美少女が出しちやダメな効果音が広いリビングに響く。ずっとこの調子だ、嫌になってきた。

丸めたティッシュの山が一つ出来上がった頃、ようやく魔法少女が落ち着いたので、風呂へ案内する。落ち込んだときはとりあえず寝るか食べるか風呂に入るかすればいい。

魔法少女のきらびやかな装束は、きらきらした光の粒子に解けていった。全裸の少女を風呂にぶち込み、サイズ大きめの衣服をいくつか適当に脱衣所に置いておく。

リビングに戻ると、ティッシュの山の隣にこんもり膨らんだコンビニの袋がある。しこたま買い込んできたホットスナックがすっかり冷めてしまった。全部あの魔法少女のせいだ。

今さら食べる気にもなれず、だらだらとティッシュを片付けながらスマホで「魔法少女 パステルカラー」と検索する。

現役魔法少女一覧のページをタップすると、パステル系装束の魔法少女たちのデータがずらりと並ぶ。さすがに顔写真はないので、武器・戦法の欄をスクロールしていくと、ハートを模した大剣の記述を発見。たぶんこいつか。

詳細に目を通す直前、ほかほか湯気をたてる魔法少女が戻ってきた。腫れぼったい目元を差し引いても、目鼻立ちの整った腹立たしいくらいの美少女だ。私より身長が高い。胸と腰の肉付きもむちつとしてて生意気。着替えたスウェットが萌え袖になってるのもあざとくてムカつく。

「お、お風呂ありがとうございました……」

「おいよく聞けよ一般魔法少女この野郎」

「へ?」

そこはありがとうじゃないだろうが。

「私が好きなのは食べる寝るだけの人生だ。毎日食べては寝て何も頑張らない日々を送ってる。食事は全部デリバリー、外に一步も出ない日はザラ、オーケー?」

「お、おっけー……」

「そんな私が週に一度外に出るのが今日だった。コンビニだよ。目当てはホットスナックとお菓子。胸焼けするくらい脂っこいものを食べて炭酸水でキュツとシメる。それが私の楽しみなんだ」

「あ、そこはお酒とかじゃないんですね……」

「うるさい。いいか、お前は私のそんな素敵な一日に水を差した!」

魔法少女はぽかーん、と口を開けている。

「ゴキゲンな帰り道にあんなところで泣いてる子見たら、モヤモヤしすぎて食べるも寝るもできなくなるでしょーが」

「それって私のせいなんですか?」

「当たり前だろ。というわけでワケを話せ。もう一生泣けないくらい完膚なきまでに悩みを解決してやるから」

「お悩み相談というか尋問ですねもはや」

少女はドン引きしつつ、ラグの上にぺたんと腰をおろした。私とテーブルを挟んで向き合いながら、「んー」としばし考え込む。

「私って魔法少女なんですけど、知ってます?」

「そーいやさつき調べてたわ。ええと」

やはり魔法少女関連の悩みらしい。スマホを操作して、眼前の少女と思しきネット情報を表示する。

『魔法少女名：パステルエツジ 武器：ハートの大剣 固有魔法：未覚醒 経歴：5年 ランク1』と。ふむふむ、ランカーなんてすごいじゃん、いかにもできる魔法少女って感じだけど」

「まさにそのランクなんですよ、私の悩み。これ見てください!」

少女がずいっと突き出してきたスマホの画面には、例のランキングが表示されている。全国日刊魔法少女ランキング、その名の通り日毎の魔法少女たちの貢献度を順位付けしたものだが、日付は昨日だ。

眼前の少女、パステルエツジの名は9位になっている。今日は11位。

「あれ、落ちぶれた?」

「落ちぶれた言わない! 泣きますよマジで!」

頬を膨らませてこちらをにらみつけるパステルエツジ。かと思うと、テーブルに突っ伏してまた嗚咽まじりの声を漏らし始めた。

「私だって頑張ってるんです……朝の走り込みは毎日してますし、放課後の魔物退治も欠かしてません……クラスの子どもたちに誘われても泣く泣く断って、そのせいで友だちも少なくて、それでも毎日毎日……その頑張りが、無駄だって言われたんです」

「誰?」

「ランキングにつ!」

涙目で顔を上げ、また突っ伏してメソメソするパステルエツジ。

「今までは、頑張れば頑張るだけランキングが上がってたんです。だけど今日初めて下ぶれして」

「そりゃ、順位ってそういうもんでしょ。毎日更新ならなおさら。ずっと上にいるやつはいない」

「でも、だけど……私には、それしかないのに……」

パステルエッジはスマホを握りしめ、画面上のランキングにすがりつくような目を向けている。さながら私を捨てないでと男にすり寄る限界女みたいだ。ドラマで見た。

要するにこの少女は、自分の存在意義を魔法少女ランキングにしか見出していないのだろう。依って立つ基盤がランキングで浮上することへの自己肯定感しかない。だから流動性の高い日刊ランキングごときでここまで落ち込む。

呆れた。毎日公園のベンチで何をしているのかと思えば、こんなことで一喜一憂していたのか。

「トップランカーのレッドグラッジさんなんてすごいですよ……日刊の常連ですし殿堂入りしてるし、あの英雄の妹さんですし、地上波にぽんぽん出てますし……SNSのフォロワーも世界レベルで、私みたいなミジンコ魔法少女とは比較にもなりません……ううっ、うううううう」

またぞろ表情が陰ってきた。成功している誰かを見るだけでここまで卑屈になれるのは才能の一種だろう。

とはいえまた泣かれても面倒くさい。ここは多少無理筋でも褒めそやして自己肯定感を高めないと。

「それしかない、というのは違うぞパステルちゃん。君はたとえば魔法少女でなくても素晴らしい女の子だ」

「見え透いた気休めをどうもですうー……」

うぜえ。死んだ目で拗ねてやがる。

ぐつとこらえて、とにかく目に付く部分を徹底的に肯定していく。

「まず顔と体がいい。すごい、すばらしい」

「はえ？」

おっとりしたタレ目にすつとした鼻梁、桜色の健康的な唇は小動物のような愛らしさと女性的な魅力にあふれている。簡単に言えば美少女ってことだ。

さつきまで着てた変身装束もエロかわで、特に白いタイツとフリルの間に広がる絶対領域は太陽よりまぶしい魅力で輝いていた。通りかかった学生やおっさんやらがいやらしい目で見ていたのも納得

できるくらいに。

「えー、それと……あと声もいいな、甘ったるくて、耳からマカロンを突っ込まれているような気分になる。鼓膜が糖尿になっちゃいそう」  
「えへへ、へ？ それって褒めてる……？」

「あとあと、肝も据わってるんじゃない？ たとえば名前も知らない女の上に上がりこんで悩みを吐露するなんて、相当な勇気がいるでしょう。つまりそう、君はすごいくてすごいぞ、パステルエツジちゃん！」

「そ、そですか？ うえへへへえ」

パステルは頬を朱に染めて恍惚とした目をしている。チヨロすぎだろ、どれだけ肯定感に飢えてんだこいつ。

くねくねするパステルに若干引きつつ、リビングの時計に目をやる。午後六時半。そろそろ頃合いだろう。

「もう大丈夫そうね。家まで送っていくよ」

「えっ？」

「意外そうな顔しない。キミ未成年、明日平日、学校！ ほら、立った立った」

当たり前前の理屈で帰宅を促した。

初春の夜道は少し冷え込む。上着を一枚パステルに引っ掛けてから、マンションを出て、例の公園を通りパステルの案内のもと住宅街を進む。

「ごごね。バイバイ」

自宅の一軒家前でさっさと別れようとすると、袖口が掴まれた。振り返る。

不満げに口を尖らせるパステル。すると萌え袖スウェットで口元を隠し、上目遣いに言う。

「また会いに行ってもいいですか？」

「ダメ」

「なんでえ!?! こちとら美少女ですよ!?!」

「調子に乗るな。私の専門は食べて寝ること。人と話すのは面倒なの」



「あれだけペラペラ喋って何を……ま、待って！」

「はいはい元気でね」

強引に別れた。

帰ってから食べたホットスナックは冷え切った油分がやたらねっちよりしていて、あまり美味しくなかった。

――

私の朝は早い。

まず六時に目を覚まし、無目的にスマホをいじることから始まる。特に面白くもないSNSやニュースサイト、匿名掲示板などを無気力に漁りつつ二度寝。お昼頃に寝過ぎで重くなった体を引きずり、冷凍庫から冷凍ピザを取り出して、凍ったままのそれをかじる。当然まずいけどチンするのはもつとだるい。

お昼からの活動はより刺激的だ。リビングのソファにねそべって、冷凍ピザとコーラを喰らいながらワイドショーをザッピングする。内容はどうでもいい。どうせ中身はない。無駄な情報の波を浴びて無駄に食料と時間を浪費していく。

そんな風は無駄極まる時間を夕方まで送っていると、最高に気持ちがいい。私、非生産的な時間が大好き。食べて寝てそれ以外は何もしい。呼吸だけしていきたい、いやむしろ呼吸さえめんどくさい。

あー、なんつもしたくねえ。

「おん？」

ピンポンが鳴った。宗教と新聞と引越しの挨拶はお断りだ。居留守一択。

と思ったら、ピンポンがしつこく連打される。この野郎、誰だか知らんが不退去罪で通報されたいらしいな法廷で会おうぜ。

スマホに110を入力した状態で玄関の扉を開けると、昨日ぶりの顔に迎えられた。

「こんにちはー！」

「ん、こんにちは」

魔法少女、パステルエッジだ。今回は変身後の装束姿でも着替えたスウェット姿でもなく、ブレザーの制服を着て、制カバンと紙袋を提げている。

紙袋の方をこっちに差し出して、

「昨日はありがとうございました。これ、返しに来ました」

「ああ、服ね。別にあげてもよかったのに」

「いえ、そんなわけにはいきません！」

「律儀にどうも。じゃあ——」

バイバイ、と言おうとして言葉を切る。

パステルが袋の持ち手から手を離さず、私と取り合うような形になる。返しに来たんじやないのかよ。

なんのつもりかと顔を見上げると、物欲しそうなタレ目の童顔が目に入った。餌の時間に皿の前で待機する犬とか、構ってほしそうに足元で佇む猫とかを彷彿とさせる、無言の圧力。スカートの後ろに尻尾のぶんぶん揺れるのが幻視できそう。

「もし万が一よかったら、上がってく？」

「はいっ！」

ぱあつ、と満面の笑みを咲かせるパステル。言質は取ったとばかり、袋から手を離す。

懐かれた。あまりにもチョロい。傷心に優しい言葉もらった程度でここまで懐くとは、親はどんな教育してるんだ。

「あーもーめんどくさい。何もしたくない、だるいめんどい」

「あつ、すみません、迷惑でしたか……？」

「いや別に、何もしたくないのはいつもだし。茶の一つも出さないけど、上がってくなら好きにしなよ」

「お茶は教えてもらえれば自分で入れます！」

「好きにしすぎだろ図々しいよ」

散らかったコンビニ袋とペットボトルを蹴飛ばして、所定の位置すなわちソファの上に寝転がる。パステルはソファの前、私の眼前に腰を下ろした。

「改めて、私はくさびの楔野中学二年、由立ゆたちたゆ。魔法少女名はパステルエッジ

といます。よろしくお願いします!」

「はいはい……え、待って中二?」

「そうですよ?」

思わず身を起こしてパステル、改めたゆの体を見やる。ぺたん座りのたゆの胸は、ブレザーの上からでも分かるほど豊かに膨らみ、腰回りから黒タイツに包まれた太ももにかけてもむちつとした色気がある。これで中二は詐欺だろ。

当のたゆは無邪気に小首を傾げ、「それより」と身を乗り出してきた。

「お姉さんの名前も知りたいです」

「お姉さんでいいよ、ただのお姉さん」

「えー」

「えーじゃなくて。いい? 人付き合いには適切な距離感がある。私たちはお互い名前を知らない方がいい距離になると思うの」

「私の名前はもう言いましたよ」

「忘れる」

「ダーメー! 今すぐ呼んでくださいっ!」

「近い近いそれと声でかい。分かったから、たゆ」

「はい」

にへら、と笑って体を離すたゆ。ヘッドが出るほど自由奔放な女だ。

たゆはそれから何をするでもなく、上機嫌に体を左右に揺らし、じつとそこに座っていた。垂れ流しにしていたテレビの方へ時折振り返り、床に転がったペットボトルを指でつついたり。一体何が楽しいのか。

「ねえ——」

「はい何ですか!?!」

「超食い気味じゃん。いや、もう帰ったら? 日、暮れそうよ」

「こんな時間に女の子の一人歩きは危ないですよね!?!」

「送ってけってか? まだ明るいでしょうが。帰れ帰れ」

「ちえー」

たゆは口を尖らせて抗議すると、一つため息をついて、しゅしゅと

いった調子で立ち上がった。

「また来ますね」

「来なくて——」

「来ちゃ、ダメですか？」

明るい表情から一転、不安に瞳を揺らし消え入りそうな声でそう聞かれると、返答に詰まってしまう。目に付く範囲でこういう顔されると惰眠ライフがモヤるので、マジでやめてほしい。

「来たいなら勝手にしなさいよ、もう。鍵開けとくし私何もしないけどね」

「やったあ！　じゃ、また明日です！」

声を弾ませて、たゆは風のように出ていく。結局何がしたかったのか、何を考えてるのかまるで分からなかった。分かったのは懐かれたのだろうということだけ。

まあ、すぐに飽きるだろ。中二といえれば学校で勉強に部活に、しかも魔法少女の活動もあるなら忙しいはず。茶も出さず歓迎の言葉も会話もないここへいつまでも通うわけがない。

という私の予想は、以後の一週間毎日夕方方によって来るたゆに覆されることになった。

その間、やることは初日と変わらない。私がソファで時間を浪費する快感に浸っている横で、たゆは嬉しそうに楽しそうに体を揺する。時折散らかったペットボトルやレジ袋を片付けてくれたり、一方的に話を振ったりしてくる。

「お姉さんお姉さん！　友だちができました！」

「ふーん？」

「私と同じぼっちの子にグイグイ行ってみたら、最初は無視されたんですけど、あっち行けって言ってくれたんです」

「拒否られてね？　てかぼっちだったの君？」

「美少女が拒否されるはずないです！　私かわいいですから、あの子とはもう友だち！」

「とことん調子乗ってるなー」

一回励まされただけですごい効き目だ。変にうじうじしているより

かはマシか。

こんな具合に人生楽しくて仕方なさそうに話をして、私が時間を告げると名残惜しそうに帰っていく。

さすがに7日もこうされると、無気力至上主義の私としても好奇心が湧く。何なんだこの女は。

ある日の夕方、ついに私の方から聞いてみた。

「ねえ、たゆ。君は暇人なの？　ここに入り浸って魔法少女ランキングとか大丈夫なの？」

「ランキングは大丈夫ですよ。土日の午前にまとめて活動してるので。むしろここに通いだしてから、調子もランクも上がりまくりですよ！　見てくださいこれ、戦闘シーンもあるんですよ」

たゆのスマホには、魔法少女日刊ランキング9位パステルエッジの名があった。以前より2つランクが上がっている。

続けざまに見せられたのはSNSのタイムラインで、一分程度の動画に大量のいいねが付いている。『ランカー魔法少女パステルエッジ、活動風景』の文章が添えられたその動画の中で、変身したたゆがパステルエッジとして戦っていた。

パステルカラーの人影が、真っ黒な蠢く触手の周囲を縦横無尽に駆け回っている。人影が触手の吐き出す粘液の隙間を塗って動いた後に、桜色の閃光が幾筋も走って、それに沿った形に触手が切断された。

バラバラにされた触手が黒い粒子となって散るのをバックに、パステルエッジが大剣を構え残心している。一拍遅れて鳴り響く拍手、歓声を最後に動画がループした。

「へー、これが魔物か。デザインはあんまりかつこよくないね。絡まりあった巨大ミミズみたい」

「ひえっ!?　気持ち悪いたとえしないでくださいよ！　戦いにくくなるじゃないですかっ！」

「巨大ミミズ、絡まりあった、ミミズ、ミミズ」

「やーめーてー！」

「いてて」

涙目でペしペし叩いてくるのをガードしつつ、感心した。こんな何

も考えてなさそうなむっちり中二女子でも、ちゃんとランク相応に戦えるのだ。魔法少女は見た目によらない。

この日以降、私は気にするのを辞めた。たゆが何を考えているにせよ、毎日ここに来るのは変わらない。それなら利用した方が得だ。

その考えに至り最初に目をつけたのが、黒タイツに包まれた柔らかそうな太ももである。

「たゆ、こっちに座りなさい」

「わ、わわ」

「あー、期待通りの寝心地。君はこのために生まれてきた」

「あはっ、やだ、くすぐったいですよお」

たゆの太ももは程よい弾力と反発を備え、膝枕として一級品だった。思わず頬ずりをすると見る間に睡魔に襲われ、二時間ほど深い眠りに落ちた。起きたとき、「足しびれました……」と頬を膨らませるたゆの不満顔に迎えられた。

そうして互いに近い距離で接していると、踏み込みたくもなるのだろう。

たゆはある日、ずばりと切り込んできた。

「お姉さんは魔法少女なんですか？」

「どうしてそう思った？」

「だって——」

いわく、私は中学生程度の見た目なのに学校に通う様子もなく、親とやりとりしている風でもなく、そのくせ生活にはまったく困っていない。通学義務を免除され、一定の活動を代償に生活を保証された魔法少女なのだろう、と。

悪くない推理だ。

「当たらずとも遠からず、かな」

「やつぱり！ あのあの、コンビ組みましようよコンビ！ あれ、二人だとタッグ、トリオ？ なんでもいいや、一緒に魔族退治しましょう！ お姉さんと一緒ならきつと魔人だってイチコロですよ！」

「大きく出たなあ。だけど私はそういうのヤなんだ。ただ食べて寝て食べて寝る。ひたすらに非生産的でいたいのださあ」

「ええ〜？ 前から薄々思ってたけど、お姉さんちよつと変わってるかも」

「その可能性はある」

『魔人、襲来』

ダンディーでしぶいナレーターを読み上げたその言葉に、私とたゆは揃って目を向けた。

垂れ流しにしていたテレビ番組だ。内容は過去に出現した魔人の被害をドキュメント形式で伝えるもの。

最初に、茫漠とした荒地が映し出された。カメラが右へパンしていくと、恐ろしく巨大な鉄柱が現れる。

空高くまで伸びるそれは距離感が狂うほど圧倒的なスケール感で、カメラが徐々に寄っていくと、表面が棘で覆われているのが分かる。さらに寄ると、その鉄柱が途方もない量の有刺鉄線で構成されているのが判明した。

ナレーションがおごそかに告げる。

『5年前の今日、XX州を襲った殺意の魔人。曝露した12万人の一般人は魔が差し、3人の魔法少女が殺害された』

「12万ってどのくらいなんですかね？」

「さあ……この町の人口が4万くらいだったから、町3つ分じゃない？」

「町3つ……」

ぶぐくりと喉を鳴らすたゆ。魔人を倒すというのがどれほど無謀な大言壮語か悟ったらしい。

『魔族は負の情念の権化。魔物は情念の欠片であり、魔人は高純度の結晶だ。殺意という情念から生まれた魔人は、その残酷な権能を使い、多数の民間人を殺傷。数百体の魔物も使役し、さらに被害が拡大した』

「あ、これ知ってます、魔人の仕組み！ 学校で習いました」

「えらいえらい」

ふんす、と胸を張るほどのことでもないだろう。一般常識だ。

人類の情念には不思議な力があり、たくさん集まると凝結して形を

なす。たとえば鋭利な何かを手にしたとき、とても腹が立ったとき、なんでもないふとしたようなとき、わずかでも殺意を抱いたとする。そのとき理性によって抑えられた殺意が、殺意の魔人の原料だ。

反対に正の情念の受け皿になるのが、魔法少女である。

画面にはデフォルメされた青い魔法少女と、おぞましい一対の角を持つ黒い影が表示される。衝突した両者は煙の中でケンカする古典的なアレを経て、最後は黒い影の方がばたんきゅーと倒れた。

『当時最強の魔法少女、ブルージェイスが健闘するも追い詰められ、そして『固有魔法』に覚醒。刺し違える形で魔法の封印を成し遂げる。彼女は死の間際、「封印は永遠ではない」と言い残した』

「あわわわ、大変ですよお姉さんお姉さん!? 永遠じゃないんですって!」

「揺らすなこら」

『だいじょーぶ★ 安心して、みんな★』

声質も相まって不安を煽りまくりなナレーションをぶった切り、高い少女の声がテレビから響く。画面にはいつの間にか、真つ赤な髪と装いのきらびやかな少女がダブルピースで陣取っていた。

『殿堂入り魔法少女、レッドグラッジだよっ★ お姉ちゃん封印の後始末は、グラがちゃんと言っちゃってあげる★ それだけじゃないよ?』

これから生まれてくるすべての魔物、人の社会に紛れ込んでるすべての魔人★ みんなみんな、地の果てまで追い詰めて惨たらしくやつつけちやう★ きやはっ★』

すんつ、と少女はスイッチが切れたように表情を消して、

『魔族は皆殺す。ファック』

立てた中指にモザイクがかかった画を最後に、スタッフロールが流れ出す。

『ああそうそう、魔人はみんな怖い角を生やしてるよ★ 見かけたらすぐ通報してね★ 殺すから』

その最中にレッドグラッジの声がキンキン響いた。角ね。さつき  
のデフォルメされた黒いやつみたいなのかな。

たゆはほう、と熱い息をつく。



「レッドグラツジさん、やっぱりかっこいいなあ」

「は？ 物騒の間違いじゃない？ BPOガン無視だったけど？」

「だってだって、相手は魔族ですよ？ びーぴおーさんもきつと多目に見てくれますたぶん」

「その魔族ヘイトはどこからくるの」

「殺意の魔人だけじゃなくて、過去に何人もいた他の魔人も合わせたら、たくさんの方が犠牲になってます。そりゃ誰でも嫌いになりますよ」

「犠牲者の数で言えば、魔人が人をやるより人が人を殺した数の方が多いでしょ。そこはどう思う？」

「えーっと……それよりお姉さんはかわいいですね。ちっちゃくて、手とかほつぺたとかぷにぷにだし」

「はい、バカ。思考放棄脳死受売りアホアホ娘え〜」

「うわぁん！」

分からないなら素直にそういえばいいものを、下手にごまかそうとしやがって。

――

たゆが先日私の素性について名推理をしたものの、私の方からたゆに踏み込むつもりはなかった。

たとえば毎日顔を合わせるのに親や家族の話題を出さないこととか、たまに私の惰眠に付き合わせて夜更けに家まで送ったのに、家族が何のアクションも示さなかったこととか、色々な違和感をスルーしてきた。だるい、めんどい、何もしたくないし考えたくもなかったから。

しかし事ここに至っては、向き合わざるを得ない。

いつものように惰眠を貪っていたある日、開けっ放しの玄関に誰かやってくる気配。どうせたゆがすぐに小走りで行ってきて、時間を浪費していくのだろう。

半ば確信して数分待っても来ない。玄関からはすすり泣きの声が

聞こえる。こういうパターンもあるのか。

げんなりして様子を見に行ってみると、ずぶ濡れのたゆがしやがみこんで泣いていた。そういうえば今日は、朝からずっと雨が降っていた。

「いつまで玄関に突っ立ってるのかと思ったら……まったくもー」

「ぐすつ、お、お姉さん、お姉さあん……っ！」

「はいはい泣く前にまずお風呂行きなさいね風邪ひくから」

たゆの打ちひしがれた様子は、またランキングが落ちたとかそういう深刻さとは違った。おなじみのブレザーを着ておらず、下のブラウスの胸元が乱暴に開かれ、下着と谷間が見えている。スカートはホックが半端に外れてずり落ちそうになっていた。アホだバカだとは思っていたが、まさか脱ぎ方を忘れて力づくで脱衣を試みたのだろうか。

嗚咽を漏らすたゆの体から布という布を剥ぎ取って、浴室に押しやった。

「沸かすのは面倒だしシャワーで我慢してね。たゆ、離して？」

「いつ、ぐすつ、うえつ、いっしょ、いっしょに……っ！」

「えー……どうしても？」

ぶんぶん首を縦振りするたゆ。仕方ない、ギャン泣きされるよりマシだろう。スウェットと下着を脱ぎ散らして浴室へ。人前で裸になるのは初めてだ、ちよつと緊張する。

熱いお湯がシャワーヘッドから降り注ぐ中、たゆは私をぬいぐるみか何かみたいに抱いて、床にへたりこんだ。これは素晴らしい。全身がふよふよした感触に包まれて蕩けそうだ。ちよつと窮屈だけど、女に抱かれるのは悪くない。

そんな私の多幸感はしかし、涙まじりにたゆが語ったドロドロ闇深エピソードに根こそぎぶつ飛ばされてしまった。

いわく、たゆは数ヶ月前まで母子家庭だった。母親は夜の仕事に従事し、たゆとはほとんど顔を合わせない。

そんな母親がある日、若い男を家に連れてきた。男は学校に出るたゆと鉢合わせるたび気味の悪い笑みを浮かべ、母親はそれに気づく様

子もなかった。

男が家に通いだして数日経った頃、母親は「あの人と再婚したから」という。寝耳に水だった。大いに動揺するたゆには取り合わず、母親はその男と笑い合っていた。

そうして男が当然のように家に居座り始めて一ヶ月——すなわち今日のこと。帰宅したたゆを男が押し倒した。目的は言わずもがなだ。

一応、たゆは五年間戦い続ける魔法少女だ。パニックになりながらも男の手から逃れ、母親に連絡を入れた。電話口の母親は迷惑そうな雰囲気を感じそうともせず話を聞き、唐突に激昂した。「あの人がそんなことするはずない、お前の方から誘惑したんだろう、淫乱売女」そのような罵倒を耳にした後から記憶があやふやになり、気がつけば私んちの玄関で泣いていたという。

「人類、怖っ」

14歳の女の子にどうすればこんな仕打ちができるんだろう。怖い。

魔族は人類の負の情念が具現化したものだから、みんな心がきれいで優しいなら何も生まれねはずだけど。この調子じゃ生まれ放題だろうな。

とりあえずたゆの気の済むまで泣かせておく。下手な慰めで誤魔化せる感情じゃない。好きだけ吐き出すといい。

のぼせないようシャワーを止めたり出したりして一時間弱。

やっと落ち着いてきたたゆが、鼻をすすりながら、

「すんっ、ごめんなさいお姉さん……こんな話聞いても迷惑ですよ……」

「いや別に。それより落ち着いた？ 大丈夫？」

「はい、もう平気で……あっ」

「何どうしたの？ あーはいはい、そんなに赤くなんないですよっちまで恥ずくなるでしょ」

首を捻って見てみると、たゆは耳まで真っ赤にして固まっていた。裸で抱き合ってるのを思い出す程度には冷静になったみたいだ。こ

れなら話を進めてもいいだろう。

「もう面倒だしこのまま話そう。これからの話だ」

「こっ、これから、ですか」

「そう。とりあえず君、今からここで暮らしな」

「……え？」

「部屋は余ってる。お金もたくさん。学校にも通えばいい、手続きはこっちで簡単にできるし、必要な荷物は私が後で取りに行く。どうせ他に行くあてもないでしょ？」

「で、でも、どうして」

「このまま君を帰したら、何食べてもまずいし夜の寝付きも悪くなる。単にそれだけ」

面倒な性格なのは自覚している。地球の裏側で何万人の子供が餓死していても私は余裕で惰眠を貪れるけど、目の届く範囲で誰かが苦しんでいると我慢できない。恐ろしくモヤモヤして何も手につかなくなる。損な人格に生まれてしまった。

何か考えているのか、浴室にしんと沈黙が落ちる。

私の首元に回されたたゆの両腕が震えている。顔を伺おうとする直前、その腕がきゅつと絞まった。痛い痛い、体格差を考えろ。

「ずるい。ずるいですよ、お姉さん……」

掠れた吐息みたいな囁きが湯気に溶けていく。もう一泣きくるかもしれない。

時間の浪費は好物だ。私はたゆに体を預け、気の済むまで付き合ってた。やった。

――

「お姉さん、行ってきますー！」

「いえあーい」

ベッドの中でスマホを惰性でいじりつつ、自室の外へ投げやりに戻す。がちやんと扉が閉まり、軽やかな足取りが徐々に遠ざかる音が聞こえた。

そのまま体がだるくなるまで惰眠を貪り、起きると午後一時。キッチンで電子レンジをチンして数分後、中身のお盆を取り出してリビングの食卓へ着く。

「いただきます」

今日のご飯は白米、味噌汁、鮭の切り身、切り干し大根とたくあん。先週と比べるとずいぶん腕を上げたな。作り置きを冷蔵庫ではなくレンジに置いておく気遣いもありがたい。私は面倒が嫌いだ。

たゆがここで暮らし始めて一週間。私の生活リズムもあつて顔を合わせる時間は以前と変わらないけれど、一番変わったのがこれ、食事だ。

『お姉さん、冷蔵庫がコーラと冷凍ピザで埋まってるんですけど……』

『好きだけ食べな。レンジはここね』

『とか言いながらそのまま食べてるっ!?!』

『チンすんのだるい。慣れたらおいしい』

『待ってくださいまさか三食これ? 何かの修行ですか?』

『不摂生は気持ちいいのさ。あと学校帰りにコンビニで脂っこいの買ってきてよ、できるだけ体に悪そうなやつ』

『ええー……』

『ドン引きしないでよ。ああそうか君、成長期だもんなあ』

『そーゆー問題じゃないですよねえ!?!』

三食とおやつ共にピザとコーラでいける私と違って、中二のたゆは成長期だ。不摂生と不健康で気持ちよくなってはられない。それで体調を崩したらモヤるのは確実だ。急遽スーパーの宅配サービスで食材を取り寄せ、栄養満点のちゃんとした食事というものを作ることにした。

『ごりやひどい。料理というか一種の死体損壊に見えるね』

『お姉さんだつて同じようなもんじゃないですか』

『わっはっは』

しかし私もたゆもろくに包丁を握ったことすらなかったため、当初は出来上がったタンパク質と繊維質のスクラップめいた何かに乾いた笑いを浮かべたものだ。およそ三日かけて私たちは、無駄な考えは

捨ててスマホのレシピ通りに作れば不味くはならないとの真理に到達し、たゆが私の後を継いだ。私は飽きた。

食事はたゆが用意してくれる。洗濯も掃除もやってくれる。週一のコンビニ爆買いもたゆをパシる。私は食べて寝るだけでいい。何一つ生み出さない無駄な生活はサイコーだ。

「うちそうさま」

食器をシンクに運んでから、ソファに体を投げ出す。見る気も起かないテレビをつけっぱなしにして、スマホのブラウザでどんどん時間を無駄にする。スマホで見るのはもちろん、無価値なゴシップや便所の落書きに等しい匿名投稿、信憑性皆無のデマ、その他あらゆる低俗な情報群だ。見るだけで人生をドブに捨てている感がたまらん。

冷蔵庫から飲みかけのコーラを持ってきて、空にしてその辺に捨てる。たゆが捨ててくれるだろ。

『やつほーみんな★ みんなの味方で魔族の敵、魔法少女レッドグラッジだよっ★』

「うるせえ」

テレビから怪音波めいた高い声が響いた。見てみると、前のドキュメントに出ていた赤い魔法少女が笑顔を振りまいている。

『魔族皆殺すべし★ でも魔人と人を見分ける自信がない？ そんなアナタでも大丈夫、魔人にはおぞましい角が生えてるよ！ 角の生えた不審者を見つけたら、ご覧の番号へ通報してねっ★ みんなで力を合わせよう★』

『魔族必殺機構は、この活動を支援しています』

魔族皆殺すべしー、と耳に残るメロディ。角の生えた黒い影のピクトグラムと通報先の番号を最後に次のCMへ。こんなもんが地上波に流れるとは世も末だ。

それからは特に変化もなく、無目的に無意味なネットサーフィンを続ける。お昼を食べたからか、うとうとしてきた。

「ただいまーす」

はっとして顔を上げると、リビングに西日が差し込んでいた。テレビは夕方の情報番組、時刻は午後五時。うたた寝していたみたい。

とたとた軽やかな足取りで、制服姿のたゆがやってくる。

「おかえり。いつもより遅いね?」

「商店街で魔物が出たので、ちよつと倒してました」

「ほーん」

「あつ、またペットボトルポイ捨てしてる! 行儀悪いですよ、自分で捨ててくださいね!」

と、口では言うけど私は知ってる。どうせもう二、三本追加で置いてればぶつくさ言いながらたゆがやってくるんだ。私は何もせん。

おぎなりの唸り声で空返事をしていると、たゆは深くため息をついた。

「まったくもー。お夕飯何がいいですか?」

「何かまずくないもの」

ソファの向こうでたゆが弁当箱を出し、自室に引っ込んで部屋着に着替え、冷蔵庫の中身を見ながら唸っている音が聞こえた。

晩ごはんはたらこスパゲッティとサラダだった。特に何も思わない程度の味。

たゆが食器を片付け、お風呂にお湯を張っている間。この時間を私は一日で一番楽しみにしている。

「たゆう」

「はいはい」

たゆがソファに座り、その太ももの上に私が腰を下ろす。対面で抱き合うとたゆの柔らかさと温もりが直に伝わってくる。背中と頭をゆっくり撫でてくれるのも気持ちいい。

あのとときお風呂で抱き合い、判明したことだ。女を抱いたり抱かれたりするのは素晴らしく心地いい。

「こんなに甘えん坊なんて知りませんでした」

「甘えてるわけじゃない。ただ気持ちいいだけ」

「そですか。ねえ、お姉さん」

「おん?」

「お姉さんって、結局何してる人なんですか?」  
なんだ急に。

黙って先を促すと、たゆは言葉に詰まりながら続けた。この町にたゆ以外の魔法少女はおらず、しかし近隣地区にも私っぽい魔法少女はいない。魔法少女ではないはずなのに、私は学校にも通わず通信制の形跡もなく親や援助の類もない。そのくせびつくりするくらい怠惰に時間とお金を浪費している。共に暮らす中で疑問は深まるばかりだった。すなわち、

「貴様は何者だ、ってマンガみたいに言ってほしかったぜ」

「いやあの、もちろん言いたくないなら大丈夫ですけど……」

「じゃあ言わない。めんどくさいしどうでもいいでしょ」

お風呂が溜まるまでは五分もない。その間の気持ちいい時間を脳死で味わっていたのだ。もはや脳みそのリソースをわずかでも使うのがめんどくさい。

柔らかい、温かい。中二美少女のいい匂い。バクバク、となぜか激しい鼓動を感じる。吐息が首にかかってくすぐったい。背中をさする手の感触が、少しずつ下の方に伸びて――

「っん、ひうつ……!」

「お、お姉さん!」

爪先から頭まで、びりつと衝撃が走った。自分の声とは思えない熱っぽい音が口から漏れる。

なんだこれ。伸びをしたときの気持ちよさを、何百倍にもしたような。なんかお腹のあたりがぼかぼかする。足の指が勝手に丸まる。

「お姉さん……?」

「たゆ、それ、だめ……っ!」

たゆが耳元で囁き、その手が尾てい骨の辺りで動くと、小刻みな快感が体を突き抜ける。

もう気持ちよすぎて怖い。ふらつきながらどうにか体を離して、逃げるように自室へ向かう。たゆの心配げな視線を背中に感じる。

私は少し触られただけなのに、前後不覚で一切の余裕がなくなるくらいに動揺していた。

だからだろう。突然の浮遊感と、ぐるりと回る景色に、まったく反応できない。視界の隅に舞うペットボトルは、お昼にポイ捨てしたも



のだ。自業自得の足元不注意、踏みつけてすっ転んでいる。

「うきやんー！」

お尻を打ち付け、涙が出てくる。こんなに痛いのは生まれて初めてだ。

「お姉さんっ、だいじょう——えっ?」

たゆが立ち上がって呆然とこちらを見つめている。その様子から私も、靴下を脱いだのとよく似た開放感を覚え、事態を察する。魔法が解けた。

おそるおそるベランダの引き戸を振り返る。外が暗いから鏡のよううにリビングの光景を反射している。

そこに写った私の頭には、

「っ、つつっ、角お!？」

おぞましくねじくれた、一對の角が生えている。

「たんこぶ、って言い訳は一周回ってアリかな?」

「何周回ってもないと思いますよっ!」

ダメか。

——

ツツコミが聞こえたと思った次の瞬間、私は床に押し倒されていた。

馬乗りになったたゆはパステルカラーの装束をまとい、ハートを象った大剣の切っ先を私の喉元に突きつけている。両腕が膝で抑え込まれて私は動けない。

瞬時の変身と制圧。頭ゆるふわなアホ巨乳に見えてもさすがに抜け目ない動きをするものだ。

だけど精密な動きとは裏腹に、たゆの顔には困惑の色が強い。しきりに瞬きをして言葉を探すように口をパクパクしている。

「何してんの、後一息だよ。すっごい模範的な動きだったじゃん。サクツとぶっ刺しちやいなよ」

「な、えっ、なん、なんで……?」

「ただし、刺すのは首じゃなくて胸だからね。人でいう心臓のところにコアがあるから——」

「ごしやつ、と破砕音。」

大剣が顔の横に突き立てられ、フロアリングが捲れ上がっていた。こつわ。戦うのも痛いのも嫌だけど死ぬのが怖くないわけじゃないんだぞ。今にもちびりそうというかちよつとちびつた。やるならひと思いにやってほしいお願いだから。

縮み上がる私にたゆはうわごとみたいに畳み掛ける。

「待つて待つてほんとに待つてください、えつ、お姉さんその角と魔力、魔人なんですか？ 魔族なんですか？」

「そ、そうだね。魔族の上位個体の魔人ちゃんだね。魔法少女の敵だ」「じゃあ、じゃあじゃあ……全部、嘘だったんですか？ 私に優しくしてくれたのも、受け入れてくれたのも、ここに居ていいと、言ってくれたのも全部……！ 私を騙してバカにしようとして……」

「う、ぐ……」

しなやかな指が私の首に食い込んでくる。苦しい。ためらいと怒りに震える手先のせいで失神することもできず、拷問に近い時間が過ぎる。魔人とはいえ普通に苦しいのに。

視界がチカチカしだしたとき、ようやく力が弱まる。こちらを見下ろすたゆの顔は悲痛に歪み、涙で濡れていた。泣きたいのはこつちだよ。

やがてたゆはひとりでに変身が解け、咳き込む私にすがりついて嗚咽を漏らし始めた。面倒くさい、世話が焼ける。

「無理だよう……だつてお姉さんだもん……初めて認めてくれた人だもん……」

床に押し倒された体勢では動くこともできず、落ち着くまで頭と背中を撫でてやるほかなかった。

——

小一時間後、私たちはテーブルを挟んで向き合っていた。大剣に穿

たれたフローリングは逆再生をかけたようにゆっくりと自己修復しており、たゆが息を呑む。

「これって……」

「魔人の権能。魔法少女という魔法だね。怠惰の魔人ちゃんは何もしないために全力なんだ」

「怠惰の魔人？」

「そう。何もしたくない、が私の本質」

また痲癩を起こされても困るので、隠していたことをすべて明かす。

まずは私の正体についてだ。

「たとえば君は朝起きたとき、学校に行きたくない、面倒くさい、だるいと思ったことはある？ 友だちとの約束をすっぽかして昼寝してきたとか、やるべきことがあるのにやりたくないとか。でも人間って、そういう気持ちを押し込めて真面目に生きるよね。そのとき押し込めた怠惰な気持ちが集まって、私になったってわけ」

だから怠惰の魔人。真面目な人たちが見えないふりをして押し込めた、ダラダラしたい気持ちの集まり、それが私だ。

たゆはしばし考え込んでから、

「殺意の魔人と比べてめちやくちやしよーもないですね……？」

「ほっとけ」

このムチムチ巨乳中学生ひっぱたいてやろうか。

ちなみに衣食住が充実しているのも魔人の特別な権能のおかげだ。何もしたくない思いの結晶である私は、何もせず怠惰に過ごすための環境を整える力に特化している。その力のおかげで一生お金には困らないし病気にもならない。登記の不都合や周辺住民の認識は勝手に辻褄が合うよう改ざんされ、私は脳死でダラダラ生きることができる。

「君に隠してたのは、立場上さつきみたいなことになるのが面倒だったのと……あと、角出しっぱだと寝返り打てないから、普段から隠してんのよ。目立つし」

私はおぞましくねじれた一對の角に手を添え、魔法をかけて消した

り生やしたりしてみる。

「だから君を騙そうとか、バカにする意図はなかった。以上、おっけー？」

「おっけー、ですけど……その……」

「何？ 抵抗はしないけど殺すなら痛くないようにしてよ」

「も、もうしませんよっ！ あのあの、ごめんなさい！」

「うるせえ！ ウジウジすんなだるいうざいめんどくさいっ！」

「ひっ」

どうせさっきの暴力行為を謝りたいんだろうけどもうだるい。魔法少女としては正しい行動だったし結局今はやる気をなくしてるし、それならもう終わりでいい。これ以上シリアスな話し合いなんてやってられつか面倒くさい。

私はソファに身を投げ出してテレビをつけ、スマホいじりを始めた。

「さっきとお風呂入ってきなさいよ。てかお湯止めた？ 溢れてんじゃない？」

「は、はいっ……お姉さん、一つだけ」

「何」

「何もしたくないのに、なんで私を助けてくれたんですか？」

馬鹿げた質問だ。ひどく不安そうに声を震わせて、真剣に聞いてきた割には、答えの分かりきった無駄な問いだった。

「一人で泣いている子供を放っておくわけがないでしょ」

それこそ悪名高い殺意の魔人でもないかぎり、同じ状況なら誰だって声をかけていたはずだ。知らんけど。

たゆはちよつと不服そうに眉をひそめた後、くすりと微笑を漏らしてお風呂の方へ身を翻した。

――

魔人バレをきっかけに、たゆは私から距離を取るはずだった。

だって魔法少女と魔人は水と油、お互い殺し合ってしかるべき関係

だ。いくら私が何もしない魔人とはいえ、多少気ますぐなるくらいは覚悟していた。

が、実際は正反対だった。

「えーっ、二歳!?! ほとんど赤ちゃんじゃないですか!」

「赤ちゃん言うな」

「サバ読みすぎですよ、こんなにしつかりした二歳いるはずないですって」

「私、魔人ぞ? 情念集合体だから知識や価値観は生まれつき成熟してるわけ」

「じょう……? なるほど、すごいです!」

たゆは翌日もその次の日も変わらず学校へ通い、家では私に実年齢や魔人の生態についてぐいぐい質問してくるようになった。余った部屋を私室として貸しているのに、リビングで私と話す時間はむしろ増えた。

私を膝枕したり対面で抱いたりしながら話すのだけど、何が嬉しいのかたゆはずつとニコニコしている。不思議になって聞いてみると、「お姉さんのことがたくさん知れて嬉しいんです」だって。まあ変に気遣わなくてよくなった分、こっちも気が楽だ。

ただ、スキンシップが激しくなりつつあるのには少し参っている。お風呂やベッドを共にするのはまだいい。問題は触られる部位だ。

「やっ、んん、そこだめ……っ!」

「お姉さん、ここが好きなんです。かわいい声……もつと聞かせてください」

「だめ、って言うてんでしょーが!」

「いだあ!?!」

対面で抱かれているとお尻の少し上、尾てい骨のあたりをまさぐられる。指先でこりこりされながら耳元で囁かれると、気持ちよすぎてヘンな気持ちになるし、お腹のあたりがムズムズするしでちよつと怖い。やめてと言ってもしつこく続けるもんだから毎回たゆの太ももをつねって脱出している。たゆは少し意地悪なところがあるみたい。

しかし毎回そうされるとは分かっている、抱かれる誘惑に負けて

乗ってしまうあたり、私も結構アホかもしれない。女に抱かれるの好き。

そうして食べて寝てたゆに抱かれて、怠惰の魔人としての生を満喫していたある日、異変が起きた。

「たゆ、遅いな……」

時刻は午後六時。すでに日が落ちて外は暗い。リビングにはポイ捨てしたコーラのボトルがもう三本も転がっていた。

いつもなら一本捨てた時点でたゆが居る。学校帰りに食料品の買い出しと魔法少女活動をこなして五時には帰ってくるのだ。まさか今更両親に絡まれたり、魔族に苦戦していたりするのだろうか。

気づけば私は着の身着のまま、つつかけを履いて外に飛び出していた。

魔物は人の多く集まる場所に生まれる。このあたりなら駅前、商店街、繁華街あたりか。近いところから順に回っていこう。

いやいや、そんなことして何になる。仮にたゆが魔物に苦戦しているのを見つけたとして、怠惰に過ごす力しか持たない私では何も出来ないし、何かしたいとも思わない。だって何もしたくないのが私なんだから。

「たゆ先輩、ちよーかつこよかつたつす！」

「えへへ、そですか？」

マンションを出てすぐ、あいつの声が聞こえた。

声の元は、たゆと初めて出会った公園のベンチだった。そこにたゆと同じ制服の少女が並んで座っている。

「そーつすよ！ あんなに気持ち悪い触手オバケをこう、ズバーつと。憧れちやうつす！」

「まーこれでも経験だけありますし？ 日刊ランキングにもそこそこ邪魔してるので、あれくらいはねえ、えへえへ」

たゆは鼻の下を伸ばして照れているようだ。なんか腹立つ。

木立に隠れて聞いていると、事情が分かった。話し相手の少女は中学一年の赤井さん。魔物に襲われていたところをたゆに助けられ、今は感謝のあまり話が弾んでいる状態らしい。

「たゆ先輩みたいなかつこいい先輩がいる町に来られて良かったつす！先輩は地元の誇りつすね！」

「ほめても何も出ないですよ……えへ、この時期の転入なんて大変でしょう。困ったことがあったら何でも、このたゆ先輩に頼ってくださいね！」

「ありがとうつす！」

赤井がたゆを持ち上げてたゆがくねくねするとかいう地獄みてえに退屈な会話がようやく終わり、二人が立ち上がる。私も大急ぎで自室へ取って返した。

その日の夕飯の気分は最悪だった。聞いてもないのにたゆが赤井を助け出したことを語ってくるのだ。

「壁際に追い込まれた赤井さん！そこに颯爽と現れたのが、そうこの私、パステルエエツジっ！」

「うるせえ」

「まあそう言わずに、ここからがすごいんです。私は勇ましく剣を振りかざして——」

大仰な語り口の戦闘シーンまでは良かった。だけどその後、赤井が季節外れの転入生だとか不慣れな町なので道に迷っていたとかかわいい後輩ができたとか、そういった話に差し掛かったとたん、イライラとモヤモヤが頂点に達した。

「ごちそうさま。今日はもう寝る。一人でね」

「えっ、抱っこ……」

「抱くのもお風呂も今日はなし！おやすみ！」

「ふええー!?!」

部屋の扉を閉める直前、涙目で追いつがってくるたゆを見ると、不思議とスツキリした。

——

あの巨乳と尻と顔以外に大した取り柄のないアホアホ魔法少女。パステルエエツジことたゆは、事あるごとに赤井について話すようになって

た。学校で会うと声をかけてくれるとか、クラスではうまくやれてるみたいとか、魔法少女の活動に興味があるとか。聞いてねえよ畜生。

「あの一、お姉さん?」

「何?」

「角が当たって痛いです」

「おらおら」

「いだだ痛い痛い!」

そんな話を聞きたび引きこもりたくなるけど、たゆが寂しそうだから妥協して角を体にゴリゴリさせている。いつも私の弱いところを触ろうとする仕返しだ。他意はない。

「んもー、最近のお姉さん変ですよ」

「だって魔人だもん。人からすれば変にも見える」

「屁理屈だなあ。あ、そうだ。赤井さんがですね、私んちに遊びに来たいらしくて。つまりはこのことなんですけど」

「ケンカ売ってんの?」

「痛いっ、なんでえ!」

知るか。私だってどうして赤井の話を聞きたびイライラモヤモヤするか分らんわ。

「あつ、でもお姉さんその顔っ、かわいいです! ほっぺたぷくーっつけてますっついていいですか!」

「君はどうやら死にたいようだな?」

「いだあああ!」

こつちの気も知らないで、たゆは私の反応を楽しんでいるようだ。角で抉れて死ねばいいのに。

たゆが遅くに帰ってきて、言葉と角を戦わせて、赤井と呼ばれる転入生に苛立ちを深める。その毎日慣れてしまえば案外悪くなくて、ちよつとずっと遠慮のなくなってきたたゆとの距離感は私も気に入っていた。赤井への苛立ちを抜きにすれば、普通に楽しくてバカみたいにも何も生まれない、怠惰の魔人らしい非生産的な日々だった。

唐突に魔人として生まれ、唐突にたゆと出会い、始まった楽しい毎日。



だからこそ、それが壊れるのもまた唐突だった。

――

また、たゆの帰りが遅い。

ベランダに出ると藍色の空が頭上に、眼下には街灯と斜陽でうすぼんやりとした町並みが広がる。その中から聞き慣れた女の甘ったるい声が聞こえた。糖分の滴る音波と言っても過言ではないその声は間違いなくたゆのものだ。

話し相手はというと、最近おなじみの赤井。こっちはきんきん甲高い声で最上階まで聞こえてくる。先輩後輩同士まーた仲良く話し込んでいるらしい。

そう理解したとたん、モヤモヤとイライラが爆発した。部屋を飛び出し、エレベーターを待つのももどかしくて階段を駆け下りる。

もう我慢の限界だった。たゆはうちの子であり私のものだ。魔法少女に助けられた大多数のうちの一人に過ぎないだろうに、あの赤井とかいうガキはうちの子に構いすぎだ。いいかげん文句を言ってやらんと気がすまない。

玄関ホールを飛び出し道路を横切って、たゆと出会った公園にズカズカと踏み入っていく。もちろん角は魔法で隠しているけど、ジョギングや散歩にいそむ近所の連中が私の迫力にびびっているのか、視線を投げかけてくる。

私は何もしない怠惰の魔人。だけど何もしないでは安心が必要だ。不安要素でしかない赤井には退場してもらおう。

二人の座るベンチへ近づいていく。たゆが気づいて不思議そうに首をかしげた。

赤井はたゆの視線を追って振り返り、私と目が合う。

瞬間、赤とパステルカラーの旋風が吹き荒れた。

「……は？」

「魔法少女だ！」「本物？」「本物だよ、ありやパステルエッジと」「あの衣装ってもしかして……」

コマ落ちした映画、もしくはラグから復帰したライブ配信というベ  
キか。ベンチに座っていたはずの二人が、なぜか私の眼前で鏢迫り合  
いをしている。突然の魔法少女登場に周囲がざわめくのがどこか遠  
くで聞こえた。

たゆはパステルカラーのひらひらした衣装で、ハートを象る大剣に  
ぎりぎりと力を込めている。

相対するは、見覚えのある赤黒い魔法少女だ。黒のレオタードに赤  
いレースとフリルをあしらったその姿は、浮き出た腰骨と広い肌色面  
積が色っぽい。魔法の武器は長大な槍、いや、穂先に三日月型の横刃  
を備えた戟だ。鮮血のような赤地にマール状の黒が散らされ、その  
色合いは血流のように流動している。

獰猛な赤。その中でさえ輝く満面の笑みで、そいつはたゆの向こう  
からこつちを覗き込んだ。

「見つけたよっ、魔人ちゃん★ あなたは随分隠れんぼが得意なんだ  
ね★ のこのこ出てきてくれてありがとう★」

「ど、どういうことですか!?! え、だって赤井さん、なんで、ていうか  
その格好その魔力……!?!」

「どういうことってこつちが聞きたいんだけど、うん、改めて自己紹介  
だねっ★」

がきん、と激しく火花を散らし、鏢迫り合いの両者が距離を取る。  
たゆは私をかばう位置に立ってくれた。

赤井と呼ばれた女は、脈動する戟をくるくると片手で弄びながら、  
歌うように告げる。

「みんな大好き魔族必殺★ 殿堂入り魔法少女のレッドグラτζジちゃ  
んだよ★ 黙っててごめんねたゆちゃん★」

レッドグラτζジ。テレビを垂れ流しにしていると一日一回は必ず  
出てくる、おそらくこの国でもっとも有名な魔法少女だ。テレビで見  
かける魔法少女としての印象が強く、変身前の赤井と結び付くことが  
なかった。

では正体を隠してまでなぜたゆと接触していたのか。大方予想は  
つくな。

「グラは鼻がいいの★」

レットグラッジは形のいい鼻を指差す。

「でもね、魔人の匂いを追ってこの町に来ただけで、居場所がぜんぜん分かんないっ★ その手がかりがたゆちやんだったんだよ★」

「わ、私ですか？」

「うん★ あんまり匂いが強いから、てつきり魔人が魔法少女に化けてるかと思って、様子見してたんだ★ そしたらびっくり、たゆちやんが魔人を匿ってたんだね★」

「え、いや匿ってるというか」

「いいのいいの、細かいことはどうでもっ★ 肝心なのは、目の前に魔人がいるってことだもん★ つまり——死ね」

不意に、赤とピンクの閃光が瞬く。二人はまたも大剣と戟を切り結んでいた。

動きが速すぎて何も見えない。

「うーん、困ったな★ グラは魔法少女ちゃんと戦う気はないんだけどな★」

「じゃ、じゃあ話し合いましょう！ 大丈夫、お姉さんは悪い魔人さんじゃないんです。怠惰の魔人といって、ただダラダラするだけのかわいい生き物で」

「どうでもいいよっ★」

二人の姿がブレる。パステルカラーの光の帯と、炎のように揺れる赤い光が絡み合い、交差し、またも鏢迫り合いの体勢で現れる。たゆの額に汗が浮かび、一方のレットグラッジは貼り付けたような笑顔のまままだ。

「魔族は悪いことをするから悪いんじゃない、魔族であることが悪いんだよ★ コアの情念が何であろうと必ず殺す。それが魔法少女。我々の果たすべき使命」

「な……お姉さんっ、逃げて！」

距離を取ったレットグラッジが柄の突端を握り、馬鹿げたりーチの戟を振り回す。赤黒い暴風雨のような連撃にさらされながら、たゆが叫んだ。

言われずともそのつもりだ。この赤い魔法少女はどうかしている。たゆが食い止めている間に逃げないと。

幸い、レッドグラッジの鼻も全能じゃないらしい。私の部屋にこれだけ近づいてもすみかを特定できなかったのだから。おそらく一度距離を取れば、怠惰の魔人としての権能で撒くこともできるはずだ。私は死ぬのも痛いのもできればヤダ。

くるっと背中を向け走り出そうとしたそのとき――

「邪魔立てするなら殺す。魔法少女も人間も関係ない。魔族は必ず殺す。殺す殺す殺す」

「きゃあっ!?!」

刺すような殺意と痛々しい悲鳴が、私の足を縫い止めた。

「覚醒もしてないひよこちゃんが凶に乗っちゃダメ★」

振り返ると、戦いが決着するところだった。レッドグラッジが下段突きから素早く戟を引き、横刃にたゆの足を巻き込む。足を払われたたゆに一步で詰めたレッドグラッジが、たゆの首を片手で絞めにかかった。

たゆは武器を手放し、つま先立ちを強制されて苦しげに足をばたつかせている。このまま放っておけば殺されるだろう。レッドグラッジなら本当にそうする、と確信があった。

「だけど私は何もしない。何も出来ないし、頑張れない。」

私は怠惰の魔人だ。真面目に頑張らないと生きていけないかわいそうな人類が託した、頑張らないための存在だ。魔人の権能で場を脱し、何もせずのうのうと生きるのが私の役割なんだ。

「そのはず、だったのに。」

「いったーい★」

「けほっ、ごほ……おね、えきん……?」

気づけば勝手に動いていた。足元の砂利から石を拾って投げつける。レッドグラッジの頭に当たり、たゆが解放されてえづいている。

私はなぜかそのまま、レッドグラッジの方へ歩を進めていく。赤黒い笑顔の死が少しずつ間近に迫る。

「お姉さん、ダメです……」

「あっち行つててね★」

「……っ」

レッドグラッジはたゆの胸ぐらを掴みあげ、力任せに公園の外へぶん投げた。乱暴なやつだ。

文句をこらえて進んでいくと、間合いに入った瞬間に戟を突きつけられた。眉間のすぐ先に、脈動する赤黒い切っ先がある。

「潔くって感心、感心★ 言い残すことはある？」

「たゆに手を出さないで」

レッドグラッジの表情から笑みが消え、きよとんと目を見開く。すぐに元の貼り付けた笑顔に戻って、

「もちろん★ 魔族を殺す邪魔をされない限りは、誰も傷つけないよ★」

「じゃあいいさ。核はここだ、よく狙つてよ」

「まっかせてー★ 死ね」

私がとんとんと胸を叩いてやると、レッドグラッジが大弓を引絞るみたいに戟を腰だめにして。

全身を貫く刹那の激痛。次いで命が碎かれる絶望的な実感を最期に――すべてが黒く染まった。

――

由立たゆのもっとも古い記憶は、寒いベランダだった。膝を抱えて寒さに震えているのに、扉は開かない。開けてくれない。次の日風邪を引いて寝込んだけれど、誰も一緒にいてくれなかった。

物心ついたそのときから、たゆは寒さと寂しさに満たされていた。自分は誰にも必要とされていない。幼くして諦念と達観に満ちたたゆを誰も遠巻きにした。

魔法少女のランキングはその孤独を多少なりとも和らげてくれた。たまたま才能があったために成り行きで始めた活動が、五年目にしてランキング圏内に浮上。存在が認められた気がしてたまらなく嬉しかった。

だからこそ初めてランキングが下がったとき、たゆは絶望した。こ  
こでも必要とされていけない。居場所なんてない。記憶に刻まれたあ  
の寒さが全身を襲い、ただ震えるしかできなくなった。

「へ……？」

その寒さを癒やしてくれたあの人が。存在を肯定してくれたあの  
人が。

どうして大きな槍に貫かれているのだろうか。

投げ飛ばされたたゆが焦燥に息を切らして公園に戻ってきたとき、  
事はすでに終わっていた。

呆けたたゆの眼前で、レッドグラτζの戟が引き抜かれる。あの人  
の小さな体は、光の糸が解けるように崩れ、宙空へと消失していった。  
後に残ったのは地上波でよく見る赤い魔法少女と、公園の周囲に集  
まったざわつく野次馬たち。それから茫然自失のたゆである。

「魔人、討伐！ みーんなー★ この町に隠れていたこわーい魔人は、  
今やっつけたからねっ★ もう安心だよ★」

「うおおおおー！」「レッドグラτζさんありがとー！」「えっ、魔人が隠  
れてた!? こっわ」「パステルエツジちゃんはどうしちゃったんだ  
……？」「魔人をかばってたよな」

「パステルエツジちゃんを責めないであげて★ 魔人のせいでちよつ  
と魔が差しちやったみたいなの★ ねっ、そうだよね？」

歓声に湧く野次馬。輝く笑顔を向けてくるレッドグラτζ。

ようやく理解の追いついたたゆは、ぞつとした。その感覚はあのと  
きの寒さだ。あのととき、誰からも必要とされず、誰も隣にいてくれな  
いことを悟ったベランダで味わった、あの寒さだ。

激情に反応したパステルカラーの大剣が光り輝き、たゆの手元に飛  
来する。掴み取ると同時、力任せに振り抜いた。

「うああああっ!!」

「あれれ★ どうしちゃったのかな★」

淡い三日月型の光波が、尾を引いて刃から射出される。何度も何度  
も。レッドグラτζは首をかしげつつ、軽やかなステップだけで回避  
していく。

いくら剣を振っても、たゆの心は冷え切ったまま温まることがない。

パステルカラーの光波は徐々に黒く濁り、一撃の速度と密度が右肩上がりに上昇していく。

たゆはすでに思考を放棄していた。感情のままに力を振るう。

素早い二連撃で光波を飛ばし、そのうち一つの影に隠れて距離を詰める。飛び道具に追い継れるほどの俊敏性で、瞬く間にレッドグラツジへ肉薄した。

光波からするりと抜けて、レッドグラツジの背後へ。その心臓目掛けて大剣を突き出した。

「あつぶなーい★ パステルちゃん、闇堕ち寸前だねっ★」

しかし届かない。

レッドグラツジは戟のひと薙ぎで光波を迎撃しつつ、振り返りざまに足を大きく振り上げ、たゆの大剣を踏みつけた。前につんのめるたゆ。

普段なら、さすが殿堂入り魔法少女はすごい、と素直に感心していただろう。

だが今のたゆは、寒くて寂しいとしか考えられない。踏みつけられた大剣を必死で持ち上げようと力を込めながら、嗚咽を漏らす。

「なんでっ……どうしてお姉さんが、殺されなきゃいけないの……悪いことしてない……私を助けてくれたのに……!」

「繰り返すけど、魔人だからだよ★ 存在が悪い★ 助けてくれたっていうか、それって弱ったところにつけこまれたんだと思うよ★ 魔人はそういうこと平気でやるから★」

「うるさい……っ」

「優しさが欲しい人に優しさをあげる★ 怖いよね、魔人★」

「うるさ——」

「もういいから黙れ」

問答の間に、レッドグラツジはぬかりなく動いていた。するりとたゆの懐に入り、たゆのみぞおちに拳をめり込ませる。呼吸困難に陥り、たゆは崩れ落ちた。

ざわつく観衆に、レッドグラスが笑顔で告げる。

「怖かったあ★ まだ魔が差してみたい★ 今ので心を浄化したから、今度こそ大丈夫だよっ★」

「ありがとう、レッドグラス！」魔法少女同士の戦いなんて初めて見た」「やっぱりトップランカーは違うな」「パステルエッジはもう見た目以外いいとこなしだ」「魔が差したんだから仕方ないよ」

観衆の声が遠ざかっていく。

酸欠に喘ぐたゆを、レッドグラスは一瞥する。笑顔の中に路傍の石を見るような冷たさが垣間見えた。

たゆの霞む視界の中から程なくレッドグラスが退場し、ついで観衆のざわめきが潮の引くようになっていく。数分後、その公園にはたゆ一人だけがぼつんと取り残されていた。

誰にも声をかけられることはない。たゆは魔法少女にもかかわらず魔が差し、魔人を庇い立てした挙げ句より強い魔法少女に成敗されたのだ。かける言葉などあるはずもなかった。

「うつ、うつ、うつ、うつぐ……」

体を引きずってベンチにすがりつく。無駄とは分かっているても涙は止まらなかった。

どうしようもない寒さと寂しさ。それはどこにも居場所のない確信であり、たゆがそれを味わうのは三度目だった。最初はあのベランダで、次はランキングで順位の下がったあのと看で、その次が今だ。

世の中は優しくない。一人ぼっちで泣いている誰かに構うほど、人は暇ではないのだ。

「君さあ、泣き虫か？」

「ふえっ？」

だからこそ魔人が生まれる。頑張ることに必死な人たちの分まで、優しくあるために。

「泣くならせめて部屋に戻ってからにしなさいよ。マンションすぐそこなんだから」

「なん、で……」

顔を上げたそこには、魔人がいた。



初めて会ったときと同じ、だぼついたグレーのスウェット上下。白く滑らかな素足に無骨なサンダルをつっかけている。お尻のあたりまで伸びたふわふわの銀髪が、街灯の光をつややかに反射している。ひとつあのとぎと違う点は2つ。まず身長が五センチほど縮んだ。少女から幼女に近いサイズ感になっている。

もう一つは角だった。普段から隠しているおぞましくねじくれた魔族の角を堂々とさらけ出していた。

魔人はサファイアのような碧眼をぱちぱちと瞬いて、手を差し伸べる。

「あの赤いのに見つかったらたいへん。さっさと帰るよ」

――

死ぬかと思った。

いや、正確には一回ほんとに死んだ。魔人は心臓部のコアを砕けない限り死なないけど、言い換えればコアを砕かれたら絶対死ぬってこと。レッドグラτζジの戟でコアを砕かれ、私は確かに死んだ。

で、すぐ生き返った。

私は人類の頑張りたくない気持ちの集合体だ。だるいつらいめんどい一生ダラダラして過ごしたい、という思いが一定の量あると私になる。元になる気持ちを人類が抱いている限りリスポン可能なのだ。たぶん、殺意の魔人が倒されず封印されてるのも、リスポン阻止の意味合いがあるんだと思う。

とはいえ普通は死んで即復活とはならない。思いが形を成すにはかなりの量が必要になる。ちよつと身長が縮んだ状態だけど、すぐ復活したってことは、今の人類はよほどしんどいのを我慢して頑張ってるってことなんだろう。もつと休もうよ人類。

「まあそういう理屈で生き返ったわけなんだけど……聞いてる？」

「……ん」

私の居城であるマンションの一室、リビング。いつものソファでたゆに抱かれながら、スマホいじりのついでに解説してみると、後ろか

ら気のない返事が聞こえた。

暗かったカーテンの向こう側が白んでいる。もう朝みたいだ。

「ねえ、たゆ？ 昨日の晩から徹夜でこの状態だね？」

「ん」

「そろそろ離してくれない？」

「ヤです」

にべもない返答。目の前で死んだのはまずかったかな。

でもあれは仕方ない。まさかレッドグラッジが正体を隠してたゆに接触していたなんて分かるわけないもの。

私は何もせずだらだらと呼吸だけして生きていたい。そのためには、あの魔族絶対殺す丸への対策が必要になる。

ひとまずの参考資料として、スマホでレッドグラッジを検索してみたのだけど、これがなかなか厄介そうだ。

『魔法少女名：レッドグラッジ 武器：滾る怨みの戟 固有魔法：魔族必殺（あらゆる魔族を必ず探し出して殺す運命） ランク：殿堂入り』  
殺す力じゃなくて運命ときた。魔族に親でも殺されたのかわつてくらいヘイトが高い。

一応、復活してから魔人の権能に可能な範囲で欺瞞と改ざんを強化してはみたけど、どの程度通じるか分からない。運命とやりに引つかからないよう結局は祈るしかないだろう。

「はむっ」

「うひゃあ!?! にゃっ、なに?！」

首筋に生暖かい感触が走り、スマホを落つことしてしまった。

このぬめつとした感じは、舌？ なめてんじゃねーぞ。

「あんな女のこととは考えないでください」

「ちよっ、たゆ、どうしたの?！」

振り返ってみると、どこか晴れ晴れとした表情のたゆと目が合った。

ただしその瞳に光はなく、開ききった瞳孔が深淵みたく光を吸い込んでいる。

「私は騙されました。赤井さんと話して、人と仲良くできるんだと勘

違いしました。でもそうじゃない。みんな嘘っぱちです。騙そうとしてる。自分のことしか考えてない。外にあるのは寒さと寂しさばかりで優しさがちつともない」

「たゆ、一回落ち着こう、ね？」

「だけどお姉さんだけは違います……嘘じゃない、温かい……本当に優しいのはお姉さん、あなただけ。だから——」

大好きです、と言った瞬間。

唇に、柔らかで水気のある感触が重なった。すぐ間近に、泣き腫らしたたゆの顔がある。

数秒か数分か知らないけどちよつとしてから顔を離して。カーテンの隙間から差し込んだ朝日が、たゆの横顔を照らした。

唇に指を当て、照れたようにはにかむたゆ。

その瞳にはやはり光がなかったけど、呼吸を忘れるくらいきれいだった。

——

私は怠惰の魔人だ。何もしないししたくない。食べて寝て呼吸するだけが私の存在意義だ。

拾った魔法少女が病んだとか、告白してきたとか。赤黒いイカレた魔法少女に目をつけられたとか。面倒な変化に見舞われたって、私は決してがんばらない。

魔人ちゃんは、がんばらない。

## 2. 急接近

「たゆー、抱いてー」

「ダメです！」

「どうせ誰も見てないってばー」

「見てなくっても私が気にするんです。恋人でもないのにそういうことするのは良くないことです」

「アホなのに真面目だよねえ、たゆ。そういうところ結構好きだよ」「んもーっ！ からかわないでください！」

たゆはぶんすこ怒って、一人でお風呂に行ってしまった。

レッドグラッジ襲来から数日後の夜、危機を乗り越えた私とたゆの距離は縮まるどころか広がった。原因は告白とちゅーである。

大好きです、と言ってはにかむたゆは確かにきれいだった。本当にかわいいやつだと思った。でもそれがいわゆる愛の告白なんじゃねーかと思いついた。あの日のお昼にはたと気づいた。

『あれっ、私もしかして告られた？』

どんがらがっしょん、とたゆは洗濯かごをぶちまけてすっ転んだ。今更蒸し返されるとは思わなかったみたい。真っ赤な顔を両手で覆って赤べこよろしく首を振っていた。

女同士とか、魔法少女と魔人で天敵同士だとかは一旦脇に置いて、私はこう返答した。

『悪いけど私怠惰の魔人だから、そういうの分かんないんだ……保留させて』

結論の先延ばし。だってほんとに好いた惚れたとか分からないもん。食べて寝て起きるだけの生活で満足できちゃうんだもん。恋愛は専門外。

たゆは真剣な顔つきで保留を受け入れてくれた。その代わり始まったのがスキンシップの自重だ。一緒にお風呂に入ったり寝たり、対面で抱き合ったりするのが禁止された。許されるのは手をつなぐことと膝枕くらい。辛い。抱いたり抱かれたりする気持ちよさを教えてくれたのはたゆなのに、理不尽だ。

そう思って不意打ちで抱きついてみたら、かなり深刻な反応をされた。

『お願いだから……我慢ができなくなるから……お姉さんを傷つけたくないんです』

両手をわなわな震わせて心底悔しそうにするので、私も引き下がるしかなかった。私も困らせたいわけじゃない。

とはいえ人肌の温もりはやっぱ恋しくて、最近はやかまし欲求不満だ。あの柔らかで温かい体に包まれたい。しなやかな腕に抱かれて耳元で囁いてほしい。その快感をなまじ知っているから、余計悶々とする。

たゆの姿を無意識に目が追いかける。ショートボブの下にちらちら覗くうなじとか、ブレザー制服の上からでも分かる立派な胸とかお尻とか。昨日は晩ごはんを食べてるとき、瑞々しい唇と赤い舌に目が惹かれた。

「お風呂あがりましたー」

今もそうだ。パジャマ姿の火照ったたゆに目が吸い寄せられる。

「お姉さん？」

艶々した黒髪に天使の輪が浮かび、薄手の生地の下に驚くほど美しい体の起伏が見える。思わず視線を下にやると、桜色のきれいな爪の揃った素足が見え、呼吸さえ忘れて見入ってしまう。

「な、何か変ですか？」

たゆは不安げに体の各所をチェックし始めた。そこでようやく私も我に返る。とたん、顔が耳の先まで熱くなった。

めっちゃ意識しちゃってる。たゆが告白してきた意味を、理屈じゃなくて感情とか本能の部分が理解してきているみたい。たゆをそういう相手として認識するフィルターが出来てる感じがする。

我ながらウブというか純情というか。思えば魔人として生まれて二年と少ししか経っていないから、色恋に疎いのは当然か。

「うおーっ！」

あたふたするたゆの隣を駆け抜け、私はお風呂に逃げ込んだ。

どうもこの日に至った自覚は相当厄介だったみたいで、私はたゆとまともに目を合わせられなくなった。手をつなぐのも膝枕も恥ずか

しくて出来やしない。前に裸で抱き合っていたのを思い出すだけで顔が熱くなる。

これだけでも厄介なのに、私はもう一つ別の感情を覚えてしまった。

「それですね、もうすっかり仲良しになれたんですよ」

自覚から数日後、たゆは晩ごはんの席で楽しそうに語った。

話題は学校の友だちだ。クラスのぼっちに声をかけ、あっち行けと拒絶されつつも「美少女だから大丈夫」とゴリ押しで仲良くなったまでは以前にも聞いていた。

「あっち行け、って言いながら私の袖をぎゅっと掴んで。あっちに行けないよって聞いたら、涙目で睨んでくるんです。かわいいでしょー」

「ふんっ」

何がかわいいでしょ、だ。知らんわ。

「声をかけるたびあっち行けって言われるんですけど、本当に引き下がるとすつごくアタフタするんです」

「知らない」

「あの口癖直したらきつと友だちたくさんなのに、もったいないですよねー」

「けっ」

「……お姉さん？もしかして怒ってます?」

「ぜんぜんですよ由立さん」

「距離感のある呼び方あ！えっ、何かしました私!？」

たゆが困惑してるけど、私も同じだ。途方もないイライラとモヤモヤが心を覆っている。たゆが他の女の子の話を始めるとなぜかこうなってしまう。

険のある言葉が勝手に口をつく。

「友だちと仲良くなれて良かったね。そいつと一生イチャついてりやいいんじゃない?」

「……あっ」

何かに気づいたように声をあげるたゆ。なんだよ、今更私のイライ

ラに気づいても遅いぞ。

だけどたゆが素早く食卓を回り込んで私の手を包み込むように握ると、ささくくれただった気持ち全部吹っ飛んだ。

「私の一番はお姉さんですから」

タレ目がちな瞳にまじりつけのない意思を燃やして、まっすぐにそう言うてくれる。口の横についたご飯粒がちよっと間抜けだ。でもあの日の朝日に照らされた横顔を思わせるまっすぐな迫力にすっかり気圧されてしまつて、

「あ、う、そ、そう」

どうにかそう答えるのが精一杯だった。その後のごはんの味はあまり覚えてない。例の「あっち行け」ちゃんにヤキモチを妬いていたんだと気づいたのはその日ベッドに入ってからのもので、あまりに恥ずかしくて一睡もできなかった。

私は含羞と嫉妬を知った。たゆをそういう相手として意識している。だけどこの感情は果たして、たゆの『大好き』に応えるのにふさわしいソレなのか？

私は怠惰の魔人だ。食べて寝て何もせず頑張らないために生まれてきたから、たゆの告白を受け止められる中身がない。空っぽだ。

空っぽの私に一体どうしろっちゅーんだちくしょー！

そんな調子だから最近寝付きが悪い。お昼まで寝るつもりだったのに、たゆの動き出す物音を聞いて、なんと午前7時半に起床してしまった。朝寝坊を生きがいとする魔人としては異例の早起きだ。

部屋を出ると、たゆはキッチンでお弁当の支度をしているところだった。私を見るなりあいさつも忘れて目を丸くしてる。

「お姉さんがこの時間に？ 天変地異ですか!？」

「大げさな。こういう日もある」

「どうしましょう、お昼の分しか作ってないんですけど……」

「二度寝予定なんで問題ないよ」

なんとなく、玄関まで付き添い見送った。

「いってらっしゃい」

「いってきますー!」

たゆは太陽みたいに眩しい笑顔になって、弾むような足取りで外へ出ていった。

その声と笑顔が頭にこびりついて何度も反芻される。甘い声と蕩ける笑顔。あいつあんなにかわいかったっけ？

二度寝しようとしても変に目が冴えて、仕方なく朝の情報番組をつけてみた。興味のない情報の波を小一時間も浴びていると、クリーチャーが出現する。

『みんなおはよー★ 魔族必殺のレッドグラτζだよ★』  
「うわ出た」

急にヤバイ女が出てきた。黒のレオタードに鮮烈な赤いフリルをあしらった装束。数日前に私を殺した魔法少女、レッドグラτζだ。

『今日は全国的に情念値が高くて、魔物が発生しやすくなってるよっ

★ 危ないから不要不急の外出は控えるようにしてね★』

『レッドグラτζさん、ありがとうございますー！ いやあ、あの晴れ晴れとした笑顔を見ると朝から元気が出ますねー！』

寒気かしねえよ。

どうも魔族情報の注意喚起役として呼ばれていたらしく、キャスターが引き継ぐとすぐにフェードアウトした。

『続いてニュースの時間です。近年増加傾向にある闇墮ちについて、闇狩りの長グリーングリームは強い懸念を——』

電源を切った。

朝から気分を害した。だけど毎日生放送のこの番組に出ているってことは、この楔野町にヤツはいない。何かの間違いで私を嗅ぎつけても即やつてくることはないわけだ。

そう考えると胸がすつとした。今ならうまいコーラが飲めそうだ。  
「おや？」

キッチン冷蔵庫に向かうと、珍しい物が目に入る。食器乾燥機の横に、二段のちんまりしたお弁当箱があった。さっきたゆが用意してたやつだ。

たゆが忘れ物とは珍しい。さては私の早起きによほど動揺したんだな。



時間はもう9時を回っている。取りに戻ってくるのは間に合わない。ムチムチ巨乳のたゆが一食でも抜けば、おっぱいにすべてのカロリーを消費され餓死するのは確実だ。選択の余地はない。

「めんどくさ……」

というわけで私はお弁当片手に、生まれて初めて朝から外出することになった。

目的地は無論コンビニではなく、たゆの通う学校である。

――

「はぁーだつる」

来るんじゃないかった。

時刻は正午、商店街の大通りに面する細い路地。

私はやる気をなくしていた。室外機に腰掛け、足をぶらぶらしてみる。渡し損ねたたゆのお弁当がやけに重たく感じる。ひたすらだるい。

初めての遠出だけど道に迷うことはなかった。公園を通り抜け川の土手沿いに歩き、商店街を抜けて幹線道路を南下していくと、たゆの通う中学に難なく到着した。ケチがつき始めたのはそこからだった。

正門のところ立ってた守衛さんに呼び止められて、

『お弁当を届けに来たあ？ はいはい、キミみたいなファンはこれで15人目だよ。やれ手紙だの化粧品だのお菓子だの、パステルエッジのファンがたくさんくる。まったくろくでもないね。どうせ君も薬やら体の一部やら混入させてるんだろ？ くだらないことをしてないでちゃんと学校に通いなさい。そもそも食べ物で粗末にするのはいけないって親に習わなかったかい？ これだから最近の子供は――』

全力で腹パンしそうになったのを我慢したのはマジで偉かったと思う。その場で回れ右して猛ダツシュ、ふざけたお説教をぶつちぎって商店街まで舞い戻り、今に至る。

たしかに私の見た目は上下スウェット姿の銀髪幼女だよ。たゆとの遺伝的つながりなんて欠片も見当たらないし一緒に暮らしてる事情を知らない人からすれば私は不審者だろう。たゆの魔法少女パステルエツジとしての有名を考えれば、説教されるのもしゃーない。

とはいえ、だ。

「ちくしょー……」

ムカつくもんはムカつく。

最悪なことに、ポツポツ雨まで降ってきた。ふぎけるな雨は私が屋内にいるときだけ降る決まりだろうがこれだから地球はダメなんだよバーカ。

壁に拳をお見舞いしてやった。痛い。

その痛みでちよつと冷静になり、反射的にこめかみのあたりを手で押さえた。よかった、角はちゃんと隠せている。

魔人の印であるおぞましくねじくれた一对の角が、うっかり外でバレてしまえば大騒ぎになる。欺瞞の魔法は強くしてるしレッドグラッジも不在とはいえ、油断はできない。早く安心できる我が家へ帰ろう。たゆはまあ、一食抜いたくらいで死なないだろ、たぶん。

「大丈夫かね？」

立ち上がろうとしたその時、声をかけられる。

顔を上げると、人の良さそうな青年が心配げにこちらを見つめていた。やけに目を引く赤い腕章を付けている。

「ずいぶん落ち込んでいるようだ。お父さんとお母さんは？」

「平気です。あと迷子じゃないんで。家が近いんで散歩です」

「散歩？」

青年が信じられないと言いたげに目を見開く。

「それなら早く帰った方がいい。朝にレッドグラッジが言っていただろう、今日は全国的に魔物が出やすい。魔が差す者も出るかもしれない。こんなところに居てはいけない」

そういえばあのイカレ魔法少女がテレビで言っていた気がする。情念値とか外出を控えるとかどうのこうの。でもたゆにお弁当を届けに行くのは不要不急じゃないだろう。

それにこの青年だつてこうして外に居る。人のことは言えない。私のジト目に気づいたのか、青年は苦笑して二の腕の腕章をこちらに向けた。赤地に白抜き文字の文字を読み取った私は危うく悲鳴を上げそうになった。

『魔族必殺機構』の者だ。今日のような危険日に見回り注意喚起の役目を――」

「すぐ帰りますよならー！」

呆気に取られる青年を横目に私は室外機を飛び降り、そそくさその場を後にする。「忘れ物だよ」と後ろで聞こえるが知らない。命の方が大事だ。

魔族必殺機構は文字通り魔族を必ず殺すための組織だ。この前殺されたのを機にちよつと調べた。頭目はやつぱりといふべきか魔法少女レッドグラツジで、魔族被害の情報共有、公開、対策、被害者支援なんかもやってるらしい。

やつてることは割と健全だけど、トップがああレッドグラツジな時点でもうダメだ、怖い。早く安心できるところに帰りたい。

と、そんな思いが通じたのか、それともただの偶然か。

路地から出るや否や、甲高い悲鳴が商店街のアーケードに響き渡った。

「きゃーっー！」全員離れて！」「すぐに通報を」「魔法少女は、パステルエツジは何をしてる!?!」

大通りを平和に行き交っていた人々がパニックに陥り、我先に逃げ出そうとしてもつれあい、より恐慌の度がましていく。

そんな阿鼻叫喚の中心にいるのが、黒くのたうつ怪物だ。人の胴体ほどもある黒く野太いミミズが、何百匹も絡まり合ったような威容。アーケードの天井に届きそうな巨体が大通りの中央に陣取り、周囲の人間にゆつくりと触手を伸ばそうとしている。

「おお」

怪物だ。生で見るのは初めてだ。出やすい日とは聞いてたけど、こんな通り雨みたいなのりで簡単に出るもんなんだな。見た目グロっ。ただ、私が魔人だからかあんまり怖いとは思わない。

私の隣を誰かが駆け抜ける。さっきの青年だ。なぜか魔物とパニツクの人たちの方向へ向かっている。

「全員落ち着いて！ 魔族必殺機構です！ すでに魔法少女を呼んであります！ みなさんは近くのお店に入って隠れてください！」

よく通る声だった。青年が駆け回って声を張ると、パニツクの人々が近くの店舗へわたわたと避難していく。魔物の触手は案外鈍くて、逃げる人の動きについていけない。

でも、走り回って避難を促す青年は別だった。

「うぐっ」

老婆を助け起こしていた青年の首に、魔物の触手が巻き付く。苦悶に顔を歪め、宙吊りになる青年。

で、なぜかその現場へ全力で駆けつけている私。

「あーっ、もう！ 損な性格だよ我ながらあ！ くら離せ苦しそうにしてるでしょーが！」

どうせ乱暴するなら私の見てないところでやってほしかった。

青年を捕まえる触手にぶら下がり、手で叩いたり引っ掻いたりしてみる。タコみたいにブヨブヨして気持ち悪い。

同族だからか、言葉もないのに魔物の困惑が伝わってきた。「え、何このちっさいヤツ」みたいな気持ちさが直接脳内に響く。

「うう……」

まずい、青年の顔色がどんどん悪くなってる。目の前で人死になんて冗談じゃない。

「やめろっつてば、言うこと聞きなさいっ！」

半ば無意識に、私は魔法を解いていた。

おぞましくねじくれた一對の角を露わにする。瞬間、魔物はすべての触手の動きを止め、吊り上げていた青年を解放した。

私も触手を放して下に降り、犬猫をなだめるノリで言った。

「よしよし。そのまま元いたところに帰りな」

大通りを埋めていた黒い巨体が、繊維のほつれるように薄れ、虚空に消えていく。完全に姿が見えなくなると、商店街には痛いほどの沈黙が降りた。

確信はなかったけどどうもくいつた。魔人は魔族の上位個体であるなら、魔物に指示もできるんじゃないかね、と思いついたのだ。殺意の魔人が魔物を使役してた、ってテレビでも言ってたし。残念ながら魔法少女の、たゆの一番を奪っちゃったな。

「つ、角……う？」「魔人だ」「魔人が出た」「魔人」「魔人」

注目を感じる。店内に逃げていた人たちが口々にそう言っている。魔人バレは仕方ない。いくら世間の魔人ヘイトが高いといっても、この状況で私が非難されることはないはず。怖い魔法少女が来る前に、何事もなかった体で素早く退散すれば誤魔化せるだろ。

という考えが、どれほど甘く愚かだったことか。

私は思い知らされることになった。

「死ね」

「え」

後ろから角を掴まれ、強く引つ張られる。背中を打ち付けて呼吸ができない。力ずくで引き倒された。

チカチカする視界の中に、憎悪に歪んだ男の顔が見える。二の腕には「魔族必殺」の腕章。

それはついっさきまで決死の避難誘導に励んでいた、人のいい青年だった。

「魔人は死ね」

「がっ……!?!」

青年の靴底が私の胸を踏抜く。痛みと酸欠で涙がにじむ。そのまま何度も胸と腹を踏まれたり、蹴られたり。

絶え間ない痛みの連続。それが止まったのは、青年が息を整える小休止のときだった。

体のあちこちが軋んで動かない。どうか目だけ動かすと、もう逃げられない状況っぽい。

さっきまで魔物から逃げていた人々が、私と青年を取り囲んでいる。みんな一様に歪んだ顔つきで、憎悪の視線で私を射抜いている。

人々は肩で息する青年を押しつけ、近づいてきた。

それから足やバットを高く振り上げて——私の意識は暗転した。

――

「魔が差す、という言葉がある」

痛い。

全身の痛みに思い切り悲鳴をあげようとして、だけど掠れたうめき声にしかならない。首に何か食い込んで息ができない。耳から入ってくる男の声が、頭の中にぐわんぐわんと響く。

「魔族の発する悪い情念に当てられて、理性を失う現象だな。たいていは恐ろしく攻撃的になる程度だが、場合によっては発狂死することもある」

ちやり、と金属音。鎖だ。手先の感覚がない。ちよつと肌寒くて、口に何か詰め込まれ、目隠しされている。

裸で後ろ手に縛られた上、ぎりぎり爪先立ちになる程度に首を吊り上げられているみたいだ。死ぬ気で立ってないと首が絞まる。

頭のモヤが取れ、全身の痛みが引いていく。残った痛みは鎖が首に食い込むものだけ。

「こうした魔族の脅威に我々は立ち向かわなければならぬ。人類の賢明なる理性をもって、戦わなければならない」

痛い、辛い、しんどい。

どうしてこうなった？ ここはどこ？ あれからどれくらい経った？ 今、何が起こってる？

「さあ、戦いを始めよう」

何か、体に入ってきた。おへその辺り。包丁？ 痛い。痛い。

「すごい。もう傷がふさがった」

「魔族は物理攻撃に耐性がある。だからこそ魔法少女が必要なんだ」

「魔法の攻撃じゃないと、何をしても死なねえ。コアは傷一つ付かねえ」

「化け物」「気持ち悪い」

「だがこの魔人に反抗する力はない。私たちの怨みを受け止めるために生まれたのだろう」

違う。

私は何もしないために生まれたんだ。頑張り屋の人類が見て見ぬふりをして心の底に押し込めた、休みたい気持ち。それを体現するために生まれた。他の魔人だってみんなそれぞれの役割がある。

ああそうか。だから魔が差すんだ。

自分たちが見ないふりをした、あつてはいけない気持ちと向き合ったとき。きつと人は冷静じゃいられないのだろう。

「さあ戦おう、そして怨みを晴らそう」

「ふ、うぐ……っ！」

鋭い痛み、鈍い痛み。体の中に冷たい何かが入ってきて、ぐちゃぐちゃと中身をかき混ぜる。頑丈な棒みたいなのが、お腹や背中を強く打ち付けていく。

反射的に体を折ろうとすると首が絞まる。身じろぎすらろくに出来ず、ただ痛みを受け入れるしかない中で、私は悟った。

甘かった。

魔族への当たりが強いか、ヘイトが高いとかいう次元じゃない。テレビで感じていた魔族への反感は氷山の一角でしかなかった。私は外へ出るべきじゃなかったんだ。

「俺の妹は魔物に喰われて死んだ。生きたまま腹を割かれて少しずつ中身を引きずり出されてな」

ぐちゃ、と音を立てて、つま先立ちをしていた足が踏み潰された。立っていられない。鎖が首に食い込み意識が遠のく。

「私の夫は殺意の魔人に狂わされた。あの人は今も施設から出られない」

すぐに叩き起こされた。刃がお腹に入ってくる。カレーをかき混ぜるみたいに、中身をぐちゃぐちゃ混ぜ返される。

怨みと痛みが交互にやってきて、頭がぼんやりしてきた。

私ってなんだっけ？ 何のために生まれてきた？ そもそも私って生きてるのか、死んでるのか、どっちなんだろう？

何も分からない。

痛い。

辛い。

しんどい。

助けて——たゆ。

「お姉さあああああんっ！」

意識が闇に溶けていく中、パステルカラーが輝いて。

ぷつつりと、意識が途切れた。

——

魔物出現の報がたゆに届いたのは、魔物が確認されてから20秒後のことだった。警戒を強めていた魔族必殺機構による迅速な連絡だった。

たゆは友人のお弁当からおかずをせびるのを中断し、即座に現場へ駆けつけた。

「魔族は死ね！」

しかしそこに残っていたのは、血走った目で口々に呪詛を唱える民衆。彼らの顔は憎悪で一樣に醜く歪み、歯ぎしりする口元からはヨダレが垂れていた。

魔物の情念のために魔が差しているのだろう。しかし肝心の魔物はどこへ行ったのか？

民衆の一人に話を聞いたたゆは、血の気が引いた。

「魔物は勝手に消えたよ。だけどその後、魔人が現れてね。みんなで袋叩きにして、必殺機構の人が連れて行ったよ」

「弱い魔人で良かったねえ、もし殺意なら私たちみんなお陀仏だったよ」

「わざわざ呼び出してごめんよ、パステルエツジさん。今日は学校だろ？」

人々の口ぶりには、魔族の脅威に自分たちだけで対処した誇らしさが満ちていた。

弱い魔人？ 袋叩き？ 不穏な単語に鼓動が早まっていく。浅い呼吸を繰り返して動揺を抑えるたゆ。



落ち着け。あのぐうたらすることに人生を賭けているお姉さんが、昼間からこんなところに来るはずがない。遠出したとしても近所のコンビニか公園までだ。

最悪の予想を否定していると、視界の隅に、見慣れたものが写った。ピンクと白のチェック柄の包み。中身は見なくても分かる。たゆが今日、うっかり忘れていった弁当箱だ。

「ああ、それかい？ 魔人の持ち物みたいだけど——」

たゆは言葉を失い、頭が真っ白になった。

面倒くさがりなくせに、途轍もないお人好しでもあるあの人が、たゆの忘れ物に気がついたとする。それを届けにくる道中で魔物と遭遇し、何かの拍子に角を隠す魔法が解けて——

「どこですか」

「ん？」

「魔人はどこに連れてかれたんですかっ!？」

「そりゃ、機構の事務所じゃない？ あの中学の近くの」

たゆは全力で駆け出した。パステルカラーの一条の光線と化して町を駆け、目的地にまっすぐ向かう。

魔族必殺機構楔野支部。幹線道路沿いに聳える近代的な建物はすぐに見えてきたが、その入り口は人垣で塞がれていた。

集団はカメラやスマホをぎよりとたゆに向け、猛然と取り囲む。「パステルエッジさんが到着した模様です。話を伺ってみましょう。今回の魔人出現についてどうお考えですか？」

「コメントをお願いします！」

「一般人が魔人を捕獲したというのは事実でしょうか？」

「サインくださいー!」

「どいて、どいてえっ!」

突破するのは簡単だ。魔法少女の膂力を振るえば一瞬で包围を割れるだろう。しかし確実にけが人の出るそのやり方をたゆは習慣的に切り捨て、小一時間を無為な押し問答に費やす羽目になった。

そうしてわずかに頭が冷え、やっと最適な方法に思い至る。

「と、跳んだあ!？」

斜め上に飛び上がり、放物線を描いて入り口まで一直線。

そこに渋面をした警備員が歩み寄ったとき、たゆは我慢の限界を迎えた。

「魔法少女といえど、無断で敷地内に入られては——むぐっ!？」

「どこですか」

警備員の胸ぐらを掴み上げ、自分でも驚くほどの怒声を張る。

「魔人はっ……お姉さんはどこですかあ!？」

「こちらですよ」

震え上がる警備員に代わり、答えたのは建物内にいた必殺機構のメンバーだった。

人のいい青年といった印象の彼についていく。階段で地下一階へ降り、清潔感のある廊下を進み、最奥の扉の前で足を止めた。

青年を押しつけ、扉を蹴り開ける。

「おお、パステルエツジ」

「少し来るのが遅かったんじゃないか？」

「今日は平日だぞ。無理もない」

「学校もあるのに、わざわざ来てもらってすまないな」

一つの家具もない無機質な空間で、男たちが晴れ晴れとした笑みを向けてくる。

その中央に、魔人が居た。両手足を鎖で縛られ、首に巻かれた鎖が天井のフックに吊るされて爪先立ちになっている。うつむいた小ぶりの顔には目隠しと口枷がはめられていた。

「だがちようどいいタイミングだ」

男の一人がカッターナイフを振り上げ、横薙ぎにする。魔人の絹のように滑らかな肌がざっくり切り裂かれ、血が噴き出した。

しかしその血は巻き戻しをかけたように体内へ引っ込み、傷口は痕も残さず消えた。

「さすがは魔人というべきか、どうやっても倒せないんだ」

「我々の怨みはすでに晴らした。討伐を頼むよ、パステルエツジ」

「魔法は魔法少女にしか使えないからな」

「は……？」

たゆは耳と目を疑った。目の前の光景を、言葉を到底信じたくなかった。

「怨みを……晴らした……?」

「ああー!」

力強く頷く男たち。その足元には、様々な道具が転がっている。

出刃包丁、彫刻刀、アイスピック、のこぎり、金槌に釘、かなな、やすり、ペンチ。部屋の隅のコンセントから延長コードが伸びて、ハンダごてやドリルが接続されている。

それらに返り血は付いていない。当然だ、魔人は魔力のこもっていない物理攻撃では死なない。傷が付いてもすぐに再生する。

その事実と、男たちの言葉。清々しい笑顔と、ぐったりうなだれてピクリとも動かない魔人から、ここで起きたことについて緩やかに、救いようもなく理解が及んでいった。

「

たゆは声もなく、堕ちていった。

深く深く、闇の底へ。

――

サイレンの音が聞こえる。ざあざあ降りの雨音も遅れて耳に入ってくる。

体中が痛い、と思ったけど気のせいだった。気を失う前の余韻が残ってたみたい。今はただ、甘い匂いと柔らかかで心地良い感触に包まれている。

「たゆ」

「お姉さん。痛いところはないですか?」

重いまぶたを開くと、たゆがこつちを見下ろしていた。

久しぶりの膝枕だ。こんもり膨らんだ胸の向こうに、たゆの幼い顔が見える。潤いのある朱色の唇に目が惹かれた。

「ないよ。もう大丈夫。外、うるさいね?」

場所はいつものリビング、ソファの上。マンションの外からひつき

りなしにサイレンが聞こえてきてうつとうつしい。

たゆはきゅつと唇を引き結んで、

「ごめんなさい、お姉さん。私がお弁当を忘れたせいで、あんなこと……」

「ああうん、いいよ。助けてくれたんでしょ？　ありがとう」

別に誰が悪いつて話でもない、強いて言えばいろいろなめぐり合わせが悪かった。落ち込む暇があるなら私の話を聞いてほしい。

「あのね——」

素早く起き上がりぎまたゆの膝に座って、唇を重ねる。恥ずかしいから一瞬だけ。

顔を離すと、ぽかんとしたたゆと目が合った。みるみる耳まで赤くなっていく。たぶん私も同じ。

「たゆ、私も君が好き」

何もしたくない空っぽの私に芽生えた、妬みと恥ずかしさ。その元になる思いはきつと、たゆの大好きと同じものだ。

目隠しと怨みの言葉で世界が埋め尽くされたあとき、たゆへの想いだけが私に残った。たゆの色と声だけが何も無い中たしかにあった。

まじりつけのないこの思いこそ、誰かを好きになる感情だ。理屈じゃなくて心がそう思った。

ていうかぶつちやけ、この気持ちには気づいていた。なんか認めるのが恥ずかしくって意地張ってたんだ。

だけど私は怠惰の魔人。色々ならしない欲求をまつすぐに叶えていくのが私だ。

自分に素直に正直に。心を抑えるなんて面倒でだるくてしんどいことしない。

魔人ちゃんは、がんばらない。

「大好き」

もう一度ちゅーする。

たゆの鼓動が豊かな胸越しにもはっきり伝わってきた。私にも心臓があれば、鼓動が溶け合って気持ちよかったんだろうな。

そんなないものねだりが陳腐に思えるくらい、私たちは本能のままに溶け合う。

サイレンの音はずっとうるさいままだった。

### 3. 蜜月

たゆの告白を受け入れてから、私たちの暮らしは少し変わった。

炊事洗濯掃除をたゆに丸投げして私は一日中だらけるのは変わらない。面倒なことはやりたくない。たゆも用事が終わればソファと一緒に無為な時間を過ごすのだけど、このとき解禁されたスキンシップが一番大きな変化だと思う。

出会って間もない頃みたいに、たゆの太ももに乗っかり対面で抱き合う。私の背中をたゆの手が這い回り、シャツを捲くって素肌を直に刺激され、体中が熱くなっていく。

「たゆ、待って……」

「私、もう我慢しません。本当に嫌なら逃げてくださいね」

たゆは何か吹っ切れたみたいで、私の体を弄ぶ手付きには躊躇とか容赦とかいうものが欠片もなかった。嫌なら逃げてとは言うけど、以前とは違ったゆは魔法少女の筋力でがちり私を捕まえていて、逃がす気はまったくくない。抱き合うたび私は立つのも難しいくらいぐちやぐちやにされ、お風呂に運ばれてまた快樂を体に叩き込まれる。

毎日毎日気持ちよすぎて死ぬんじゃないかと怖くなる。けどこの生活は気に入っている。食べて寝て好きなやつとおしゃべりしたりちゅーしたりするだけの日々。サイコーに怠惰でいかにも魔人らしいじゃない。

ただ、私の方ばかりいい思いをするのは申し訳ないというか、正直敗北感がある。たゆのあのムチムチ巨乳ボディを攻略するのが最近の目標だ。一応首筋と胸が弱点なのは分かってきたので勝ち筋はある。あいつが蕩け顔でひいひい言ってる様が目に浮かぶぜ。

「たゆっ、まつへおねがい……!」

「んもー、今日はお姉さんがリードするって言ってたじゃないですかー。嘘つきお姉さんにはお仕置きですよ」

ダメだった。普通にいつもの流れでドロドロにされて気づいたら朝になった。

感じやすいんだろうか。たゆの大きくて柔らかな体に包まれてい

ると体が熱を帯び、どこを触られても気持ちいい。

朝のベッドの中、言い訳みたいにそう言ってみるとたゆはジト目で、

「スケベ」

「……ロリコンに言われたくない」

「ロリコンじゃないです。好きになった人がたまたま幼女サイズだったんです」

「ちよっ、こら、まだ朝！」

「どうせやることないしいじやないですか。嫌ならもつと抵抗してください」

たゆはとんだ変態に育ってしまったらしい。何しろ体格差があるので強く迫られたら抗えない。私は仕方なくたゆのいやらしい求めに応じてやっているのだ。仕方がないのだ。

そうした爛れた日々が始まって数週間。

私とたゆはリビングのソファで小休止していた。たゆの太ももに上半身を預け、何をするでもなくぼーつとする。ペランダの外には初夏の陽光が輝いて、遠くサイレンの音が聞こえてくる。

室内には空調の音と、テレビから光と音が垂れ流しにされている。

『YY州楔野町で魔人が出現してから三週間が経ちました。魔人と共に姿を消した魔法少女パステルエッジさんの行方は、依然として分かっておりません。専門家のみなさんに話を伺いたいと思います』

話題は私とたゆだった。このワイドショーに限らず、あのお弁当届け事件以来どこの局のどの番組も同じような話ばかりしている。

司会に話を振られ、魔法少女研究歴50年の専門家というおじさんがしかつめらしく口を開く。

『この事件は魔人の恐ろしさを再確認させるものでした』

『と、おっしゃいますと？』

『皆さんご存知の通り、魔法少女が一般人を傷つけることはありません。しかし今回、魔法少女によって五人の重軽傷者が出ています』

「死んでもいいや、くらいの気持ちでやったんだけどな……」

「どうどう」

あの日捕まった私を助けに来たとき、たゆは一般人に魔法少女の力を振るった。大剣の腹でぶっ叩いたらしい。

『新人ならまだしも、あのトップランカー、パステルエッジさんがなぜそんなことをしたのか。魔人の情念にあてられたのです。魔が差し、闇堕ちを強いられたのです。ああ、恐ろしい』

『パステルエッジさんは現場から立ち去る際闇堕ちしていたとの情報もあり、闇狩りは「機構と連携し捜索を強化していく」とコメントしています』

魔が差す。それと闇堕ちか。

魔族を構成する負の情念に触れ、発狂したり攻撃的になったりすることを魔が差すという。その影響で装束と虹彩の色合いが変わった魔法少女を闇堕ちしたと表現する。

もし、もしもだ。

たゆが私と出会ったことで魔が差し、一般人を傷つけてまでここにいるのだとしたら。私のせいで正気を失い、闇堕ちしてしまったのだとしたら。まっとうな人としての生活を私が奪ってしまったことになる。

私は助けられたあの日以来一步も外に出していない。外は警察車両と目を血走らせた必殺機構の連中がひしめいて、権能に守られたこのマンションから出られない。そしてたゆも「お姉さんを守るため」と言ってここに引きこもっている。もちろん学校にも通えていない。私のせいで、まともな14歳の女の子の人生を歪めている。

私の権能にコストはない。私が私である限り使い放題なので、マンションの敷地内にいれば誰にも見つからないまま、半永久的に現状を維持できる。だけどそれはたゆにとって本当にいいことなのか。

私とたゆは一緒にいてはいけないんじゃないか――

「はむっ!?!」

ぐいと体が持ち上げられ、唇を奪われる。長いまつげにタレ目、形のいい鼻がすぐそこにある。口の中に暖かくて柔らかいものが入ってきて、私の舌と絡まり合う。

どれくらい経っただろうか、顔を離すと銀の糸が引かれ、それはた



ゆの鎖骨を伝い、垂れたしずくが胸の谷間に落ちていく。

たゆは紅潮した頬をぷくつと膨らませていた。

「お姉さん、変なこと考えたでしょ」

「……変なことって？」

「自分のせいで闇堕ちさせたとか、一緒にいていいのかとか」

エスパーカーこいつ。いや魔法少女だな。

たゆは不意に立ち上がり、その体が黒い靄に包まれる。魔法少女の変身だ。

靄が晴れた後のたゆの装束は、元のパステルカラーから一変していた。黒を基調としたドレス。ひらひらしていたフリルやリボンが一掃され、代わりにエッジの利いたプレートアーマーが肩や肘に配置され、全体的に鋭い印象を受ける。ハートを象る大剣は半ばまで黒く穢れ、先端部に元のパステルカラーの名残がある。

ゆるふわパステルから、トゲトゲダークに闇堕ちしていた。

「私は私の意思でお姉さんを好きになりました。私の意思でこの世界を呪いました。寂しくて寒くて、誰も彼もが誰かを傷つけることしか考えていないこの世界を呪ったから——」

「魔が差してない証拠は？」

「ちゅーしたじゃないですかっ！」

「なんでもかんでもちゅーでゴリ押しすな。——ふふっ」

「何笑ってんですか！」

こいつは変わってない。見た目がどれだけ変わっても、脳死でアホで純情で一本気で一直線なところはなんにも変わってない。実にこいつらしい。

なら私も私らしくあるべきだろう。食べて寝て気持ちよくなるだけ、面倒なことは何もしない無為で無意味な怠惰生活。細かいことは考えず、何かをしたいと考えず、ただあるがままの快樂を受け入れる。それが怠惰の魔人ってものだ。

「分かった。もう余計なことは考えないよ」

「分かってくれたならいいんです」

「それより、んっ」

「ん？」

両腕を開いてうえるかむのポーズ。体が火照って仕方ない。

「そっちがその気にさせたんだから。お昼まで、しよ？」

「……ほんつと、すけべですね」

たゆは闇堕ち衣装のまま、襲いかかってきた。

快樂の波に溺れながら、少しでも反撃しようと思死で手を動かす。それでも私の体を私より知り尽くしたたゆには全然敵わなくて、私ばかり喉が枯れそうになる。

ろくに考えることもしない怠惰な生活。とても幸せで満ち足りている。

だから私は——致命的な失敗に気づかなかった。

怠惰の魔人として絶対にしてはならない考え。それに気づくどころか、違和感すら覚えなかった。

幸せな生活はすでにこのとき、崩壊を始めていたというのに。

——

崩壊の兆しは、胸の痛みから始まった。

「い……っ」

痛いので三文字すら言えないほどの、臓腑を焼けた鉄でかき回されるような灼熱の激痛。いや、実際されたことがあるから分かる、この痛みはあれよりもはるかに強い。

たゆはキッチンで洗い物をしていて私はソファの背もたれに隠れて見えないから、助けを呼ぶこともできない。呼吸さえできなくなり、窒息で何度か失神していると、ようやく緩やかに痛みが引いていった。

どう考えても変だった。私は怠惰の魔人ちやんだ。どんな病原菌にも侵されないし不養生と不摂生の限りを尽くしても体調を崩すことはない。急に動けなくなるほどの痛みを襲われるなんてあり得ない。

「おねーさんっ」

「はえ」

困惑して胸の痛んだところをさすつっていると、背もたれの上からにゅつとたゆが顔を出した。

「私、由立たゆつていいいます」

「……痴呆？ それとも記憶喪失？」

「ちーがーいーまーすうー！」

今更何を自己紹介してんだこいつ。

たゆはささつとソファを回り込み、寝転んでぐだーつと垂らしてた私の手を両手で握り、餌にがつつく大型犬みたく詰め寄ってきた。

「会つてすぐのころ、名前を知らない方がいい感じの距離感になるつて言つてたじゃないですか」

「そうだっけ」

言つたような言つてないような。

「そうなんです。それでそれで、今の私たち、もうほとんどゼロ距離ですよね？」

「ふむ」

「だからお姉さんの名前、教えてください！」

「無理」

「じゃあ体に聞きます！」

「ちよつとやめろやめてやめろコラア！」

「痛いー！」

息をするように手を服の下に入れてきて気持ちいい尋問を始めようとするので、角を生やして額を小突いてやった。たゆが額を抑えて涙目の上目遣いで抗議してくるけど、いくら聞かれても答えようがない。

「私はただの怠惰の魔人ちゃんだよ。名前なんてない。お姉さんでいいや」

二年前に生まれて以来、私の自己認識は怠惰の魔人である自覚だけで、個別名はない。何もしないことが役割だから特に困らないし、これからも困らないと思う。私を知るただ一人にはお姉さんと呼ばれ慣れているし。

なのにたゆは何が気に入らないのか、決然とした顔で立ち上がった。私の脇に手を入れて持ち上げ、たゆの太ももに座らせる形で落ちて着く。太ももとおっぱいの柔らかさに包まれ、ついさつきまで感じていた胸の痛みが幻みたいに思える。

「お姉さんの名前を決める会議を始めたいと思います。意見のある人は拳手をはーいどうぞお姉さん！」

「おいコラ」

手を掴んで無理やり拳手させやがった。強引なやり口に思わずため息が出る。

ぶつちやけ個体名にまったく興味がないわけじゃない。私を怠惰の魔人と呼ぶのは犬を「柴犬という犬」と呼ぶのに等しい。何か素敵な名前があるならちよつと嬉しい。

とはいえ自分で考えるのはだるいしめんどいので、

「たゆが考えてくれる名前なら、なんだっていいよ」

「んもー、思考放棄！」

「本当だもん。たゆのこと、信じてる。きつといい名前を付けてくれるって」

「お姉さん……！ 任せてください、私にはもう考えがあります！」

チヨロい。後頭部を胸にすりすりしながら言っつてやると秒で乗り気になった。

こういうチヨロさも嫌いじゃないし、実際たゆが考えた名前ならどんなセンスだって受け入れる。なんたって空っぽの私が初めて好きになり、好きになってくれた大切な人だ。それくらいの信頼がある。「ではいくつか言っつていくので、好きなのがあれば教えてください」「おっけー」

「まず……怠惰丸花太郎」

「しばくぞ」

「ギンパツ・怠惰右衛門」

「どつくぞ」

「グレート・タイダニヤン」

「ツノドリルしたるか？」

「いまだ痛い痛いもうしてる、もうしてます!？」

角のねじれた箇所で鎖骨をグリグリしてやった。

「なんでもいいって、信じてるって言ったじゃないですか!」

「限度がある。人の名前でウケを狙うんじゃない」

「狙ってませんよう!」

真剣に考えてあの3つが出てくるあたり、こいつのネーミングセンスは相当終わってるらしい。

念の為その後もアイデアを聞いてみたが、すべて同じ方向性でダメだった。腕を振り払って膝から降り、不満顔のたゆにびしりと指を突きつけてやる。

「いい? 私の名前は発音しやすくってどことなく女の子っぽい柔らかかな響きを伴いつつ、私を見た目と性格を瞬時に連想できるような含意のあるものにするんだ。おっけー?」

「ハードル高くしないでえ!」

「おっけーだね。じゃよろしくうー」

あたふたするたゆを放置して、私は逃げるように寝室へ引っ込んだ。

名前をめぐるやりとりを始めた半ばから、胸の痛みがじわじわと再来している。昼寝のふりをして、引き裂かれる痛みにも声も出せず悶絶した。

その日から発作的な痛みに不定期で襲われるようになった。何か取り返しのつかないものが削れていくような、漠然とした不安が膨れ上がっていく。

考えるのが面倒といってもさすがに繰り返す発作に襲われると少し仕組みが分かってくる。痛みはたゆと話をしたり、たゆのことを考えたりしたときに始まる。

もしこれをたゆに知られたら、苦しませないようにと私から距離を置くと思う。だから言えなかった。たゆと触れ合えないくらいなら、張り裂ける苦しみを受けたほうがマシだったから。

そうして発作をやり過ぎ、たゆの方は私の名前についてうんうん唸りながら、緩んだ日常を送っていると。

すべての壊れる時が、唐突にやってきた。

――

崩壊の始まりは、赤いあいつの来襲だった。

「やつほー、魔人さん★」

「は？」

ある日の昼下がり、食料品の宅配を受け取りに出てきた私を、レッドグラッジの笑顔が出迎えた。死のフラッシュバックと共に思考が加速する。

助けを呼ぶ？ いや、たゆは洗い物をして忙しいうし呼んだところで赤いのに敵わない。逃げる？ この魔族絶対殺す女が逃してくれるはずない。私を殺しに来たんだ。でも魔人の権能で隠されたここをどうやって突き止めた？ 痛いのは嫌だな――

「ふうーん？」

「わわっ」

真つ赤な瞳が鼻先まで迫っていた。下からぎよろりと覗き込まれ、私はわたわたと後退する。

「その目、とっても腹立たしい色だね★ 抉り出したくなっちゃう★」  
「ひっ」

「でもそれ以上に、いいザマ★ こんなに権能が弱くなってるっ★」  
「な、何言って」

欺瞞と改ざんの権能は今もフル稼働のはずだ。だけどハツタリだとするとこいつがここを探し当てた説明がつかない。私の、魔人としての力が知らず弱くなった？ なんで？

「きーめた★ あなたはそのまま苦しんで消えるといいわ★ その方がたゆちゃんのためだもんね★」

私の混乱に構わず、レッドグラッジはくるりと背を向けて、通路の手すりを軽やかに跳び越え姿を消した。手すりに飛びついて下を見ていると、もうどこにもいない。

ひとまず脅威が去ったものの、定位置のソファでのんびり寛ぐのは

難しかった。困惑と疑問でだらけるどころじゃない。

あのイカレ魔法少女がなぜ私を見逃したのか。いいザマと言っていた。仮に私の魔人としての力が弱くなったとして、その状態をいいザマと表したのか。たゆのためとは何なのか。

「お姉さん、悩み事ですか？」

たゆには相談しなかった。につつきレッドグラッジが玄関先まで来ていたと知れば気苦労になるだろうし、心配をかけたくなかった。その場はちゅーで有耶無耶にして、続くえつちで私も忘れた。

が、翌日。

先に起きたたゆが朝ごはんを作っているタイミングで、私はレッドグラッジの言っていた意味をすべて理解することになった。

「——っ!？」

痛い。いつもの発作よりもはるかに激甚な痛みだ。人で言えば心臓のある部分、魔人のコアが引き裂かれるように痛んだ。たゆに助け出されたあの日味わった痛みを一つに濃縮したような、体がバラバラされていくような激痛。

悲鳴さえ出せない痛みは、始まりと同じく唐突に終わった。数時間はあつた気がしたけど時計を見ると一分も経ってない。

「やだ……」

もう限界だった。たゆに気を使わせたくないからと一人で耐え続けた私は、かつてない痛烈な発作でぼつきりと心の折れる音を聞いた。自分の体のはずなのに何も分からないのが怖い。視界が涙で滲んでいく。

とにかくたゆと話をしよう。たゆの存在を感じたい。たゆと一緒になら怖いことはない。たゆが——

「あう」

体から力が抜けた。

愕然とする。とっさにベッドに突いた手先が透けていた。手をかざすと寝室の風景が透けて見え、透明な部分がじわじわと体の方に広がってくる。コアもまた痛くなってきた。

怖い、いやだ。たゆの顔を見たい。一緒にいたい。そうすればきつ

と――

そこまで考えたとき、私は本能的に理解した。

「私はたゆと幸せに生きたい」

口に出すとやっぱり胸が痛くなる。怠惰の魔人のコアが、私の行動で自壊しかけているんだ。

私は何もしなかったために生まれてきた。何も望まず頑張らない。学校に行きたくないとか、ふと眠たくなるとか、人生楽だけして生きていたいとか、人類の何もしたくない思いの結晶。それが私の存在意義で命そのものだ。

なのに私はたゆと出会って以来、望みを抱くことが多くなった。たゆに泣かないでほしい、笑っていてほしい、名前を付けてほしい。お腹を空かさず、健やかでいてほしい。たゆと共に在りたい――一緒に生きていきたい。

そういった望みと私の命が反発している。発作の原因はそれだ。痛みたびに私の命は削れて目減りし、それに伴い権能も弱体化していた。

なるほど魔族憎しのレッドグラτζからすれば確かに「いいザマ」だろう。欲をかけた敵が自滅していくのだから。一目見るだけで分かるあたり、さすが殿堂入り魔法少女だ。

「は、はは……」

私は遠からず死ぬ。

以前のように復活はしないだろう。したとしても私とは全く別の人格になる。なにせ「私」の思いが魔人の存在意義と矛盾しているんだから、私そのまま復活しても無駄だ。私の自我は終わってしまう。

かといって一度抱いた望みを捨てることはできない。だってたゆが好きなんだもの。

好きを捨てるくらいなら、抱え込んだまま消えてってやるよ。

「そのために……やること、やらなきやなあ」

――



「あのさあ。いい加減出ていってくれない?」

「……え?」

朝ごはんの載った食卓を挟んで座るなり、私は言った。垂れ流しのテレビの音がやけに遠く聞こえる。

「泣かれるのも面倒だからなあなあで合わせてやってたけど、もう限界。てか常識ないよ君。何の縁もない女の家は何ヶ月も泊まってさ。親がカスだってんなら兎相にでも行けば?」

「えっ、え、な、何で急に、そんな……私、お姉さんが好きで……お姉さんもこの前、好きだって言ってくれて……」

「だから、合わせてやったんだって。そもそも言葉が軽いんだよ。弱つてるときはまたま優しくされた程度で好きだのなんだの、気色悪い。ラブラブ恋人ごっこはもう終わりでいいじゃない、ていうか終わって? こっちは飽き飽きなのよマジで。えっちも楽しいのは最初だけだったしねえ。分かったら出てけ。分かんなくても消えろバーカ」

思いつく限りの罵倒を述べる間、たゆの顔を見るフリをして焦点をずらしていたけど、ぼやけた中でもたゆの表情ははつきり分かった。

最初は理解が追いつかずぽかんとして、次第に悲しみと怒りでくしゃつと歪み、最後は唇を噛んでうつむき、手を振り上げる。

ビンタくらいは甘んじて受け入れよう。反射的に目を閉じると、痛みはいつまでもやってこない。

目を開けると、たゆはもういなくなっていた。小走りの足音が玄関へ走り、扉の開閉音がして何も聞こえなくなる。

案外簡単だったけど、こんなもんだろう。元々雑な励ましで立ち直り、懐いてきたチョロい子だ。別れもまたチョロかった。

やけに広く感じるリビングに、テレビの音が寒々しく響く。

『楔野町の魔人出現から一ヶ月が過ぎました。闇堕ちしたパステルエッジさんは一体どこにいったのでしょうか』

『おそらく魔人に唆され、軟禁されているのでしょうかねえ。今回の魔人はおそろしく狡猾で用心深く——』

たゆが被害者である論調はずっと変わっていない。

実際そのとおりだろう。私は傷心の魔法少女を誑かし、一般人を傷つけさせ、闇堕ちさせた上に勝手な理由で突き放した。世間はみんな、かわいそうなたゆに同情し、味方してくれるはず。そしてたゆはまっとうに魔法少女を続け、まっとうに幸せになるんだ。

テレビを消して、ぶかぶかのパジャマの袖をまくりあげる。肘から先が透過していた。

目の前の食卓には二人分の朝ごはん。サクサクトースト、シヤキシヤキサラダ、カリカリベーコンとふわふわ目玉焼き。朝ごはんが最後の晚餐になるときつて、朝食と言うのかな？

お箸を持つとうとしても、手がすり抜けてしまう。

「未練がましいなあ」

たゆをあれだけひどい言葉で捨てたのに、私はまだ望んでいる。たゆと幸せに生きることを。

だから体がどんどん消えていく。コアの引き裂かれる痛みが胸に広がる。視界がぐらりと揺れて、椅子から転げ落ちた。胸を抑えて一人惨めにうずくまるさまは、きつと「いいザマ」なんだろう。

『お姉さん！』

遠く声が聞こえた。たゆと過ごしたほんの三ヶ月ちよつとの記憶がめぐる。

ちゅーした後のトロンとした顔。朱に染まる頬と照れたはにかみ顔。床にポイ捨てしたペットボトルとか、残されたニンジンを見たときのむすつとしたふくれっ面。テレビの魔族必殺の報道を見たときの哀しそうな顔。無邪気で幸せに満ちた満面の笑み。

そんなあいつと一緒に時間が楽しくて、私は欲を張った。何もしいししたくない私が、共に幸せになりたいと望んだ。

「……お姉さん？ ど、どうしたんですか、お姉さんっ!？」

過ぎた望みに、あいつを巻き込んだ。せめてそのことを謝りたかった。

「しつかりしてください！ ねえ、ねえってば、何がごめんなんですか、何が起きてるんですか……!？」

いつの間にかあいつが戻ってきている。今にも泣きそうな顔をし

ている。

「起きて、お願い起きてください……こんなにあんまりです……っ！」  
たゆ、君にはこの先たくさんの出会いがある。道がある。テレビとスマホだけじゃ映しきれない世界がある。こんな狭い部屋に閉じこもって、魔人なんかと一緒にいるよりずっと幸せな未来が待ってる。

「そんなの知らない！ 本当に辛いとき、助けてくれたのはお姉さんだった！ 寒くて辛くて苦しいとき隣にいてくれたのはお姉さんだったの！ 私にはお姉さんしか——」

もつと私がかんばればよかったかもしれない。

がんばってたゆと共にいられる道を探すとか。がんばってすべての事情を説明し、がんばって虚しい結末を回避するとかできたのかもしれない。

だけど私はがんばらなかつた。

何もしないし、したくない。

魔人ちゃんは、がんばらない。

——

「がーん、です」

玄関を出てすぐの通路。由立たゆはしょんぼり肩を落とし、そして首をかしげた。

お姉さんはどうしたのだろうか？

朝、顔を合わせるなりものすごく罵倒され、最初は普通にショックだった。ただ、あまりに突然でしかも不自然に感情を抑えたお姉さんの様子に気が付き、ひとまず傷ついたフリをして出ていくことにした。

「生理……いやいや魔人に生理はないですし……昨日、激しくシすぎたですかね？ あっ、それとも、お姉さんの嫌いなニンジンすりつぶしてハンバーグに入れたのバレた……？」

その他、ねじくれた角に洗濯物を引っ掛けたり、角をお湯に煎じて飲んででもいいですかと本気で聞いてみたり。お姉さんに嫌がられた

行為を思い出してはみるが、お姉さんはそれを蒸し返して怒る性格ではない。

いくら首を捻っても分からない。そもそも苛立ちとか怒りというより、お姉さんは焦っているようだった。急いで一人になりたい理由があつたのだろうか。

そこまで考えて、たゆはハツとする。

「また、私のために……?」

お姉さんは基本的に何もしない。一日中ソファかベッドに寝そべり、スマホとテレビを弄つて、ごはんとお風呂を堪能して思い出したように甘えてくる。まさに怠惰の魔人らしいだらけた生活だ。

そんなお姉さんが唯一がんばるときといえば、誰かを助けるとき。何もしないと言うくせに、優しさが抑えきれない。困っている人を前に「何もしない」ができなくなる。

たゆはその優しさに何度も救われてきた。あの見るからに無理をしている罵倒の演技も、自分を助けるためのものかもしれない。

「うーん? ——ん? お姉さん?」

扉にずりずりと背中を押し付け頭を抱えていたたゆは、がたんつ、と何かの倒れる音を聞く。

とたんに胸騒ぎに襲われ、いても立ってもいられない。扉を開けてサンダルを脱ぎ散らかしリビングへ向かう。

「……お姉さん? ど、どうしたんですか、お姉さん?!」

目を疑い、血の気が引いた。倒れた椅子のかたわらにお姉さんがうつ伏せになっている。よほど余裕がないのか隠蔽の魔法が解け、ねじれた一對の角が露わになっていた。

慌てて抱き起こしたお姉さんの体は、異様に軽い。元々薄く細い体つきだが、今は紙のような軽さだ。

「——えっ」

手を握ろうとして、絶句した。

お姉さんの華奢な腕が透けている。握りしめても人肌の感触がなく、空気を掴んでいるようだ。

「ごめん、ね……」

「しつかりしてください！　ねえ、ねえってば、何がごめんなんですか、何が起きてるんですか……!?!」

必死で呼びかけるも反応は薄かった。サファイアのような蒼い瞳は霞んでどこも見ておらず、小さな口からうわごとのような言葉が漏れるばかり。

「君には……たくさんのお会い……広い世界……幸せになる……」

「そんなの知らない！　本当に辛いとき、助けてくれたのはお姉さんだった！　寒くて辛くて苦しいとき隣にいてくれたのはお姉さんだったの！　私にはお姉さんしか——」

直感する。お姉さんは死ぬつもりだ。それは前のように取り返しのつくものではなく、だからこそ突き放してくれた。誰も悲しませないように。

危機的状况にたゆは無意識下で変身する。黒を基調としたシャープな装甲ドレスを身にまとうが、だからといって消えていくお姉さんを助けられる術はなかった。

「いやっ、いやあつ……!」

縫りつき、半ベそをかいても状況は悪くなるばかり。透過は腕から胴体へ広がり、お姉さんの体から光の粒子が舞い始める。それは倒された魔物が消滅するとき特有の反応で、たゆは粒子へ思わず手をのばす。指の間をきらきらとしたものがすり抜けていった。

「これは思ったよりいいザマだねっ★」

「……っ!」

第三者、それも忌々しい女の声に、たゆは弾かれたように振り返る。

「おいしー★　これたゆちゃん作ったの?」

「何を、しにきたんですか」

「あつは★　いいよいいよ、質問に質問で返されてもグラは怒らない

★」

赤黒い魔法少女。黒いレオタードに炎のようなフリルとレースをあしらった装束を纏う。愛用の長大な戟は見当たらない。

レッドグラτζジだ。食卓につき、たゆとお姉さんのための朝食をもぐもぐお上品に食べている。

マイペースかつ優雅にティッシュで口元を拭うと、レッドグラッジは言った。

「魔人の死に様を見に来たの★ 私が殺すより素敵な死に方だね、それ★」

ぶちっ、と。あんまりな言い方にたゆは何か切れる音を聞いた。しかし激情を必死に抑え込み、訳知り顔なレッドグラッジへ問いを重ねる。

「お姉さんに何が起きてるんですか」

「魔人はね、コアの情念に反すると消えちゃうの★ それは何の魔人かな？」

「怠惰の、何もしないししたくない、魔人……」

「ぴんぽーん★ 頑張り屋さんの人類が抑え込んだ、ぐーたらして何もしたくない、考えたくもない無欲の権化つ★ だがそいつは何かを望み、欲し、希った。故に消える。魔人とはそうしたものだ」

無表情に豹変するレッドグラッジの言葉に、たゆは目の前が真っ暗になりそうだった。

『たゆ、大好き』

何もしたくない魔人のお姉さんが欲したものを。それはきつと――

「たゆちゃんをよっほど好きになったんだね★ ひゅーひゅーあつーい★」

「――っ」

あつさりと核心をつかれ、息をのむたゆ。

レッドグラッジは食卓を見回し、トーストを一かじりして続ける。

「だけど魔人と魔法少女は相容れない★ ううん、魔人は存在してはいけないの★ 我々人類の賢明なる理性が抑圧し、切り捨てた悪念。その最たるものが魔人である。故に魔人はことごとく必殺されねばならん。恋慕など言語道断である」

人類はぐうたらを捨て、頑張ることを良しとした。

だからお姉さんが何もしない魔人であっても、存在そのものを許さないのだと。たゆは唇を噛み締め、鉄の味を覚える。

不意に、レッドグラッジの濁いた表情が嫌悪に歪む。

「諦める。その状態の魔人に先はない。だからこそ奴は我が姉を——  
ううん、これは関係ないねっ★」

無表情と笑顔、高い声と低い声がめまぐるしく切り替わる。その様は切れかけた電球の明滅を思わせた。

レッドグラッジはゆらりと席を立ち、思いがけず優しい手付きで、たゆの肩に手を置く。

「受け入れて。これが——運命、なんだよ」

ああ、とたゆは悟る。これを言うために、分からせるために、レッドグラッジは現れたのだろう。魔族と魔法少女と人類が織りなす、どうしようもない世界の仕組みを、お姉さんの消失によって分からせるために。

運命といえはそうなのかもしれない。かの有名なレッドグラッジの固有魔法はその運命を強化し、力とする魔法だ。だからこそ誰よりも魔法少女として強い。

だとすれば——たゆは希望を掴んだ。

「あれっ、殺るの?」

レッドグラッジが目を丸くしている。

たゆは空間から黒く染まった大剣を引きずり出し、倒れ伏すお姉さんの胸に突きつけた。その様子はひと思いにとどめを刺そうとしているようだ。

もちろんそんな訳がない。

「レッドグラッジさんの固有魔法って、魔族必殺でしたよね」

「うんっ★ どんな魔族も必ず殺す、これすなわち運命なり。それがどーしたの?」

「私はその反対ですよ」

「へ?」

ぎしり、と不可視の圧力が空間を満たし、軋みを上げる。

「覚醒もしてないひよこちゃんなんて、もう言わせません」

その源はたゆの握る大剣だ。黒く禍々しい靄が刀剣にまわりつき、圧倒的な存在感を放っている。

「あつちに——」

たゆの戦意をようやく察したのだろう。レッドグラッジは即座に空間から愛用の戟を、

「行つてろおっ！」

取り出すこと叶わず、たゆが突如ぶん回した大剣をその身で受ける。

とつさに両腕でガードしたものの、防御もろともたゆはフルスイング。するとレッドグラッジの体がピンボールのように吹っ飛び、ベランダのガラスを突き破ると、物理的にありえない直線軌道で空の彼方へかっとなで行った。

「よーし邪魔者は退場！ もう一つお願いします運命さん！」

改めてたゆは、大剣の切っ先をお姉さんに向ける。

そして覚醒した魔法の力をいっばいに込め、左胸に突き刺そうとして、

「いやいや」

考え直した。絵面が物騒すぎる。

大剣を床に置き、お姉さんを抱き寄せる。大剣の纏う黒い力が二人を守るように包み込む。

愛しい重みを両腕に感じながら、たゆはいたずらっぽく笑った。

「なんでもかんでもちゅーでゴリ押し、しちやいます」

そして今度こそ躊躇なく、運命の力を熱く口づけするのだった。

――

『魔法少女名：パステルエッジ（闇堕ち済） 武器：堕ちたハートの大剣 固有魔法：魔人必生（特定の魔人を必ず生かし、守り抜く運命） 備考：もつとも危険な闇堕ち魔法少女の一人。見かけても声をかけず、ただちに通報するべし。非ランカーの接触厳禁』

『前代未聞、魔族に与する固有魔法』『レッドグラッジ「誠に遺憾」』『闇狩り、対応を検討』

「はあー……」

なんでこうなっちゃうかなあ。



「どうしたんです？ ネットニュースですか、あ、私のページ！ むむう、この書き方じやまるで猛獣じゃないですか！ 苦情入れましようよ！」

「猛獣みたいなもんだろバカ」

「ひどい!?!」

寂れた地方路線の無人駅。スマホ片手に次の電車を待っていると、思わずため息が漏れた。

「……せつかくまつとうに生きられるチャンスだったのに。すっかりお尋ね者になっちゃったじゃん、君」

「はあく？ まつとう？ 好きな人と一緒にいられないことのどこがまつとうなんですか。お尋ね者？ 上等ですよ誰がなんと言おうと私お姉さんが大好きですっ！」

「寄るな暑苦しい」

私消失事件から3日後。私はすっかり闇墮ちしたたゆと共に逃亡生活を送っている。

私が本当に消える直前、レッドグラッジの言葉からたゆは固有魔法に覚醒し、その力で私を生かしてくれた。だけど消滅寸前までいった私の魔人としての権能は弱体化し、世間や魔法少女の目を誤魔化すことはできなくなった。

権能はいつか復活する、と思う。人々に抑え込まれた「のんびりしたい」気持ちが少しずつ、私の存在を補修していつているから。またあのマンションのような拠点をこさえて怠惰に過ごせる日が戻ってくる。

そんなわけで今は、残った権能である無限の路銀となぜかネットにつながるスマホを頼りに血の気の多い連中から逃げ回っているところだ。

「ところで次の電車はいつです?」

「……一時間後」

「ながー」

時刻表を讀んでやると、たゆは苦笑して天を仰いだ。

待合所の外は夏の熱い日差しが降り注ぎ、蟬の声と新緑の匂いに満

ちている。見渡す限りの水田の間を線路が突っ切って遠く霞む山に通じていて、その向こうには雲まで届く灰色の塔が見えた。

殺意の魔人を封じる、有刺鉄線の巨塔だ。特に目的地を決めるでもなく、成り行き任せで逃げ回っているはずなのに、なぜかちよつとずつ近づいてきている。見るからに不穏だしこれ以上近づきたくない。地図上だとまだ数十キロは距離あるし、反対方向の電車に乗れば大丈夫だろ。

遠くから近くへ意識を戻し、ふと、隣を見上げる。

淡い桃色のワンピースと麦わら帽子のたゆは、楽しそうにほほえみながら、ペットボトルでお茶を飲んでいる。細い首がこくこくと動き、一筋の汗が鎖骨を伝っていく。

横顔をじつと見ていると、優しげなタレ目がにまーつと細まって、「見とれてるんですかあ〜？ えへへ、美少女ですからね私」

「……うん。きれいだよ、たゆ」  
「ふえっ!？」

豊かな胸部とくびれた腰、肉付きのいいお尻から太ももが、桃色の生地に艶やかな曲線を描いている。裾から覗くミルク色のふくらはぎと細い足首が目を見張るほど美しく、スポーツサンダルの先端に見える素足まで、徹頭徹尾愛しくて仕方ない。

「きゆ、急に何ですかあ……じろじろ見すぎですよ……」

好きだなあ、と。改めて思う。

見た目が、体が、声が、性格が。たまにぐいぐい来てうざったいし、どうでもいいことでお小言言ったり拗ねたりするのも面倒だけど、それ含めたゆの存在すべてが好きだ。

じつと見つめ合う。夏の暑さのせいか、たゆの頬が赤い。私の顔も熱くなってきた。

どちらともなく唇を重ねた。私はちよつと腰を浮かせて、たゆの肩によりかかる感じ。たゆは口の中まで蕩けるみたいに熱く、さっきまで飲んでいたお茶の風味がした。私を生かしてくれる魔法の力が注ぎ込まれる快感に、思考がふやけていく。

電車が高い金属音を立てて停車したのを契機に、一旦離れて小休

止。光を呑み込む真つ黒な瞳に吸い込まれそうな気になる。

するとたゆは「あつ」と声を上げ、とろんとしていた目を見開く。

「サファイ」

「……何？」

「お姉さんの名前。サファイです。今決めました」

不意打ちだった。あの破滅的を通り越して終末的なセンスのたゆにしては大人しい発想、というかむしろすごく良い名前のように思えて、サファイ、と口の中で何度もつぶやいてみる。うん、結構好き。

「サファイアみたいにキレイな目だなーって前から思ってたんです。だから、サファイ」

君の目は宝石のようきれいだよ、なんて。キザなことを言うやつだ。恥ずかしくてまともに目も合わせられないじゃないか。

「だ、ダメでした？」

「ダメなわけあるかい。私はサファイ。怠惰の魔人、サファイだ」

「やった！ これからもよろしくです、サファイ！」

うだるように暑いのに、たゆは私を抱きしめる。そのままだと胸に顔が埋まって苦しいのです。と上にずらして気道確保、私も腕を背中に戻した。たゆの匂いと鼓動で私の中が満たされていく。

名前も、命も。私はこいつから貰ってばかりだ。

「ありがとね。色々」

「あーよかった。またごめんって言ったらお仕置きでしたよ？」

「それも悪くないけど」

闇堕ちさせてごめん、なんて今更言わないさ。

さて、おへそのあたりがむずむずしてきたし、もつとねつちより私たちゆーをしたいところではあるけど、その前にやらなきやいけない。

一時間後にしか来ないはずの電車。それがなぜかついさつき到着してて、いつまでも発車する気配がない。

かと思うと、その車両からぞろぞろと何十人も降りてくる。私服姿の男女だけど、共通して腕に『魔族必殺』の腕章を付けている。わざわざダイヤを乱して駆けつけたらしい。

彼ら彼女らは私たちを囲むように扇形に展開し、怨嗟のこもった視線を向けてきた。

「もう追手が来ましたか」

たゆは嫌そうに顔をしかめて変身。とげとげダークな闇堕ち装束を纏い、大剣を正面に構える。

「そのとおり、もう来ちゃったよ★」

男女の包囲を押しつけ、赤い親玉がやってきた。すでに変身済みで、爛々と赤い瞳をぎらつかせ、長大な脈動する戟を肩に担いでいる。

「悪い冗談は終わりだよっ★ 魔人と魔法少女のカップルなんて、ありえないんだから★」

「この前も同じこと言っていましたよね。もう少し変化をつけてくれないうと、追われる側としても飽きちゃいます」

「てかもう飽きたわ帰って帰って」

「そうだそうだよ、やーい変態レオタード」

「あははっ★ 殺す」

浮遊感、次いで破碎音。

私はたゆに抱えられ、宙を舞っていた。さっきまでいた待合所は、戟の横薙でひしゃげて吹き飛んでいる。必殺機構の男女は拳銃やボウガンをこちらに向け、しゃにむに撃っていた。たゆがすべて大剣で弾き飛ばしてくれるけど、あいつら流れ弾とか考えないのかな。

片手で抱えられるのは結構しんどい。走りながらも息を合わせ、うまいことおんぶの態勢に移行した。

すると背後から爆発的な力の高まりを感じる。

『ほとばしれ たぎるうらみよ』

「きゃーっ、大技あ!？」

レッドグラッジの掲げた戟が輝き、幾筋ものレーザーが後ろから迫る。髪の毛がちよつと焦げた。こっわ。

「今掠ったんだけど。もっと気合入れて走れ走れ馬車馬のごとく!」

「サファイもなんかしてくださいよ! 魔人パワーでどかーんって!」

「できるかあ! こちとら怠惰の魔人ちゃんだぞう!」

私の弱さをなめちやいけない。喧嘩したらそのへんの小学生にも

負ける自信がある。こんな鉄火場でできることなんかあるわけないのだ。

「こんのつ、やられっぱなしじゃないですよ！ 『こいねがえ しとどのあいを』」

「ちよっ」

レーザーの隙間を縫って、たゆが振り返りざま大剣をひとふり。その太刀筋から濁血のようにドス黒い球が生まれ、尾を引いて流星雨のごとく翔んでいく。

鮮血の赤と濁血の黒が衝突し、無数の爆発があぜ道を抉った。レッドグラッジは平気そうだけど車が横転して……いや、吹っ飛んでる。爆風に煽られ、放物線を描いて水田に頭から突っ込んでいた。大丈夫かあれ。

「やりすぎじゃね？」

「……最初に撃ってきたのあっちだもーん」

「もーん、じゃねえよコラ」

またレッドグラッジにニユースで遺憾の意とか言われるぞ。

レッドグラッジが戟をぶん回し、たまに魔法をぶっぱして、私は野次を飛ばす。必殺機構の一般人たちは車で追隨しながら飛び道具をちくちくしてきて、たゆは散発的に反撃しつつ自動車並みの速度で逃げ回る。

撒いたら私たちの勝ち、死んだら負け。今のところは全勝だ。たゆによると運命の固有魔法同士が激しく相殺しあってるらしいけど、私には何も見えない。

夏の田舎町に怒号と悲鳴が響く中、私たちは追って追われてを繰り返す。私が元の権能を取り戻すまで。その日は遠くないはずだけど、いつになるかは分からない。もしかすると夏が過ぎ、秋が来て冬が来ても鬼ごっこを続けてるかもしれない。

追手はレッドグラッジと必殺機構だけじゃない。正義感の強い他の魔法少女たちや、たゆを狙って『闇狩り』の連中もやってくるだろう。

だけど私たちは大丈夫。運命に味方されるたゆはびつくりするほ

ど強くなった。私も、『何もしたくない』と『たゆと共に生きたい』矛盾を受け入れた。たゆが受け入れさせてくれた。

大切な人の傍にいて、互いに存在を感じられる。忙しない逃避行でもたゆがいてくれるなら満足だ。

だから私はがんばらない。

――

魔人ちゃんは、がんばらない。

#### 4. 闇狩り

手首のスナップを利かせてたゆのほっぺたをひっぱたく。束ねられたお札がぺしん、と気の抜けた音をたてた。

「くっ、さすが百万円のお札束ビンタですね……もう一度！」

「ねえ、これ何が楽しいの？」

「何か貴重な体験してる感が超楽しいです！ サファイ、早く！」

仕方ないので追撃の札束ビンタを試してみる。たゆはわざとらしく、雑揉み回転しながら笑っている。なんだこれ。

ことの始まりは「サファイの権能って結構デタラメですよ？」というたゆの発言だった。逃避行の間、ATMから手品みたく無限の資金を取り出す私に思うところがあつたらしい。

私の権能は現代社会で何もせず怠惰に暮らすのに役立つものが幅広く含まれる。住環境のための欺瞞と改ざん、社会とつながりを保つ不思議なスマホ、そして資本主義社会に欠かせないっぱいのお金。ただし何もないところから物を生み出すことはできず、ATMや配達などのサービスを經由する必要がある。

と簡単に説明してやると、たゆが「じゃあじゃあ、たくさんおろして札束ビンタできますか？ ぜひに！」と謎の好奇心をアピールしてきたので、減るもんじゃなしと実演してみたわけだ。

「ああん！ 痛いけどなんかリツチな気分！」

「される側がリツチな気分はおかしいだろ」

元からアホなたゆだけど、テンションが天井知らずだ。投げた棒を取って戻ってくる大型犬を彷彿とさせる興奮具合。ちぎれんばかりに尻尾振ってるのが見えそう。

「けどはしやぐのも無理はないかもしれない。

「追手は来ないし……こも暮らしやすい物件だし。ようやく落ち着けるかな……」

何もせず怠惰に暮らす日々はまだ、戻れるかもしれないだから。

魔族必殺機構に追い立てられ楔野町を出た私とたゆは、適度に反撃しつつあてのない逃亡生活を送っていた。弱体化した私の権能でビジネスホテルやたまにラブホなんか寝泊まりしてはすぐに移動する、てんやわんやの生活だった。何しろ少しでも滞在しようもんならレッドグラツジが建物ごと『魔族は必殺だよー★ 死ね』と戟の薙ぎ払いをお見舞いしてくるので、まったく落ち着けない。

転機は今から一週間前、楔野を出て一ヶ月程度経った頃だった。

レッドグラツジ率いる必殺機構の追撃が、ぱったり途絶えたのだ。

最初の一日は私たちも警戒していた。だけど次の日には今のうちにゆつくりしよう、と開き直って拠点になりそうな物件を探し、勝手に居着いて今日までダラダラやっている。

XX州久引町くびきの郊外、丘の上の住宅地にある一軒家。そこが私たちの新しい住処だ。

前みたいに土地とマンションを丸ごと権能で支配するのは無理だけど、この程度の大きさなら弱体化していてもどうにかなる。私が「ここに住む」と決めた時点で止まっていたライフラインは復旧したし、荒れた室内も清潔になった。周辺住民はそもそも一人もいないから認識を誤魔化す必要がない。まさにお誂え向けの物件だ。

一つ問題があるとすれば、

「あの封印、おつきいすねー」

「倒れてきたらたゆがなんとかしてね」

「無理無理、普通に逃げます」

リビングの縁側のガラス戸から、殺意の魔人を封じる有刺鉄線の巨塔が見えすぎるくらいによく見えることだ。

逃げてる最中は近づかないよう意識していたのに、気づけばずいぶん近くにきた。空を縦に断ち割る有刺の塔は、この上なく目障りだ。まだ数十キロ離れてるのにあのデカさ、円周何キロあるんだろう。作ったやつは日照権問題で訴えられちゃえ。

「にしても、なんで有刺鉄線なんですかね。封印といえば普通、御札とかじゃないですか？」



「抑圧と分断の象徴だからでしょ。古今東西、有刺鉄線ほど人類を抑圧してきたもんはないよ」

「そーなんですか?」

封印といえば有刺鉄線一択。抑圧と分断は人の理性そのものだから、魔族の封印には有刺鉄線がうってつけなのだ。こんなの常識なのだ。

「サファイは物知りですね!」

「ふふん」

あのトゲトゲした封印は目障りだけど、追われる身の私たちには恩恵もある。

それは久引町の過疎化だ。かつて十二万人の心身に被害をもたらした上、いつかは確実に解ける怪物の封印と誰が共存できるかという話で、地価は暴落して町の半分以上が雑草だらけの田畑と潰れた企業 の倉庫や工場で埋まってる。特に郊外には竣工直後に殺意が暴れたために未使用のまま放置された空き家が大量にあって、住まいは選 び放題。まさか私たちが近くにいてこのタイミングで封印が解けるな んて都合の悪いことないだろうし、なかなか住みよい町だ。

追手が来なくなり、新しい住居も手に入れた。たゆが私の権能で遊 ぼうと言いだしたのも、まあ内容はこの世のものとは思えないほどく だらないものだったけど、分からなくもない。

私たちは久々に、気が抜けている。

「たゆう」

リビングのソファを手でぽんぽんする。たゆは微笑みながらそこ へ座って、私はすべすべした太ももに頭を乗せた。程よい弾力と温か みが気持ちいい。

「たーゆう」

「何ですか、サファイ」

「呼んだだけ」

「そですか」

あー、くっそ中身がねえ。何のためのやり取りだこれ。

時間の無駄、浪費としか思えない緩み切った空気。やっと戻ってき

たんだ。何もできないししたくない、難しいことは考えたくもない、  
凄まじくだらけきつた怠惰の時間に。

たゆの指が私の髪をサラサラと梳く。手は頭の方へスライドして  
いって、頬から首へ、もつと下へ。

「今、変なところ触ったら怒るからね……」

ぴたつと手が止まった。

えっちは好きだけど今は何もしたくない。全身全霊の全力全開で  
何もしたくないのだ。何なら呼吸さえ遠慮したい。怠惰万歳。

「生殺しですかあ。あ、ちよつと、寝ないでくださいよ！ サファイ？」

「君は……私を膝枕するために生まれてきた……」

「んもー」

手は私の弱いところを離れて、頭をゆつくり優しく、何度も撫でて  
くれる。

私は太ももに頬ずりをしながら、気の済むまで惰眠を貪った。

――

私はたゆのちゅーによって生かされている。

何もしないし望まないために生まれた私は、たゆと共にいることを  
望んだ時点で怠惰の魔人として生きる権利を失った。しかしたゆは  
魔族必生とかいう訳の分からん理不尽固有魔法に覚醒し、その運命的  
な力をちゅーで私に注ぎ込むことで、私が怠惰の魔人のまま生きるこ  
とを可能にした。そしてこの固有魔法、定期的に更新しないと力が弱  
まってしまう。

つまり私はたゆとちゅーしないと生きられない体になってしまっ  
た。

「さあさあサファイ？ おちゅーの時間ですよ」

「注射みたいに言うな、つてか今？ アイス食べたいんだけど」

「後にしてください！ また消えそうになったらどーするんですかっ  
！」

「ちよつ、ま……むぐつ」

これの困ったところは、たゆがその気になれば拒めないことだ。私のため、と真剣な顔で言われたら断れない。

今もそう、定位置のソファから冷蔵庫へアイスを取りに行った帰り、いきなり捕まって唇を奪われた。

壁際に追い詰められ、両手首は掴まれて動かせない。太ももの間にたゆが膝を差し入れてきて、30センチ近い身長差のせいで私はほとんどたゆの膝に座らされている感じ。念入りに動けなくされた。

「ん……サファイ……」

早く終わらないかな、アイス溶けちゃう。

と胡乱げに考えていた私の頭は真っ白になった。

「……っ!?!」

たゆの魔法の力が体に流れ込んでくる。蕩けるように熱くて甘いそれは、途方もない快樂として全身に染み渡り、その気じゃなかった体を臨戦態勢へ陥れた。

魔族必生の一番反則的な部分はこれだ。人が砂糖を甘いと感じるように、生きるために極めて有用なこの魔法は私にとってどうしようもなく気持ちが良い。

日に日に上手くなるたゆの舌使いもあって、私は頭のおかしくなりそうな快樂に身を任せるしかなかった。

「ぶはっ。これでよし！ 無理やりみたいでごめんなさいでしたー」

ようやく解放されたときには立ってる力もなくて、へなへなでへたりこんでしまう。汗とかヨダレとかいろんな水気で全身ぐっしよりだ。床には小さな水たまりもできてる。知らずのうちに落つことしてたアイスは溶けていた。

「あっ、アイス。新しいの取ってきます……サファイ？」

床に身を投げ出すようにして、どうにかたゆの足首を掴む。

「どうしたんですか？ アイス取ってきますっつてば」

「こんの……変態すけべ闇堕ち野郎」

「ひどい!?!」

「ムチムチ巨乳、年齢詐称、アホ、天然!」

「な、なんですか急に！ サファイこそ、えつとえつと、えー、好き!」

悪口を諦めちゃったぞこいつ。語彙力。

ゾンビよろしくたゆの足から這い上がり、シャツの上から豊満な胸を鷲掴みにしてやる。

「ひゃっ」

「熱くて暑くて……今更アイス程度で収まりつかないっての。責任取れコラ」

「それってつまり？」

「……えっちしょ」

それからまる一日、私たちは体を貪り合った。

というか主に私が貪られた。体格差で組み敷かれるのは仕方ないとしても、回を重ねるごとにたゆがメキメキ上達している。終わった後も私の方は腰が痛いのにあいつはピンピンしてるし。魔法少女って恐ろしい。

そんな風に、時折たゆから魔法と快感の詰め合わせを体へ叩き込まれながら、特に何もせずダラダラ過ごした。

炊事洗濯掃除はすべてたゆが担当。必要なものがあれば権能スマホから通販で調達する。食料品や生活必需品は町の中心部にあるスーパーに定期便を頼んだ。

ちゅーしてえっちして、後はソファでだらけながらテレビやスマホで時間の無駄遣いに励む。情報のシャワーを無目的に浴びるのは怠惰のコアによく効く。

『闇堕ち擁護派の活動家が治安素乱の疑いで拘束——』『魔法少女研究の第一人者、大輪道大八郎氏が魔法少女に性的暴行を——』『今夏誕生日を迎える魔法少女グリーングリーンムさんに、最年長魔法少女としての意気込みを——』『反魔過激派グループと機動隊が衝突し死傷者多数——』

テレビの報道は私とたゆのことはすっかり忘れ、えらい人のやらかしとか、芸能人の痴情のもつれとか、誰かが誰かを傷つけたとかの話をおもしろおかしく伝える通常営業に戻っていた。有名魔法少女の闇堕ちも、二ヶ月経てば流れちゃう。人類って忙しない。

たゆは学校をやめたせいか時間を持て余し、新しい趣味を見つけ

た。

それは庭いじりだ。リビングに面する広めの庭は、住み着いた当初雑草だらけだったが、たゆがせつせと草むしりしてキレイに。今はホームセンターに届けてもらったレンガと土、花の種なんかを植えて花壇を作ろうとしている。

「ふんふんふん」

汗を拭い、土に汚れながらもたゆは楽しそうだった。

別にしなくてもいい苦勞をして何かを作ろうとするあたり、たゆも人間なんだと思う。何もせず、ただのうのうと怠惰に生きることが可能でも、頑張らずにはいられない。まあ私もたゆのためになることなら、頑張らないこともないでもないけど。やらんでもいいことをなぜ人は頑張ろうとするのか。

「やはり人間は愚かだ……」

今このときにでもレッドグラスが「やっほー★」とか言っただけなら全部引払わないといけない。その点ちゃんと考えてるのかな。考えてないんだろうな、あいつは。そのときは慰めてあげよう。「サファイア、一緒にやりませんかー？」

愚かな人類が何か言っている。炎天下の作業なのに愚かにも帽子を被っていない。仕方なくたゆの部屋から麦わら帽子を取ってきて、ついでに水と塩飴を縁側にセット。フリスビーの要領で麦わらを投げると、狙い通りたゆの頭に着陸した。

たゆは目を丸くして振り返り、ふにやっとした笑みを浮かべた。

「えへへ、ありがとーです」

「へいへい。暑いから戸、閉めるぞー」

「えっ」

サウナみたいな熱気がリビングに入ってきてヤなんだよサウナ行ったことないけど。

縁側のガラス戸をピシャリと閉め切って、私はソファにふんぞり返った。

この生活はきつと長く続かない。いずれ追手がやってくるのもそうだけど、魔法少女はいつか大人になる。少女の心が大人になったと

き、魔法少女の資格が失われ、魔法も変身もできなくなる。人のたゆはともかく、たゆに生かされる魔人の私は今度こそ死ぬ。

だからせめてそのときまで、今ある幸福と怠惰を精一杯噛みしめて生きていこう。

なーんて決意をしながら、心地よいまどろみの中に堕ちていく。

――

レッドグラτζ率いる魔族必殺機構の存在は、私たちにとってあまりに大きかった。だって、赤いレーザーをぶっぱして戟をぶん回しながら満面の笑みで迫ってくる女と、町中で躊躇なくチャカを向けてくるイカれた連中だ。印象にも残ろうってもんだ。

だけどあいつらに気を取られ、他の追手のことをすっかり忘れていたのは失敗だった。

「こんにちは、闇狩りに来ました!」

「……こんにちは」

たゆが庭いじりに夢中なときに限って呼び鈴が鳴る。どうせまた通販だろうと油断しきって玄関に行ってみたら、そこに居たのは変身済みの魔法少女三人組だった。

普段から角をしまっておくようにしてて良かった。じゃないと今頃とつくに死んでる。

「ここに怪しい女の子たちが暮らしてるって噂を調べに来たの。いくつか質問させてもらっていいかな?」

「めんどくさい、無理」

「待ってえ!」

ドアに足を挟んできやがった。ちえっ、強引なやつめ。

観念してドアを開け、三人の魔法少女と向き合う。いかにも魔法少女らしくへそや腋、内もなどを大胆に晒した色彩豊かな装束だ。朱色、濃紺色、橙色と信号の三色になりそうでならない微妙なトリオ。

「まずは自己紹介だね。私、クロウバーミリオ!」

「あたしはオレンジシリンジ」

「ネイはネイビーバラージユ……三人揃って出来損ない信号隊」

「あ、やっぱり」

「やっぱりって何!? 出来損ないじゃないよ、変なこと言わないでネイちゃん」

「てへ」

ネイビーは無表情で舌を出し、クロウが気を取り直してという風に口を開く。

「えっと、あなたの名前は？」

「サファイ、だ。世界一いい名前でしょ」

「う、うん。素敵だねサファイちゃん！」

揃って首肯する三人。たゆが付けてくれた最高の名前の良さが分かるとはいいい子たちじゃないか。話くらいは聞いてあげよ。

「あのね、この家に怪しい女の子たちが住んでるって噂になってて、その一人があのパステルエッジさんに似てるらしくてね、調べに来たの」

思わず頭を抱える。情報源はおそらく通販か食料品の配達業者だろうか。

この家は登記上では空き家になっている。その家になぜか人がいて電気もガスも通つてて、しかも宅配の依頼まであるんだから違和感が出るのは当然だ。

そういった小さな違和感さえ誤魔化せるのが私の権能だったのに。まだまだ弱体化から抜け出せてはいないみたい。

「何か知ってることがあったら教えてくれ。あたしたちはあの人を助けたいんだ」

「……助ける？」

「闇堕ちした魔法少女を説得して正気に戻す。それが闇狩りの役目だからな」

闇狩り。出会えばなにクロウも言っていたけれど、やはり三人は必殺機構とは別口の魔法少女らしい。

追手の情報はスマホから調べられる範囲で把握している。闇狩りは「闇堕ちした魔法少女の更生」を目的とする慈善団体で、代表から

メンバーまで大半が魔法少女で構成される。ぶつちやけ字面からして暗殺者みたいな想像してて、調べたときは拍子抜けした。

だけど説得すると言っても、この子らは恐ろしい魔人のこと知らないのだろうか。

「たしかパステルエッジは怖い魔人に操られてるんでしょ。君たち三人で大丈夫なの？」

「う……」

クロウとオレンジが痛いところをつかれた風に怯んだ。

ここを押せば追い返せるか、と思っただけのもの、ずいっとネイビーの子が前に出てきて胸を張る。

「大丈夫。このネイビーは一回だけランカーになったこともある。魔人からパステルさんを取り返すくらい訳ない」

「末席に一日だけだったけどな……」

「そこ、うるさい」

「ま、まあまあ。心配してくれてありがとう、でも私たちは大丈夫だから。それで何か知ってることは……」

じーっと物問いたげな視線で見つめてくる三人。これ以上はぐらかせないか。

どーしよ。とりあえずこの子達をたゆに会わせるのはなし。何をどう説得されてもたゆが闇堕ちを辞めるとは思えないし、そもそも簡単に辞められるもんでもないだろう。三対一の不利な争いを仕掛けられたら分が悪い。だけど「あっちの方へ行きました」系のウソで追い返してもまたここに来られたら意味ないし。

あーめんどくさい。考えるのだからい。

思考放棄に陥りかけたそのとき、

「サファイ？ 誰と話してるんですか？」

この場で一番の影響力がある声があった。

振り返ると、軍手に麦わら帽装備のたゆがきよとんとこつちを見つめている。園芸作業に一段落ついたみたい。

一拍遅れて私の後ろに目をやり——黒い旋風が吹き荒れた。

「何をされたんですか、サファイ？」



「ほ、ほほほんといいたあー！」

「お、落ち着けまじはボスに連絡を……あ、でもバレたら怒られる……」

「……」

文字通り目にも止まらない高速でたゆが変身し、私と三人の間に割って入っていた。トゲトゲしたアーマードレスは前面に比べて背面がほぼ丸出しで、首筋から尾てい骨のあたりまで滑らかな背中が丸見えだ。

と、見とれてる場合じゃない。たゆは後ろ手に構え、いつでも空間から大剣を引き抜いてフルスイングできる体勢だ。

「何もされてない、大丈夫だよ」

「……よかった」

たゆがほつと力を抜いたとたん、三人娘が語りかけてきた。

「パステルエツジさん、目を覚まして！ あなたは闇堕ちするような人じゃなかったでしょー！」

「一生懸命に魔物と戦ってたじゃんか。あたしらみんな、あんたのフォロワーだぜ」

「闇堕ちは不可逆じゃない。時間はかかるけど、闇狩りの施設できちんと治療をすれば元に戻る」

「さあ、私たちと一緒に行くろう？ 怖い魔人が戻ってくる前に！」

「……はあー」

うわっ、たゆのこんな重たいため息初めて聞いたかもしれない。私としては、道を違えた先達を説得する熱い魔法少女たち、みたいな絵面にじんと来ていたのだけど。たゆはお気に召さなかったのかな。

クロウが差し伸べた手を完全に無視して、たゆは私の後ろに回った。首に手を回し、頭に顎を乗つけてくる。

「怖い魔人、ですか」

「そうだよ？ 魔人はみんな人のふりをしてひどいことをするの。パステルエツジさんもきつと騙されて……」

「はい、分かりました。分かり合えないことがよおしく分かりました」「えっ」

これも、なかなか聞かない冷え切った声音だ。聞いているだけなのに  
なんか怖い。

「帰ってください」

明確な拒絶だった。よかった、もし万が一たゆがこの子達側につく  
なんて言ったら、私は一生立ち直れないと思う。つい首元のたゆの腕  
を握る。トゲトゲした装甲板に覆われていて触っただけで痛かった。  
なんちゅー物騒な鎧だよ。

重苦しい沈黙が玄関先に満ちる。クロウとオレンジは取り残され  
た迷子のような心細い顔で、差し伸べた手を寄る辺なく揺らしてい  
る。

一方、まったく動じない剛の者もいた。表情の読めない濃紺色、ネ  
イビーバラージュだ。

「そうはいかない。ネイたちは闇狩り」

「それが？」

「心に巣食う闇を狩り、魔法少女を救う。そのためには実力行使も認  
められている——パステルエッジ。ネイたちと一緒に来てもらう。  
たとえば無理やりにでも」

「ネイちゃん!？」

「いや、クロウ。手ぶらで帰ったらボスが……」

「あつ、そっか」

決然としたネイビーの横でクロウとオレンジが密談している。

一方、ケンカを売られたたゆことパステルエッジはというと、

「上等ですよ。表に出なさい」

大剣をずるりと引き抜き、全力で買う姿勢だった。

そのときの表情は、いつものぼわぼわしたものとは違って獰猛に牙  
を剥き出す猟犬のようで、あまりのかっこよさに私は声も出なかつ  
た。私の恋人カツコイイ。

そんなこんなで、三対一の魔法少女バトルが勃発するのだった。

——

「参った、降参する」

「ええ……」

あつさり両手を上げて敗北を認めたネイビーブルーバラージュに対し、たゆは振り上げた大剣を所在なさげに漂わせる。困惑顔で私の方を振り返るけど、こつちもどうリアクションしたらいいのか分かんらん。

人気のない表の路地で勃発した魔法少女バトルは、戦いというかむしろ蹂躞の様相を呈し、およそ三十秒で決着した。

大体十メートルくらい距離を取って向かい合い、武器を構えた。クロウは朱い鉤爪、オレンジは橙色の巨大な注射器、ネイビーは濃紺色のガトリングガンで、素人の私から見ても強そうな布陣だった。

だけど私が合図した瞬間にたゆが一条の黒い光線と化し、気づけばクロウとオレンジがたんこぶをこさえて倒れていた。

最後の一人、ネイビーに向けて大剣を振り上げているのが見えたと思ったら、ネイビーが降参して今に至る。

「痛いよー!」

「うう、頭がくらくらするぜ……」

「えつと……だ、大丈夫ですか? そんなに強く叩いてないはずですけど」

たゆは大剣を空間にしまって、半ベそをかくクロウを助け起こしている。なんだこれ。

正直もつと苦戦するか、最悪負けそうにはなるかと思ってた。レットグラッジと一対一で戦った結果が印象に残ってるし、その後の逃避行でも逃げに徹して戦うことはなかったから、三人相手に勝てる訳ない。だからいつでも割って入れるように同席した。たゆが負けたら私も終わりだし。

なんて風に半ば覚悟を決めていたら結果は圧勝だ。固有魔法とかランキングとか、魔法少女の力量ってよく分かんない。

『そりゃこうなるよお。パステルちゃん、闇堕ちで出力上がったる上に地力でも勝ってるからねえ』

「そうなの?」

『そだよお。そもそも、魔法少女を五年続ける時点で相当希少なん

だあ。魔物って見た目怖いでしょお？ せっかく変身できたデビュー初日に魔物に出くわして、即日引退する子がほとんどだからねえ。ランキング常連のパステルちゃんに敵う子はあるまいないのさあ。』

「レッドグライツは？」

『あの子と他の魔法少女を比較するのはあ、三輪車と自動車を比べるようなものだよ。』

ということは、たゆは闇堕ちと運命の固有魔法で自動車と張り合っている三輪車。一般三輪車魔法少女たちに遅れを取るはずがないわけだ。勉強になった。

なつたけども。

「えっ、何この声、誰!？」

このやけに間延びした女の声は何だ。どこから聞こえるかはつきりしない、強いて言えば私を包む空気そのものが喋っているような声。当たり前前みたいに話しかけられたせいで気づくのが遅れた。

たゆは頭を抑えて涙ぐむクロウを心配していてこつちの異常に気づいていない。

ひとまずたゆの元へ避難しようとする、謎の声は厳かに告げた。

『わ、我こそは夏の風物詩い、天の声だよ。』

「天の声？ えっ、何それ？」

『夏になるとたまーに聞こえるう、夏の妖精さんの声さあ。』

「いやいやいやいや、ないでしょ。妖精さんなんてそんな聞いたことないし……」

『そりゃ誰も話題にしないからねえ。たとえば夏に蝉の音が聞こえることを、殊更に話す人はいないでしょお？』

言われてみればそんな気がしてきた。

もとより私が生まれ持っている知識や価値観なんて、完全なものじゃない。情念の持ち主である不特定多数の知識の寄せ集めだから一般常識に穴があるのだろう。天の声が夏には当たり前とは知らなかった。

『それよりい、キサマって魔人ちゃんでしょお？ 天の声だから

知ってるよお〜」

「あ、あんまり言いふらさないでよ」

『この質問に答えてくれたらねえ〜。キサマ、五年前に生まれたでしよう?』

「えっ、二年前だけど」

やけに自信のある口ぶりだった。質問というか確認の意味合いを感じるほどに確信のある問いかけ。

でも私の生まれは二年と少し前で間違いない。たしか春頃に楔野の町中にぼつんと発生して、暦が二周するまで怠惰に過ごし、たゆと出会った。五年も前の話じゃない。

天の声は唐突に途切れ、気味の悪い沈黙が後に残って、

「ちよつと待って私二回夏を経験したけど天の声とか聞いたことない。さつき言ってたのウソでしょ、ねえ?」

「サファイ、一人で何言ってるんですか……?」

周りの空気にしゅっしゅつと魔人パンチを放ちながら問い詰めていると、たゆがかわいそうなものを見る目で近づいてきた。その手には敗北した魔法少女、クロウバーミリオの腕をガツチリ掴んでいて、もう二人が不安げな表情で後ろからついてきている。

そうだ、今は胡散臭い謎現象より先に、この三人の扱いを考えないと。このまま帰してたゆの居場所を吹聴されたら何が訪ねてくるかわからない。

夏の暑さで幻聴を聞いたことにして、ひとまず玄関の方へ踵を返した。

「まあ上がってよ。外は暑いし」

変な声も聞こえるし。

――

「すーずしー!」

冷房の利いたリビングに足を踏み入れるなり、敗北魔法少女トリオは変身を解除し、普通の少女の姿でくつろぎ始めた。クロウとオレン

ジがソファに陣取ってテレビを点け、ネイビーは寝転がって「冷たい」と床に頬ずりしている。自由かよ。

この子たちはたゆに手も足も出ないけど、この家のことをもつと厄介な勢力に告げ口されたら面倒くさい。いい感じの処遇を考えなきゃ。

食卓でたゆと向かい合い、捕虜の扱い会議を始める。

「記憶を消す魔法とかない？」

「そんな都合のいい力ないですよ。あつても、存在ごと消そうと思えば消せますよ。跡形もなくどかーんって」

「こら」

「冗談ですって」

舌を出して笑うたゆ。かわいいけど、それを聞いたクロウとオレンジは抱き合っただる震えている。大丈夫、そのつもりならさつき戦ったときやってただろうし、冗談に決まってる。冗談だよね？

「ずっと気になってたけど」

話し合っていると、いつの間にかネイビーが食卓の横にしゃがんで顔だけを覗かせていた。眠そうな半目が上目がちに見上げてくる。

「銀髪のあなた、サファイちゃん。パステルエッジとどういう関係？そもそもなぜこの家に？」

言われてみれば、という風な視線をクロウとオレンジが送ってくる。二人と同じような表情で私とたゆも顔を見合わせる。そういえば私の立場が曖昧なままだった。魔人の角を隠して一見普通の銀髪幼女な私が、お尋ね者のたゆとなぜ一緒にいるのか。

早く答えなきや怪しまれる。たゆには任せろの意を込めた目配せをして、アドリブ十割の身の上話をでっちあげた。

「私の父は海外の資産家で、この家を別荘として買ってくれたの。訳あって一人で暮らしたら、この子がお腹を空かしてるのを見かけてね。ご飯をあげたらそれ以来懐かれて同棲してるってわけ」

「ふうん」

「サファイちゃんは優しいんだね！」

「そんなに小さいのに一人暮らしなんて、えらい子だな」

三人は納得したように見える。ふふん、これでも欺瞞と改ざんの権能でダラダラ過ごしてきたんだ、女の子三人言い包めるなんて造作もない。

「でも、パステルエッジさんを操ってる魔人は？ 一緒にいるはずだよね？」

「そ、それは……お茶をしに行った。殺意の魔人のところに」

「お茶!? 魔人ってお茶飲むのか!？」

「お茶くらい飲むよ、そりゃ」

造作もない、はず。三人の目が訝しげになったような気がするのきつとおそらく気のせい。

「むう……」

たゆの目がちよつと怖い。犬や猫に餌付けして懐かれたような響きが気に入らない、とアイコンタクトだけで伝わってくる。細かいこと気にしてんじゃないよ。

しばらく不満顔のたゆだったけど、唐突にぱつと瞳を輝かせて立ち上がった。三人の注目を浴びながら食卓を回り込み、私の後ろに陣取って首に腕を回してくる。なんだなんだ。

「三人とも、もう帰っていいですよ」

「えっ?」

「いいのか?」

「しめしめ、これで援軍をたくさん呼んで——」

「たーだーし」

ぎゅーつと私を後ろから抱きしめて、

「私たちがここにいることを誰かに話したら……サファイがどうなつても知りませんよ?」

あー、なるほど。

立場上は一般銀髪幼女な私を人質に取ろうつてことか。レッドグラッジとは違って普通に人の良さそうな三人は効果てきめんみたいで、驚きに目を見開いている。

「ひ、ひどいよ! 親切にしてくれたサファイちゃんを人質にするの!？」

「そこまで堕ちたか、パステルエッジ……!」

「鬼畜の所業、外道の極み」

「ちよ、ちよっと」

すごく効いてるけど、これじゃたゆが悪者になっちゃうじゃん。

私が振り向いて抗議するより早く、耳たぶに甘美な感触が送った。

「ひゃあん！ や、ダメえ……っ！」

「やめてっ、サファイちゃんにひどいことしないで！」

「あたしらはあんたのことを誰にも話さない。噂はウソだったって町の人に報告するよ、それでいいんだろ！」

「約束する。だから放してあげて」

「ふっふっふ、いいでしょう」

ちくしょー、耳たぶ甘噛みだけでこんなに気持ちよくされてしまうとは。ぐったりテーブルに突っ伏して横向きになった私の视界の中で、三人が悔しげにたゆを睨みつけながら、泣きそうな顔で私を一瞥し退室していくのが見えた。玄関の扉の開閉音が聞こえて、それきり三人の気配は消える。

私は机に伏せたまま、隠していた角を露わにした。

「……サファイ、怒ってます？」

「たゆが悪者になんなくていいのに」

体を起こしてのけぞり、角をたゆの胸のぐりぐり押し付けてやる。

おっぱいがたゆんたゆんするばかりでダメーヅにならない。

「いつもサファイばかり悪者扱いでしょ。少しは私にも背負わせてください、ね？」

「ふんっ、君みたいな能天気が悪者は似合わないっての」

余計な気を回しやがってこいつめ。

こうして私たちは、初めての闇狩り魔法少女たちとの遭遇戦をどうにか切り抜け、事なきを得た。

一つだけ大きな誤算があったとすれば——この日の出来事は終わりではなく、始まりだったことである。



「たのもー!」

「今日こそお縄についてもらうぜ、パスエルエッジ!」

「年貢の納め時っ」

「まーたですか」

闇狩りの三人は翌日から毎日やってきた。

数は三人で固定だし、テレビやネットを見てもたゆの居場所については流れてないので、秘密は守られている。ただ、三人は口を噤む代わりにたゆへ挑戦することで正義感を満足させてみたい。結果は初日と変わらず、一分もたずに大剣の腹で叩かれて降参。うちのたゆが強すぎて惚れそう。もう惚れてるけど。

「うう、強い……」

「こんな力があるのに、どうして人質なんか……」

「心の闇を狩る……命ある限り……がくっ」

「はいはい、適当に涼んだら帰ってくださいね」

瞬殺したあと真夏の路上に放置するわけにもいかず、冷房の効いたうちのリビングまで運び、回復したら勝手に三人は帰っていく。帰り際に私の手を両手で握って、「必ず助けるから。私たちを信じて!」とか「気を強く持て。正義は必ず勝つ」とか「ここは涼しくて、アイスもある。だからもう少し待ってて」とか真顔で言い置いていくから、私はもうどんな顔すればいいのか分からなくなる。特に最後、涼しくてアイスがあるから何だよ。

あまりにもいいとこなしな負けっぷりのため、オレンジが盛大に負け惜しみを吐く日もあった。

「むむうー! ボスに知らせたらパステルさんでもイツパツなんだからなっ!」

「あ、そーですか。じゃあサファイはどうなってもいいんですね?」

「やつ、たゆ、こんな人前で……!」

「だ、ダメだダメだ! やめろ!」

この日分かったのは人前でたゆに触られると興奮するってことと、三人のボスについてだった。

直接聞き出したわけじゃない。だけど『闇狩り ボス』で検索すれ

ば、たゆをイツパツで伸すらしい魔法少女のことがすぐに分かった。  
『魔法少女名：グリーングリーム 武器：マンキヤツチャー 固有魔法：翠緑深深（草木や岩石の色に擬態する力） 経験：79年 ランク：殿堂入り 備考：慈善団体「闇狩り」の代表。史上最年長の魔法少女』  
「少女とは……？」

異常な経験年数で目が点になった。レッドグラッジと同じ殿堂入りなのも気になる。

だけど固有魔法が存外にしよほいというか、たゆやグラッジの運命系のそれに比べて見劣りする感は否めない。闇狩りの長というからてつきり闇堕ち魔法少女を必ず殺す力かと思ってたのに、実際はカメレオンみたいな力だ。うっかり出くわしてもたゆと一緒になら大丈夫。たゆの運命の方が強いもん、平気平気。

スマホを眺めてたゆでマウントを取っていると、クロウとネイビーが憂鬱なため息をつく。

「どっちにしるボスには言えないよー」

「相談もせずにここに来たから……バレたら怒られる」

「ハウレンソウすっかりしていけー」

「サファイ、今日はハウレンソウが食べたいんですか？」

「違うわ」

「私、ハウレンソウは茎のところが好き！」

「やかましいわ」

当たり前のように会話に入ってくるな。三人はいまいち緊張感があるのかないのかよくわからない。

こういった三人のふにやふにやした空気にあてられたのか、それとも暑さにやられたのか。たゆは日常の中で前触れもなく変身して大剣を振り回すようになった。

「曲者おっー」

と叫んで何も無い空間を切り裂くんだけど、この場合曲者なのはたゆだ。うちは床下や天井裏に忍者が潜めるつくりはしていない。たぶん気が緩んだタイミングでまた闇狩りなんてのがやってきたから、情緒に多少不具合が出てるのかもしれない。

「ほんとに怪しい雰囲気でしたんですよ！」

平和な昼下がりのリビングを油断なく睨みつけるたゆは、獲物を威嚇する猟犬みたいだった。ちょうど蚊が入ってきていたのでついでに退治を頼んでみると、一閃。残心を取るたゆの足元に真つ二つの虫が落ちていく。達人かよ。

「なんならコバエだって全部斬れます！」

ドヤ顔のたゆをしゃがませて頭をわしゃわしゃしてやった。それが効いたのか、空気を切ろうとする奇行はぱたりと止んだ。

――

夏休みは休みだ。休みとは何もせず何も考えずだらだらと時間を浪費するものであるはず。

なのに闇狩りの三人は毎日勝ち目の見えないたゆにボコボコにされて、合間に宿題をやったりうちの家事を手伝ったりしてる。誰かに頼まれたわけでもないくせに、どうしてそこまで苦労したがるんだろう。

「別に義務があるわけでもなし、そんなにがんばらなくてよくない？」

ある日、助けられる身の上なくせにいついそう聞いてみた。毎日毎日たゆに挑んではあしらわれる三人を見てると、怠惰の魔人として疑念を抑えられなかった。なんで人はがんばろうとするのか。

「ですよねー。あつ、これかわいいー！」

たゆも同意した。私を膝の上に抱えて、髪をツイントールにしたりお団子にしたりして遊んでいる。最終的にツイントで固定された。ちよつと子供っぽくないだろうか。

三人は顔を見合わせると、代表してクロウが言う。

「闇狩りが好きなの。とつてもかっこよくて、私たちの憧れなんだ」「えー？ どこにかっこいい要素あるんです？」

「誰でも、たゆちゃんみたいに強い魔法少女でも、間違えることはあると思うんだ。だって人だから。闇狩りはね、真っ直ぐな気持ちで間違えた人に向き合って、心の闇を狩る。その人は間違いに気づいて、ま

た前に歩き出せる。ねっ、これってすごく素敵でしょ?」

だから、と続けるクロウ。

「私たちはたゆちゃんを見捨てない。たとえ何回負けたって、あなたの闇を狩るまで諦めないんだから!」

力強い笑顔で手を差し伸べるクロウと、彼女に寄り添うネイビーにオレンジの三人組は、紛れもない正義の味方。世が求める魔法少女像そのものといっぴいきらめきを放っていた。魔人の私でもかっこいい、と少し思った。

負の情念の塊である魔族とは逆に、魔法少女は捨てられた正の情念の受け皿。たとえば憧れの誰かのようになりたいたいとか、将来の夢を叶えたいとか思ったとき、その思いがすべて報われることはない。夢見がちな人々は現実には急かされて、なりたかった自分になれないといつか悟る。そうして人々の諦めた願い、望み、憧れを受け取り力とするのが魔法少女だ。

三人はその定義にこの上なく適う、模範的な魔法少女に見えた。

だけどたゆは構わず私の髪をリボンで束ねながら、

「私は私の闇を含めて、自分のことを気に入ってます。それでも狩りますか?」

「……えっ?」

三人は意表をつかれたように目を見開く。呆然と開いた口を震わせて何かを言いかけ、嚙み、目を泳がせる。

「でも……闇堕ちは、いけないことだし……危ない、から……」

「危ないって、どこが?」

「えつと……」

たゆは私のツインテールを完成させると、頭に顎を乗せてきた。口ぶりからしてからかうような目をしているのが分かる。

しどろもどろのクロウは縋るような目をオレンジへ向け、オレンジもまた首を捻って黙り込む。

沈黙を割ったのは、ネイビーの静かな声だった。

「たゆは人質を盾にネイたちを脅迫している。少なくともこれは危ないし、いけないこと」

「そ、そう！　そうだよ。だから闇狩りを諦めない！」

「そうだそうだ！」

「くふふっ」

たゆが忍び笑いをこぼし、私はなんだか申し訳なくなってきた。三人が続った動機は都合の良いウソである。

純粋な正義の魔法少女を嘘っぱちで揺さぶるなんて、私たちもようやく世評に近づいてきた感がある。三人はいつもよりも若干元気がない足取りで帰っていった。

しかし翌日、朝一番でやってきた三人の元気はぎつと百倍に燃え盛っていた。

「おはよー！」

「おはよーです。今日は早いですねー」

「うんっ。昨日は悩んだけど、結局難しいことは分からないからさ」

「とにかくサファイだけ解放して他は後で考えることにした！」

「魔法少女秘奥義、問題の先送り」

まさかの思考放棄である。このタイミングで私が魔人バレしたらこの子ら継るものがなくなるんだよな。実際やりはしないけど、いたずら心が湧く。

「そーですか。じゃ、心置きなくやりましょうか」

「痛いっ」

今日もたゆと闇狩りが衝突している。人気のない寂れた住宅街の路地に、ごん、ごん、ごんと痛そうな音が響き、朱色と橙色、濃紺色の少女たちがたんこぶを抑えて悶絶する。黒いトゲトゲアーマーのたゆは私の方を振り向いてドヤ顔で胸を張り、獲物をとってきた猫を思わせる。

八月半ば、蝉しぐれが遠く響く盛夏の、慣れきった日常。四色の魔法少女がじゃれ合う様は毎日代わり映えせず、怠惰に眺めるにはもってこいの見世物で。

そこにどぎつい緑が差し込んだことで、あっけなく壊れるのだった。

ツインテールの銀髪幼女。薄手のTシャツとフリルスカートで着飾った私が、玄関に入っすぐの姿見に写っている。自分じやなんとも思わないけど、たゆが選んでくれた髪型と服だから、たぶんかわいい。

「だーかーらー！ 変身が遅いし武器の実体化はもつともつと遅い！ 魔力運用が赤ちゃんなんです！ まずは素振り千回っ！」

「うう、鬼い……」

「ネイはガトリングガンのため、素振りは不可能」

「やろうと思えばできますっ！ 正しいフォームではいせーのっ！」

「いち、につ、さんっ！」

外からは熱血コーチと化したたゆの怒鳴り声が聞こえる。かわいそうなほど進歩しない三人組にたゆの方が我慢できなくなったらしく、警察に手錠の使い方を教える犯人めいた構図になってる。もちろん今日の分の戦いはとつくにたゆの勝ちで終わった。

熱血指導員のたゆは見ていて新鮮だけど暑い中付き合うのはしんどい。夏は冷房の効きすぎた室内で凍えるに限る。

リビングのソファに身を預け、無目的にテレビをつける。ごうごうと冷房の唸る声と雑多な情報のごった煮が広い空間に満ちた。

『さあ、みんな一緒に★ 魔族皆殺すべしー★』  
「変なCM」

赤黒いあいつが不意打ちで電波に乗ってきててももう動揺はしない。どの局のCMでも出てくるからさすがに慣れた。

ただ、レッドグラッジは最近めつきりテレビで見なくなった。生放送だけでなく収録番組からも姿を消し、唯一出てくるCMがやけに印象に残る。

弱体化した私の権能でヤツの嗅覚を欺くことはできない。なのにヤツが私たちを放置するばかりか魔族必殺の普及さえ疎かにしているのはなぜか——答えは一つだ。

「夏バテかな」

こんなに暑い中、炎天下で私たちと鬼ごっことかさすがにやりたくないのだろう。メディア出演を減らしたのも暑さのせいだ。だっていくら魔族憎しといっても、あんなに一生懸命やったらしんどくなるに決まってる。今頃ヤツは死んだ目でベッドに寝転がり、スマホで魔族への悪口を書き込みまくってるに違いない。「魔族氏ね」とか。「むふふ」

かわいいところもあるじゃないか。頑張りすぎな人類代表としてせいぜい怠惰に溺れるといい。

妄想に浸っているとCMが開け、お昼の情報番組が始まった。

『ニュースの時間です。魔法少女グリーングリームさんが本日誕生日を迎え、現役最年長記録を更新しました。魔法少女としては史上初めて傘寿を迎え、全国各地からお祝いのメッセージが届いています——』

老若男女、様々な年代の人々がインタビューに答えていく。彼ら彼女らは緑色の帽子や布、服などを身に着けて「実にめでたい」「これからも頑張つてほしい」「これからも闇に灯る薄明かりで在り続けてもらいたい」などなど、にこやかな祝賀の言葉を連ねる。

グリーングリーム。表でうちのたゆに扱われている三人組のボスだ。

『グリーングリームさんは闇狩りの長として広く知られており、数多くの闇堕ち魔法少女を更生へ導いた功績が讃えられ——』

アナウンサーの読み上げと共に、どぎつい緑の装束が映像に映り込む。

人の形をした古木のような印象だった。肩から足元まで覆う緑のローブと、同色のつば広帽子を被り、つばの切れ目からエメラルド色の瞳が周囲を睨めつけている。ローブと帽子の表面は、陽光を照り返す夏山のような万緑で覆われ、森の中に入ればよく擬態できそう。ギリスーツっていうのかな。

手には不良が改造した刺叉みみたいな長柄の武器が握られている。U字金具の内側に返しのスパイクが乱杭歯みたいに生え揃い、映像越しにも禍々しい威圧感がある。魔法の武器、マンキヤッチャーだ。

「誰か突っ込めよ」

傘寿で。八十年魔法少女やってるってなんだよ。当たり前みたいに受け入れて称賛してんじゃないよ。

魔法少女は心が大人になったとき力を失う。瑞々しい変身願望が無機質な現実には砕かれたとき、諦められた希望の受け皿でいられなくなる。

ってことは、グリーングリームは八十年経ってもまだ心が夢見がちな少女のままってわけだ。それは果たして褒められるようなことなのか。

『いやあくお手本になる大人が全然なくてさあく。ずっと子供でいいやあくって思ってたらこうなっちゃってえく。お祝いありがとうねえく』

コメントを求められたグリーンがそう答え、大衆の笑いを誘う。

原色の緑の装束が消え、スタジオのアナウンサーに映像が切り替わる。

にも関わらず、緑は依然としてそこにある。

「子供でいいやっていうかあく、ほんとにはこんな腐った大人たちはやだなあって感じだよあく。言葉選べるのえらいでしょあく」

「……は？」

ソファのすぐそば、フローリングに緑色の人影が横座りしている。

たった今テレビに写っていた人物とまったく同じ色合い、装束。ギリースーツのような深緑のローブとつばの広い帽子。

つばの切り欠けから緑色の瞳が覗き、ぼつちりと目が合う。その目はにつこりと、人好きのする笑みに細まる。

「こんにちはあく。天の声改め、最年長魔法少女のグリーングリームだよお。『最早魔女だろ』は言っちゃダメえく」

「こつ、こんにちは？」

条件反射であいさつを返すのが精一杯だった。

いつの間に入ってきた？ なぜここに、いやたゆを狙ってきたとしてなぜここが分かった？ まさかクロウたちが情報を漏らしたのか



「天の声聞こえたでしょお〜？ あの日からずーつとこの家にいたんだよお〜。キサマとたゆちやんのラブラブも見てたあ〜」  
「なっ」

「どうやってかというとお〜、『るいるいと みどりかさねっ』」  
グリーングリームが消えた。かと思うと、出どころの分からないほやけた声が聞こえる。

「こうやって固有魔法でえ〜、空気に擬態してたんだあ〜」  
「く、空気？ 草木や岩石じゃなくて？」

「ネットの情報はこちらと古いよお〜。今の魔法は翠緑深深じゃなくて、万緑累累。『万物の形相と色彩に擬態する力』なんだあ〜」  
「何それずるい」

「八十年も魔法少女やってるとお〜、魔法だつて成長するよお〜」  
成長しすぎだろ。もうそれ擬態というか変身じゃん、ずるい。赤いのとたゆの運命といい、なんで魔法少女の固有魔法は理不尽な力ばかりなのか。

一つ大きな深呼吸を試してみる。よし、落ち着いた。私には心臓がないから緊張が尾を引かない。

次の瞬間、目と鼻の先に爛々とした緑の瞳があった。空気への擬態を解いて膝立ちになっているらしい。

「魔人ちゃんの目はキレイだねえ〜。お空の色みたいだよお〜」

「……赤いには、挟りたくなるって言われたけど」

「あははあ、グラちゃんならそう言うだろうねえ〜。ところで、紙とペンない？」

「えっ？ 確か電話のところにあると思うけど」

グリーンはひよいと身を翻し、なぜかつながる電話の横のメモをちぎって、何かを走り書きする。

それからこつちへ戻つてくると、私は抵抗する間もなく横抱きにされた。

「何するのっ」

「ちよつと時間がないみたいでさあ〜、誘拐させてほしいんだあ〜」

「ゆ、なっ、ふざけないで！」

もうバレてるなら隠す意味はない。おぞましいねじれ角を生やし、首を振って二の腕を狙う。たゆとのじゃれ合いとは違って刺すつもりの一撃だ。

が、返ってきた感触は肉じゃなくて硬い壁にぶつかっただようなそれだった。逆に私の首が痛い。分厚い緑の装束がそのまま鎧みたいになってるのか。

帽子の陰にある素顔の中に、緑の瞳がぼんやりと瞬いている。生き物とは思えない冷たい眼光に思わず身がすくんだ。

「先に謝っておくねえ〜」

震えを抑え、せめて睨みつけているうちに、グリーンは庭へ出る。たゆたちはまだ戻ってこない。

「結構辛い目に遭わせるよお〜。ごめんねえ〜」

グリーンがそう言ったとたん浮遊感に包まれ、眼下に小さくなつていく我が家が見えた。魔法少女の膂力で跳躍したみたい。

下手に抵抗して落ちたら死なないにしてもめっちゃ痛い。おとなしくたゆが助けに来てくれるのを待った方がいい。

ふん、辛い目に遭わせるだつて？ うちのたゆは強いんだ。年増の緑女なんかすぐこてんぱんだからなざまあみろ。

私はひとまず抵抗を諦め、流れに身を任せた。

――

丘の上の住宅地から連れて行かれたのは、麓にある廃倉庫群の一画だった。

まばらに資材の放置されたがらんとした空間に着地し、グリーンが私を下ろす。

すぐに距離を取ろうとしたけど、どこからか取り出したマンキヤツチャーの横ぶりで体を叩かれる。

「え………？」

と思つたら、マンキヤツチャーは私をすりと通り抜けた。

何のつもりだと聞くより早く、意味が分かった。マンキヤツチャー

の穂先を模した、棘だらけの光の輪が、私の両手首に嵌められている。光の輪はひとりでに動いて、両手首を頭上で固定した。動こうとするたび輪の内側の棘が手首に食い込む。

「無理に動くと手が千切れちゃうよお〜」

「……何がしたいの、君」

「すぐに分かるさあ〜」

と言つて、グリーンが私のシャツに、たゆが選んでくれた服に手をかけ、左右に引き裂いた。

長い手指が触手みたいに体の上を這い回り、思わず顔をそらす。たゆに触られたらどこだって気持ちいいのに、グリーンの手付きには嫌悪感しか覚えない。

「いやっ、やめろお……っ!」

「不思議だよねえ〜。人の気持ちが集まったただけなのに、どうして女の子の形になるのかなあ〜?」

指はお腹を焦らすように撫で回し、下へ下へと徐々に進んでいく。気持ち悪い、怖い。

「だーれも考えようとしななんだあ〜。魔族は人の思いから生まれるって、小学校で習う。子どもたちはあ、赤ちゃんの作り方より先に、魔族の生まれ方を知るんだよお〜」

下着が下ろされた。足で蹴り上げようとすると光の輪が手首を締め上げて、鋭い痛みで動きが止まってしまふ。

「なのに考えない。絶対悪のレットテルで事実にはフタをしてえ〜、レットテルが真実だと思いきんじやう〜」

「ひあつ、やだ……!」

「やだ? いや、考えてみてよお〜魔人ちゃん。キサマの心はどこから来たのお?」

手指の動きが止まる。まつげの当たるような距離に、恐ろしく冷たい緑の瞳があった。

「人間の抑えた怠惰な気持ち。抑圧された心の落屑。そんなものが集まっただけでえ〜、人格と呼べるかなあ? 心が、本当に生まれるかなあ〜?」

「知ら、ないよ……っ。私は怠惰の魔人のサファイ。それだけ覚えてればいいの」

「よくないよお願いだよ考えてみてよお〜」

手首が千切れそうなほど痛む。気持ち悪い手指が体中を這って、全身に虫がまとわりついていてみるみたい。

考える？ 私の心、人格？

そんなもの考えるまでもなく決まっている。私はサファイ、魔法少女パステルエッジこと由立たゆが世界一大好きな、怠惰の魔人だ。それ以外の何者でもない。

それからどれくらい経ったのか分からないけど、グリーンの指が止まった。力を抜いてうなだれる直前でどうにかこらえた。体重をかけたら手首が冗談抜きで切れそうだ。

汗だくで浅い息をつきながら、目の前の緑色を睨む。

グリーンは首をかしげていた。

「この程度じゃ刺激が足りないかなあ〜？ あ、ナイスなタイミンググ〜」

何を言っているのか、考えているのか分からない。こいつは魔法少女の形をした怪物だ。

でもたゆなら、運命を味方につけたたゆならきつと大丈夫。

そんな思いが通じたのか、グリーンが振り向いた先。倉庫の開放たれた正面入口に、真っ黒な人影が降り立った。逆光で生じた陰の中、深淵のように黒い虹彩がはつきりと浮かび上がっている。

「要求通り一人できました。サファイを返してもらいます」

「いらっしやあ〜い」

パステルエッジへ変身済みのたゆだ。

私とぼつちり目が合い、大きく見開くや否や、大剣を空間から引きずり出して獣みたいに低く構える。

「よくも……よくもサファイをつ〜！」

「はいはい、動かないでねえ〜」

「う、ぐうううう!?!」

「サファイ!?!」

我慢は無理だった。手首を基点に焼きごてを突き入れられるような痛みが全身へ広がり、生理的な呻き声とともに涙がぼろぼろこぼれ落ちる。

「パステルちゃんが動くとお、この子がもつと苦しんじゃうよお。武器は実体化したまま下へ置いてえ〜」

「この卑怯者……っ」

まずい。たゆが歯噛みしながら武器を手放した。

声を出すのも辛いけど、ここは私が根性を出さなきゃ。どんなに苦しくても魔人の私はコアさえ無事なら大丈夫なんだから。

「た、たゆ、このくらい私、平気だか……あう」

「お口ちやつく〜」

口が塞がれた。さつき緑のやつが引き裂いた私の服だ。猿轡が頭の後ろで固く結ばれ、まともに声が出ない。

私は拘束され、たゆも私が人質になっていて動けなくなつた。私の頑丈さはたゆも知ってるけど、私が苦しむのを無視して突っ込んでくる性格じゃない。そんなこと、ずっと空気に擬態して見てたグリーンは百も承知だろう。

圧倒的優位に立ったグリーンが帽子の下に薄笑いを貼り付けて、耳打ちしてきた。

「社会勉強だよお。レトロな闇狩りを見せたげるう〜」

「サファイから離れてください、この外道!」

「は〜い」

グリーンはたゆの叫びにしたがつて、軽やかに私から離れる。マンキヤツチャーをバトンの如くくるくる回しながら、弾む足取りでたゆの方へ近づいていく。

ゆつくりと見せつけるように、マンキヤツチャーが振るわれた。光の輪がたゆの腰元に現れ、両手を気をつけの姿勢で固定する。

「何のつもりですか……」

「もちろん闇狩りだよお。女の子の心から闇を狩り出しちゃう。さあ、一緒に大きな声で言ってみよう!」

『闇堕ちしてごめんなさい。私が間違っていました。もう二度と悪い

ことしません』

「そこだけ間延びせずハキハキと発された文言に、たゆは不敵な笑みを浮かべた。

「馬鹿げてますね。それを言ったら元の色に戻るとでも?」

「違うよお〜」

「うぐつ!?!」

「……!?!」

たゆが。

たゆが殴られた。グリーンがマンキヤツチャーの長い柄を振って、お腹を殴った。

「元の色に戻るまで、何億回でも唱えるんだあ〜。反省の言葉以外、何も喋れなくなるまでねえ〜」

「げほっ、ふざけないでくださいっ、そんなのただの暴力……うあっ!?!」

「闇狩りだよお〜、ちよびーつと古風なやり方だけどねえ〜」

「く……こんな……他の魔法少女たちが許すわけ……!?!」

「反省の言葉が聞こえないぞう〜? えいえいっ」

たゆが。レッドグラツジ相手に何度も逃げおおせてきたあのたゆが。すごく強くて頼りになるたゆが、何も抵抗できずに殴られ続けている。反論をすべて封殺され、膝を折ろうにも棘付きの光の輪で無理やり立たされ続け、執拗にお腹を打撃されている。

反抗的な言葉はいつしか荒げた息だけになり、呼吸音に異音が混ざる。吐き出す唾液に血の色が混じり、鎖骨と胸元を赤く染めた。

それでも眼光だけは衰えず、どんよりした黒の瞳が前を見据えている。

グリーンはマンキヤツチャーを地面に刺すと、たゆの両頬に手を添えた。

「いい目だねえ、かわいいい〜。ぐちやぐちやにしちやいたいなあ〜」

「やれるものなら……!?!」

「やらないよう〜。昔の闇狩りもね、女の子の尊厳に配慮してたんだあ〜。傷をつけていいのは目立たないところだけ。人類の賢明な

る理性を感じるよねえ〜」

「おとといきやがれ、です」

「お口悪う〜い。さてきて、ちよつと失礼して」

「サファイに近づかないでっ!」

グリーンはたゆの元から、私の方へ。万歳で拘束されている後ろへ回って、耳元で囁いてくる。

「パステルちゃん、痛そうだねえ〜。血を吐いてるよ? 内臓も痛めちゃってるねえ〜」

言う通り、たゆはとても苦しそうだ。肩で息をして滝のような汗を流し、気力だけで立っている状態に見える。

「まともにやりあえばボクでも面倒なのにい〜、もうあんなにポロポロだよ? どうしてかなあ、誰のせいかなあ?」

誰のせい?

とっても強いたゆが、あんなに痛めつけられているのは。

「キサマのせいだよねえ〜」

そうだ。私が人質になっっているから、たゆは反撃できず捕まってしまった。私のせいでたゆを苦しめている。

でも私には何もできない。怠惰の権能は快適な暮らしに特化していて、争いごとに使えるものは一つもない。

だけど、ただどこそのままじゃたゆが。

「よう〜し。じゃあ社会勉強を続けるよお〜」

グリーンがスキップでもするみたいに軽い足取りで、たゆの方へ戻っていった。地面に突き立てたマンキヤツチャーを道中で回収してる。

グリーンは私とたゆの中間で足を止め、帽子の切り欠けから覗き込んでくる。

「魔法少女はねえ〜、重機並みの膂力と兵器並みの火力があるって言われてるんだあ〜」

マンキヤツチャーがたゆへ突き出され、ばちん、と音を立てて穂先の金具に獲物を捕らえた。たゆの細い首が、棘だらけの金具の内側に収められる。棘はたゆのなめらかな肌に食い込んで、今にも突き破り

そう。さつきはすり抜けていたくせに自由自在かよ。

手首だつてこんなに痛いのに、首に棘が刺さつたら、痛いじゃ済まない。

「そんな子たちが闇堕ちで正気を失つてえく、捕まったのに反省の色も見せなかつたらあゝ、社会はたつた一言、こう言うんだよおく」

『くたばれ』

グリーン顔が嗜虐的に歪む。マンキャッチャーを乱暴に引いて、たゆの首の肉を致命的に抉ろうとしている。闇狩りが今にも執行されようとしている。

私のせいだ。

私が捕まったからたゆが傷つけられた。反抗も許されず、殺されそうになっている。

だけど仕方ないじゃないか。私は怠惰の魔人だ。何もできないし、したくない。やらなきゃいけないことを全部面倒くさいからと怠け、だらけたい人類の思いの体现。たゆだつて、何もしたくない私をそのまま好きになつてくれた。だから仕方ない。

頑張りたくない。それが私、魔人ちゃんの生き様だ。魔人ちゃんはがんばらない。

と、前までの私なら考えていただろう。

「ふぬ……っ！」

思考が加速する。痛みがすべて意識の彼方へ置き去りにされ、明瞭な万能感が心を満たす。

今の私はただの魔人ちゃんじゃない。がんばらないことが生きがいの怠惰の魔人でもない。たゆに命と大切な名前を貰った、一人だけの特別なサファイ、それが私だ。

好きな女が目の前で殺されそうになつて、それでもがんばらないとほざくのは私じゃない。

怠惰の魔人のサファイはがんばるんだ。いざつてときは死ぬ気だがんばる。

そんでまさに今こそいざつて感じがする。

「うむむっ！」



全体重を前へ傾けると、手首がぶちぶち音をたてる。次の瞬間には体が自由になっていた。

猿轡もそのままに、むき出しの本能が千切れた手首の断面をグリーンへ向ける。すると、明らかに断面よりも太くたくましい黒い触手が飛び出した。

魔人が魔族の上位個体なら、その気になれば魔物の触手のマネごとだってできる。実際できたんだからできる。

加速された世界の中、尖った触手の先端がグリーンに迫っていく。不意打ちだからきつといける。この年増めその顔ふつとぼしてやる。だけど、

「そうじゃないよう〜」

グリーンのマンキャッチャーがたゆの首をすり抜け、穂先が私に向く。

先端の金具が化け物のアギトみたいに巨大化して、私の触手を両手首の二本ともばちん、と捕らえた。瞬時に金具が収縮し、内側の棘に触手ももぎ取られていく。触手は繊維がほつれるように消滅してしまった。

触手に痛みはなかった。なら問題ない。そのまま両手首を突き出してグリーンに突進する。

「頑張ったのはえらいよう〜でも違うのぉ〜そうじゃないのぉ〜」  
「うぐう……い！」

「サファイっ！ やだ、やめてえっ！」

気づけば、地面に叩きつけられていた。後頭部を掴まれて引きずり倒されたみたい。

視界がチカチカして体が動かない。両手首の激痛がまた主張を強めてる。痛い、つらい、しんどい。

「えいえいつ、がんばってえ〜もう一息」  
「サファイ……い！」

視界が上下左右に揺れる。背中が何かにぶつかった。何かを蹴りぬいた姿勢のグリーングリームと、涙を流すたゆの姿が見える。蹴飛ばされたみたい。

地面に顔から倒れ込むと、足音が近づいてくる。角を掴まれ、持ち上げられた。たゆに結んでもらったツインテの方を触られなかったのは運が良かった。

「がんばれ、がんばれえ〜。うーん、追い込み方を間違えたかなあ?」「やめてっ、何でも言うこと聞くから! やめてください!」

「あー、今日の目当ては闇狩りじゃないんだあ〜。そのつもりなら、最初から魔人ちゃん使ってパステルちゃんの説得してるしい」

ということは、最初から私が狙いだったのか。

私を追い込む。そんなことをして何になる。

もう何も分からない。

ごめん、たゆ。私なりに初めてがんばってみたけど、全然ダメだった。

好きな女の子を泣かせる悪い魔人で、本当にごめんなさい。

たゆの泣き叫ぶ声が聞こえる。

「ボスの人でなし!ーっ!」

それとは別の涙声を最後に、私の意識は闇に溶けていった。

――

『魔人は預かった。▲▲運輸の廃倉庫へ一人で来い』

千回の素振りを終えたたゆと闇狩りトリオは、リビングの食卓に置かれたメモ書きの意味を数瞬理解できなかった。魔人とは誰のことか?

先に動いたのは、平和ボケから素早く復帰したたゆである。

『どこの倉庫ですか、これ』

「え? 丘の下の、この町で一番大きな倉庫だけど……たゆちゃん!? どういうこと――」

必要な情報を得るや否やたゆは庭に飛び出し、くしくも下手人と同じように跳躍。上空から丘のふもとを俯瞰し、もっとも大きな建物を確認すると、着地と共にその方向へ再び跳んだ。

浮かれていた、油断していた。現役最強と名高いレッドグラッジの

追跡を何度も撒いたことでついた自信。久しぶりのサファイとの落ち着いた生活。闇狩り魔法少女の思いがけない弱さ、親しさ。様々な要素に気を抜いていたことを自覚し、たゆは情けなさに泣き出したくなるのをこらえ、サファイの元へ急いだ。

「ナイスなタイミングう〜」

指定された倉庫に着くと、思いがけない緑の魔法少女が出迎えた。グリーングリーム。レッドグラッジと同様殿堂入りかつ現役の最年長魔法少女だ。過激な姿勢のレッドグラッジとは対照的に、穏健で優しい手法の闇狩りをすることで知られる。

しかし穏健なはずのグリーングリームの傍で、サファイは無残な有様だった。

魔法によるものか、光の輪で両手を頭上に拘束されている。シンプルなシャツとフリルスカート、ショーツが乱暴に引き裂かれ、美しい裸体が露わにされている。その表情は苦痛と恥辱に歪み、涙に潤んだ目がたゆを見上げた。

「よくも、よくもサファイを……っ！」

「はいはい、動かないでねえ〜」

間髪入れず武器を引き抜き、跳びかかろうとしたものの、サファイを人質にしたグリーングリーム相手に成すべはなかった。思うつぼとは分かっているけど、サファイを苦しませるから動くなと言われれば従うほかない。

あつさり無力化されたたゆは、闇狩りの暴力を受けた。腹を一発殴打されるたびに鈍痛が背筋を駆け上がり、吐き出す胃液に鉄の味が混ざり出す。

それでもサファイが苦しむよりはずっとよかった。この程度の暴力ならいくらでも耐えてやる、と覚悟を決めた。

しかしグリーングリームの狙いは、最初からたゆではなかったのだ。

「サファイいっ！ やだ、やめてえー！」

暴行を受けるたゆを前に、頑張らない魔人のサファイは頑張ることを選んだ。光の輪に両手首を切断され、その断面から魔族の触手を引つ

張り出し、グリーングリームに向けた。

逆襲の触手はたやすくマンキヤツチャーに食いちぎられて、サファイは地面に引きずり倒され、執拗に踏みつけられる。挙げ句にはボールのように蹴り飛ばされ、ピクリとも動かなくなった。

たゆの慟哭を受け流し、グリーングリームはサファイへ近づいていく。度重なる殴打を受け、たゆにはもう無茶する体力も残っていない。絶望に吞まれかけたそのとき――

「ボスの人でなし！っ！」

ぎやりん、と金属質な音が倉庫に響き、たゆの視界に朱色が舞い込んできくる。

「なんでこんなひどいことするの！　こんな闇狩りじゃなくてイジメだよっ！」

魔法少女クロウバーミリオだ。両手の甲に装備した鉤爪をがむしやらに振り回し、グリーングリームに追従している。グリーンは何も答えずただひらひらと、掴みどころのないステップで爪を躲している。

「もう大丈夫」

倒れ込むサファイをそうやって抱き上げたのは、濃紺色の魔法少女、ネイビーバラージュだった。自慢のガトリングガンは背中に担ぎ、サファイを横抱きにしてたゆの方へ駆けてくる。

すると、たゆは拘束が緩むのを感じた。

「ぐぬぬ、外れねえー！　ネイ、手貸してー！」

「がってん」

腰のあたりに固定された光の輪に、橙色のオレンジシリンジが手をかけている。寄ってきたネイビーが傍らにサファイを安置し、二人がかりで拘束を左右へ引っ張ると音を立てて二つに裂け、やっとたゆは自由になった。

助けてくれた二人にもお腹の痛みにも構わず、たゆはサファイに飛びついた。

「サファイ、サファイっ！　しっかりしてください！」

サファイはボロボロだった。乱暴に破られた衣服の下に、蹴られた際

のアザが浮かび、いたいけな顔は鼻血と涙にまみれている。両手首の断面からは血ではなく魔物のように黒い粒子がはらはらとこぼれている。

「大丈夫。魔人なんだろう？」

「魔人はコアが無事なら死なない。きっと元気になる」

「そりやそうですけど……あつ」

たゆは反射的にサファイを背中に庇い、ネイビーとオレンジに警戒の目を向けた。

サファイは角を出している状態だ。角は魔族の証。その正体が善意で闇堕ち魔法少女を拾った普通の女の子ではなく、たゆと共に行動している魔人なのは二人も分かっているだろう。

ネイビーは無表情のまま、オレンジは苦笑した。

「ウソついてたんだよな。ったく、何がどうなっても知りませんよだ」

「サファイは魔人。私たちの敵」

「……っ」

たゆはお腹を抑えて息を呑む。普段なら三人がかりでも軽くあしらえるものの、グリーンに散々痛めつけられた今は分が悪い。ダメージの回復と変身の維持に割くので魔力が逼迫し、大剣の実体化もできない。目の前の二人が敵に回ったら万事休すだ。

しかしネイビーはふいつと目をそらし、

「だけど敵だからって、いじめていいわけじゃない」

「そんでサファイは敵かもしれないけど、友達だ」

それぞれの武器を一つの方向へ構えた。狙いは、鉤爪を回避し続けるグリーンだ。

クロウは二人の言葉を引き継ぐように、爪で引つかきながら吠えた。

「闇狩りは友達をいじめる人を許さない！ たとえボスであつてもだよ！」

まっすぐな少女の声に、たゆは胸が熱くなるのを感じた。世の中の魔法少女がみんなレッドグラッジのような過激派ではない。頭では分かっている、実際体感するのは違った。サファイと出会う前はた

ゆ自身も魔族敵視が強かったこともあって、三人組の純粋な思いには少なからぬ衝撃がある。

敵だからっていじめていい訳じゃない。友達をいじめるのはいけないこと。

「バラージュ、バラージュ」

「きゃーっ!? ネイちゃん待ってえ!」

ネイビーが両手首に懸架したガトリングガンを斉射した。機械じみた駆動音と魔法の破裂音が混ざり合い、濃紺色の弾幕がグリーンに向かつていく。クロウごと巻き込んで。

「はあく、手詰まりだなあ」

「ボス!」

グリーンは素早くマンキヤッチャーを閃かせ、柄の先端でクロウの首根っこを引つ掛ける。そのままぶん回して弾幕の範囲外へ放り投げ、胡乱げな瞳でたゆの方を向いた。

何を言うでもなく、意味深に笑うグリーン。それをふつとばす勢いで弾幕が着弾し、濃紺色の爆炎を噴き上げた。

「やったか!」

炎と煙の晴れたそこには、抉れた床と大穴の空いた壁だけが残され、誰の影もなかった。たゆには知る由もないが、空気の形相と色彩に擬態して離脱したのだ。

しばし周囲を警戒していた四人だが、他に気配はない。

脅威が去ったことをじわじわと理解し、

「うーん……」

「ば、パステルうー!」

蓄積したダメージに耐えられず、たゆはサファイと折り重なるように倒れ込んだのだった。

――

冷房でよく冷えたりビング。おなじみのソファの上で、私とたゆは全力で抱き合っていた。

たゆの太ももにまたがつて顔は胸に埋め、両手は脇の下から背中へ回す。両足はたゆのそれとがっちり絡み合つて離さない。たゆの体温と柔らかな肌で全身が包まれ、贅沢なおっぱい越しにさえ確かに感じる鼓動とたゆの匂いで多幸福感がヤバイ。ムチムチ女子中学生の体は最高、ではなたゆの体最高。細胞の一片すらたゆと溶け合つて一つになりたい。

頭上から、愛しいたゆの熱っぽい声が聞こえる。

「サファイ、こんなにくつつかれると……変な気持ちになっちゃいます」「バカモノ。病み上がりで運動はダメ」

もう完治したとはいえ、念の為だ。えっちの消耗はバカにならない。大人しく私のたゆ浴に付き合っているがいい。

「変な気持ちって何？」

「クロウは知らんがいい」

「禁断の愛、不純同性交遊……いいぞもつとやれ」

余計な声も三つ聞こえた。少し腰を浮かしてたゆの肩からソファの向こうを覗くと、食卓でだべる三人の魔法少女が見えた。ぽんこつ闇狩りトリオことクロウバーミリオ、オレンジシリンジ、ネイビーブラージュの三名だ。なぜかネイビーは鼻血を流してサムズアップしながらこつちを見ている。目が血走つててちよつと怖い。

私とたゆが抱き合うのに邪魔なんだけど、無下にはできない。こいつらは私にとって初めての友達な上に、私とたゆの恩人でもあるからだ。

グリーングリームの襲撃から五日後のお昼頃、ベッドの上で目覚めた私を迎えたのは、泣き腫らしたたゆの顔だった。

『サファイ！ 大丈夫ですかどこか痛いですか無理しないで頑張らなくていいですから！』たゆっ、君怪我してるだろ何普通に起きてるんだお腹見せる傷が残ったら大変だぞ寝てなさい養生しなさい！』

と、お互い開口一番に言い合つて涙目で顔を見合わせ、無事の確認含め情報共有を済ませた。

あの緑の怪物は、闇狩りトリオの魔法少女たちが乱入して追い払つてくれたらしい。たゆのお腹の外傷は一眠りで完治し、内臓のダメー

ジも魔力をサツと巡らせて数時間で治ったとか。魔法少女すごい。そういえばあのトリオも毎回たんこぶを作るのにいつの間にか治ってたものな。

むしろ深刻だったのは私の方で、両手首が千切れて四日間意識を失っていた。魔人だから病院には連れて行けず、両手首の怪我は不定形の靄が覆っていて手当ての方法も分からない。たゆとトリオは途方に暮れる他なかった。

このまま目覚めないんじゃないか。誰ともなく不安を抱き始めたとき、やつと目が覚めたんだって。心配かけて悪かった。

でもたゆの流した涙の意味は、私への心配だけじゃない。そのくらは怠惰に思考を止めていても余裕で分かる。

絡めた足を解いてたゆの耳元に口を寄せ、頭をナデナデしてやる。

「たゆ、君はがんばった。いつもいつもがんばってる。だから何も悪くない。むしろいっつもありがとうーね」

「……………」

「よしよし」

たゆが大きく身じろぎする。鼻をすすり、震える手で抱き返してきた。

私が守らなきやいけなかったのにサファイが誘拐された、私つて最低だ。アホ真面目なたゆがそう思い込むのは明白だった。私でさえ「頑張ったけどダメだった、ごめんなさい」なんて柄にもなく後ろ向きになっただくらいだし。

だけど私たちはなんにも悪くない。言動から動機までみんな意味不明なグリーンルームにすべての非がある。

あいつは何がしたかったのか。たゆを無理やり闇墮ちから救いたいならあのまま私を痛めつければよかった。魔人の私が狙いなら、空気に擬態していた間いくらでもチャンスがあった。なのに結局は「手詰まり」と言い残し姿を消したというのだから、まったく分からない。後期高齢魔法少女だからボケてたのかな？

「そこんとこ、闇狩りとしてはどう思う？」

すすり泣いたゆを慰めながら、私はクロウ、オレンジ、ネイビーに



水を向けた。

クロウが指を口元に当て、難しい顔をする。

「分かんない。ボスはあるなひどい人じゃないのに……」

「あたしらはボスに闇狩りを教わったんだ。説得がダメなら正面からぶつかって気持ちを通わせろって……あんなやり方、らしくないぜ」

「……極めて不可解」

三人とも分からないみたいで、口をへの字にして黙り込んでしまった。

人がよく、純真なこの子達がしらばっくれているとは思えないし、思いたくなかった。もしウソついてるなら私は人間不信になる。

もちろん希望的観測だけじゃなくて、他にも三人を信じる根拠はあった。私がまだ生きているこの状況だ。

たゆの頭に当たらないよう気をつけて、にゅつと角を生やした。おぞましい一対のねじれ角に三人そろって息を呑む。

「不可解といえば、君たちこそ。私が魔人なのにどうして何もしないの？」

私は意識を失ったあのととき角を露出していて、三人は助けに入ると同時に私の正体を知った。たゆが無力化されていたあの時点だけでなく、私が眠っていた四日の間に私を傷つけようと思えばタイミングはあったはず。なのに私は生きている。

クロウはむっとして身を乗り出した。

「友達にひどいことしないよー」

「ウソついてたのに？」

すかさずオレンジが割って入り、

「必要なウソなら仕方ないだろ」

「必殺機構に通報したら、すっごく褒められるかもよ？」

ネイビーは太眉をぐつと寄せて渋面になる。

「簡単に死ねとか殺すとかいう魔法少女がトップ。あの組織は気に食わない」

「そうだよ！ たしかにレッドグラッジさんはすごい人だけど、なんかイヤー！」

「それにサファイって、怠惰の魔人なんだろう？ 殺意に比べたらただのマスコットじゃん」

「誰がマスコットだコラ」

好き放題言ってくれるな。

「魔法少女と魔人の禁断の恋。甚だしく捗る。いいぞもつとやれ」  
「君は何を言ってるんだ」

ネイビーは鼻血をだらだら流しながら親指を立てている。オレンジはうわあとドン引きし、クロウは首をかしげていた。

私が眠っている間に、たゆの口から私との関係を聞いたらしい。だからってネイビーは何が捗るといふのか、謎だ。

でも三人の反応は、ちよつと嬉しい誤算だった。魔人バレしたときのたゆの行動や、魔族絶対殺す丸のレッドグラτζで先入観があったけど、魔法少女みんなが魔族必殺の価値観を持つてるわけじゃないんだ。

もちろん闇狩りトリオが飛び抜けて純情な可能性もないでもない。けどひとまず、友達として信用できる子たちだと思う。

三人は引き続きこの家のことは秘密にすること、それと引き換えにいつでも闇狩りの続きに来ることを約束して、昼過ぎには帰っていった。いつもなら日が暮れるまでたゆに付きまとうのに、「弱ってるときにつけこむのは闇狩りじゃないから！」ということらしい。

「ありがとう」

別れ際、しぜんと口をついてそう言った。

――

グリーングリームの真意はまったくの不明。突然追撃を止めたレッドグラτζの動向も不明。たゆは今回の件ですっかり落ち込み、慰めるには骨が折れそう。私も生まれて初めてがんばった結果が散々で、実はちよつぴりしよげてる。

だけど世間一般では絶対悪でしかない私とたゆのことを、友達と呼んでくれる人がいる。味方になってくれる人がいる。それが分かつ

ただけでも、手首が千切れるような苦勞をしたかいたがあつたと言えるんじゃないか。

うん、そう思うことにしよう。うじうじ落ち込むのはめんどくさくてしんどいからな。

怠惰な魔人ちゃんはダラダラと、傷ついたらたゆを慰めることにする。

頑張りすぎず、のんびりと。

## 5. モテ期

うちのリビングにしよんぼり魔法少女がいる。

「はあ……」

そいつは力なくソファに腰掛け、どんよりした瞳を虚空に向けながら憂鬱なため息をこぼす。ぱっつん前髪の下の眉はハの字、口はへの字に固定され、力なく伏せられた犬耳と丸められた尻尾が幻視できる雰囲気。ゆったりした部屋着が喪服みたいに真つ黒なのでなおさら陰鬱に見える。

由立たゆ。私のために闇堕ちしてくれた世界一かわいい魔法少女である。

先日緑色の化け物に私が誘拐され、いいようにしてやられた件をまだ引きずっているらしく、たゆは趣味の庭いじりもおおざなりにして、スキあらば鬱々とため息をつくようになった。すでに九月を回っており、夏休みを終えた闇狩りトリオは学校で忙しい。たゆを励ます重責は私一人にかかっている。

もちろんこの話術に秀でた魔人のサファイちゃんにかかればたゆを元気にするなんて朝飯前だ。今すぐにもたゆを元氣百倍にできる。

だけど一つ大きな問題があつて、実行に移せないでいる。

「落ち込むたゆもかわいいな」

「……何か言いました?」

「何でも」

思わず口に出してしまった。しよんぼりたゆがかわいい。普段元氣過ぎるくらい元氣だからギャップがたまらん。

「サファイ、近いです」

「気のせい」

隣に座つてガン見していると困惑したように目を泳がせる。その慌てぶりが愛しい。出会った頃はショートボブだった髪はうなじの少し下あたりまで伸びている。あとき涙に濡れていた瞳は光を呑み込む闇を湛えている。

思えば私も変わったものだ。初めて声をかけたとき、たゆはソファ

ではなく公園のベンチに座ってしくしく泣いていた。なんとなく放っておけず家に連れ込んで慰めたけど、そのときはさつきと立ち直れ鬱陶しい、としか考えていなかった。

「ただ今この私はたゆが落ち込んでいてもいなくても好きだ。だってたゆだし。」

「あかん」

我ながらたゆが好き過ぎて気持ち悪いなと思った。惚気るのはやめてさつきと慰め大作戦を実行することにする。

たゆの袖を引っ張り、私の太ももを指差す。

目をぱちぱちするたゆを軽く引っ張ると、抵抗なく私の膝枕に身を任せた。さらりとした黒髪が素肌を滑り、思ったよりくすぐったい。声が出そうなのをぎりぎり我慢し、太ももをきゅつと閉める。

しばらくたゆの横顔を眺めながら頭を撫でていると、ようやく感触に慣れてきた。的確な甘い慰めの言葉で一気に攻め込む。

「たゆ。前も言ったけど、君はがんばってる。この前のは相手が悪かったんだ。たゆも私も悪くない。落ち込む必要なんて——」

「違います」

「んふっ」

たゆが身動きして見上げてくる。太ももがぞわぞわして変な声が出た。

「サファイを守れなかったのはショックでした。でもそれは、サファイの言うとおり相手が悪かった、で納得できます」

「じゃ、じゃあ何を落ち込んでるの？」

「落ち込むというか、イライラしてるんです。サファイばかりひどい目にあうことに」

むすつと顔をしかめて頬をふくらませるたゆ。膨らんだほっぺたをつつくと拗ねたように顔を逸らして、黒髪が私の内ももをくすぐる。気を抜くと声が出そう。

たゆの症状はしょんぼりではなくイライラだったらしい。私ばかりがひどい目と言うけれど、そこまで気にするほどだろうか。

順番に思い出してみると、レッドグラッジに討伐され、群衆に袋叩

きにされ、必殺機構にリンチされ、存在矛盾で消滅しかけ、直近ではグリーングリームに誘拐の上乱暴された。

なるほど確かにろくなことがない。もしたゆが同じことをされていれば、私だってイライラするし、やるせない気持ちになると思う。実際この前グリーングリームにたゆが殴られたときは私も憤懣やる方ない思いだったし。

それでも今の私が平気なのは、怠惰の魔人だからだろう。何もせずに頑張らない怠惰な暮らしには、明日の心配も昨日の後悔もない。ただ今の一瞬を全身全霊で頑張らないだけだ。

だから引きずらない私の代わりに、たゆはイライラしてくれている。ありがたい反面もつと気楽に生きればいいのにも思う。

たゆの両頬をつかんでこつちを向けさせると、闇墮ちした真つ黒な虹彩と目が合う。

「ねえ、たゆ。今幸せ？ 私の膝枕気持ちいい？」

「それは、はい」

「じゃあもういいじゃない。イライラすんのやめよ？」

「えー？」

不満げに口を尖らせるたゆ。まったく人とはなぜ過ぎたことをいつまでも引きずろうとするのか。

頬から手を滑らせ、顎の下を犬みたくわしゃわしゃやっていると、

「みゆ」と変な鳴き声めいた音が漏れた。

「今、私と二人つきりで幸せでしょ。それで十分。来るかも分からない未来を心配したり、終わった過去を悔やんだりなんて、馬鹿らしいよ。大事な今は今なんだから」

「そう……なんですか？」

「そうなのだ」

たとえばほんの数分後にでもレッドグレッズが押しかけてきたり、空気に擬態したグリーングリームが襲いかかってきたりするかもしれない。

でもそれは今じゃない。なら樂觀に溺れて今の怠惰を受け入れるのが一番楽だ。しんどいことやめんどいことは何も考えず、楽なこと

だけ考えればいいし、なんなら考えなくてもいい。思考も呼吸も捨てて怠惰を受け入れるのだ。

「いや呼吸はしないと死んじゃいますよ」

「ふっ、脆弱な人類め」

「魔人マウントゥざあ……人類の反撃！」

「んふっ、ふふふやめ、やめてよっ」

髪の毛が内ももをくすぐって、たゆの両手がシャツの上から体を撫でてくる。右手は背中を回ってうなじのあたりを、左手は尾てい骨のあたりをこりこり――背筋を電流のような快感がほとぼしり、おへその下が一気に熱を帯びた。

ちよつと待て元気になってほしいとは思ったけど元気過ぎでしょ今私の上だったじゃん。

と文句を言おうとしても舌が回らず、浮遊感にも似た興奮に身を任せているうち、気づけばたゆに押し倒されていた。

「こっつてそんなに気持ちいいですか？」

「あ……っ」

「わあすごい。せーかんたいですね！」

追撃の尾てい骨こりこりで頭が真っ白になった。気持ちいい。たゆの匂いで頭がいつぱい。柔らかくてあったかい。

押し寄せる怒濤の快感に理性が飛ぶ直前、何か吹っ切れたようなたゆの声が聞こえた。

「たしかにいろいろ釈然としないことかありますけど、どうでもいいですね！ だってサファイが大好きで、えっちが気持ちいいんだから！」

――

心配や後悔よりも思考停止した今の快楽を。怠惰の魔人の生き方をたゆは受け入れ、私たちは何度も体を重ねた。

そうしていつ終わるとも分からない幸せな今を享受していた九月初め。

予想だにしない角度から、途方もない過去が殴り込みをかけてきた。

——

ことの始まりはある日の昼下がり。

いつものようにたゆの料理を平らげ、私は片付けを手伝いもしないでソファにひっくり返っていた。目的もなくスマホを立ち上げるとクロウからメッセージが届いている。『今日闇狩りにいったいいい？』に対し『りよ』と返答しておく。たゆにおやつを用意するよう言っておこう。

『本日的情念値は全国的に高く——』

垂れ流しのテレビは情念値予報をやっている。高ければ高いほど魔族が発生しやすく、高い日は不要不急の外出を控える旨の定型文で終わる。それから種々雑多なニュースコーナーへ移行するのがこのチャンネルの流れだ。興味なくてもさすがに覚えちゃった。

でも今日のテレビは一味違った。

『えーここの速報です』

穏やかなキャスターの声音が、険しく固いそれに変わる。同時に小刻みなビーブ音が響いた。

画面に目をやると、災害時によくあるL字型のテロップが出ていた。ただしその色合いは忌々しい赤色で、白抜き文字は『魔族必殺機構からたいせつなお知らせ』と綴っている。

キャスターは深刻そうな顔つきで、

『殺意の魔人の封印が近日中に解ける可能性がある、魔族必殺機構が発表しました。繰り返します、殺意の魔人の封印が近日中に——』

「うそお」

マジで？

縁側のガラス戸を見る。青い夏空を縦に割る有刺鉄線の巨塔は変わらず巍然とそびえ立ち、何も異常は見えない。

がしやん、と何かが割れる音。かと思うと目の前に、大慌てするた



ゆの顔が現れた。黒いアーマードレスに変身済みで臨戦態勢ばっちり。

「さささファイ落ち着いてください！ 落ち着いてテーブルの下へ隠れましょう！」

「君が落ち着け」

「いたっ！」

額へデコピンをお見舞いしてやると、たゆはわたわたと両手を上下させ、言葉を呑み込むように口を真一文字に引き結んでようやく落ち着いた。まったく皿を割ったなこいつ。

五年の魔法少女経験があるたゆでも、今回の件は恐慌に値するらしい。さすがに地震雷火事魔人、昔から言い伝えられてきた災害の中でも最悪の部類となると仕方ないのかもしれない。

画面の中で、キャスターに数枚の資料が手渡される。

『ただいま入った情報によりますと、必殺機構はすでに複数の魔法少女を対処に当たらせている模様です。機構の代表であるレツドグラツジ氏からは、「封印の周辺には万全の警戒網を敷いており、どのような突発的事態にも対処可能につき、周辺住民の皆様におかれましては秩序だった避難を心がけていただきたい」との声明が届いております。ああ、よかった……失礼しました』

「えっファイ？ 今のどういう意味です？」

何が起きても必殺機構の人らがなんとかするんで、とりあえずみんな落ち着いて避難してね。たゆに分かりやすく言い直すとそんな感じ。

それ以上の情報はないらしく、キャスターは強い口調で落ち着いた避難を繰り返し呼びかけ始めた。チャンネルを変えてもどこも同じ有様だ。局によってはキャスターが緊張で声を詰まらせてしどろもどろになっているところもあった。情報を伝えるプロでも動揺する内容なんだ。あつ、このチャンネルだけはアニメの再放送やってる。

スマホからSNSを覗くと、トレンド一位が秒で「殺意の魔人」になった。すごい。

「ねえねえたゆ、見て、すごい。一瞬でトレンド一位だよ！」

「わあほんとですね、じゃなくて！ 私たちも逃げましょう、今すぐ！」

「なんでやねん」

「だってだって、殺意ですよ!? いくら必殺機構がいると言っても……」

「はいはいしんきゅー、吸って吐いてー」

さつき落ち着いたように見えたのは気のせいだったか。たゆはすっかりパニックになっている。

手を握り、アーマーから露出した背中をさすりながら五分ほど経つと、やつとたゆの目に理性が戻ってきた。冷静なうちに私たちの方針を共有しよう。

「まず言つとくけど、私たちはここを動かない。おつけー?」

「……なんで?」

「私たちが追われる身だから」

角さえ隠せば権能で誤魔化せる私とは違い、たゆの顔は世間に知られてる。下手に逃げた先で衆目に触れるのは怖いし、そもそもこの家よりも優れた潜伏場所のあてがない。なら追手がいない現状、慌てず騒がずどっしり構えていればいい。

「もちろんずっとじゃなくて、殺意が倒されたらすぐ引き払うよ」

「あ、そっか。レッドグラッジが来ちゃいますね」

「そうそう」

私たちにとつてもつとも厄介な追手のレッドグラッジは、なぜかぱったりと姿を見せなくなった。その理由が殺意の魔人なのだろう。片や闇堕ち魔法少女と一緒に逃げ回るだけ、片やかつて十万人以上の人命を奪った極悪魔人。どうやって封印の緩みを嗅ぎつけたのかは知らないけど、私たちから殺意への警戒ヘリソースを切り替えたのは明らかだ。

無論、私はこれを想定済みだった。夏バテなんてアホみたいな理由で追撃を止めるレッドグラじゃないって信じてた。これはほんと、マジで。後からならなんとも言えるとかじゃなくて。

そんなわけで、今の私たちにできることは少ない。封印から解放さ

れたとたん最悪の赤いアイツに出迎えられる殺意に、念仏でも唱えておこう。あんなのに狙われるなんてかわいそうな魔人ちゃんだ。

ああそれと、もう一つあった。

「サファイ？　なんでニヤニヤしながらスマホにかじりついてんです？」

「たゆう、ぶっちゃけさあ。対岸の火事ってワクワクしない？」

「うわーっ、サイテー！　野次馬根性、不謹慎！　人としてどうかと思えますっ！」

「だって私魔人だもーん、人でなしだもーん」

「わっる！　今初めてサファイが人類の敵に見えました！」

テレビとかSNSとか、メディアが何かの話題一色に染まってるとき。しかもその話題の当事者じゃないときって、めちやくちやドキドキする。

SNSと匿名掲示板とまとめサイトをハシゴしていると、さっそくソース不明のデマが湧いてきた。このライブ感サイコー。なにになに、『魔人騒動は茶番』『必殺機構が裏で世界を牛耳っている』『魔人とは魔法少女である』。一文字読むたびに時間と脳みその処理能力が無駄になっていく感じ、たまりませんわ。

「ねー、たゆもこの楽しみを知らう？」

「知ーりーまーせーん！」

たゆはぶいっとそっぽを向いた。

アホ真面目なやつめ。

ー

封印消滅の恐れが発表されて以降、世間の話題は殺意の魔人一色に染まった。久引町の上空は報道ヘリと真っ赤なカラーリングのヘリが忙しく飛び交い、遠くからサイレンが聞こえる。テレビは荷物を抱えて徒歩や車で整然と避難していく近隣住民を映し、なぜかスタジオでヘルメットをかぶった専門家たちが、厳しい顔で頭の良さそうなコメントを吐く。CMは露骨に必殺機構の啓発モノが増え、その頻度

は私でさえ魔族殺すべしのメロディを暗記するほど。ネットでは公式機関の声明と流言飛語の類がいつしよくたに入り乱れ、さながら情報百鬼夜行と化していた。

そういった騒ぎを対岸からぐうたら眺めるのが、私の役目だ。

「あ、エリアメール来てた。避難指示だつて」

「えりあめーる……？ 前から思ってたんですけど、その権能スマホって契約とか名義とかどうなってるんですか？」

「知らん。魔人ちゃんパワーだ」

「魔人つてすごい」

無限残高と謎スマホは、欺瞞と改ざんの権能の極致である。怠惰の魔人はすごいのだ。

滅多に使わないメールフォルダを閉じて、例の闇狩りトリオにメッセージを送ってみる。電波が混雑してるのか送信中のまま固まった。

なのにネットはサクサクつながるんだから権能は超便利。現代社会での怠惰な暮らしにネットとお金は欠かせないってことなんだろう。怠惰に生まれてよかった。

となると俄然気になつてくるのが、殺意がどんな力を持っているのか。私の生まれつきの知識、通称魔人ちゃんペディアには記載がない。適当にチャンネルをザッピングしていくと、この前魔法少女にけしからんことをして捕まったはずの専門家おじさんが語っているのに出くわした。

『殺意の魔人の恐ろしさは計り知れません。五年前、出現から間もなく十二万人に魔が差し、そのうち九割強が死亡しました。魔法少女が三名殺害されたことから、物理的な脅威をも有しているでしょう』  
『具体的にはどのような権能が考えられるでしょうか？』

『詳細は分かりませんが、人類にとって喜ばしいものでないことは確実ですね』

当たり前だろ。ふわふわした物言いでお茶濁しちやつてこのおっさんはもう。キャスターの人も微妙に「使えねー」みたいな顔してるぞ。

見切りをつけてネットで調べてみると、魔人まとめサイトがトップ

に出てきた。過去に出現した魔人の被害と権能が表にまとめられ、詳細は個別ページのリンクで見られるようになっていた。

生まれてから二年と半年、私以外の魔人と出会ったことはないけど、過去には大体十年周期でたくさん魔人が出てきてたらしい。無慈悲に討伐された彼女たちに内心で敬礼しつつ、スクロールしていく。『性質・憎悪 権能・憎悪の肥大化。些細な苛立ちを破滅的な憎悪へと導き、凶行に至らせる 被害：死者2803人』

『性質・性欲 権能・催淫触手。触手に触れると個人を歩く性器としか認識できなくなる 被害：不可逆性精神汚染6744人』

『性質・殺意 権能・不明 被害：死者・行方不明者118961人  
精神汚染：3770人 備考：固有魔法により封印中』

「こわっ」

思ったよりエグい。数だけなら殺意が圧倒的だけど、権能のキツさはどの魔人も共通してる。

「この中にサファイが居たら一人だけ浮いてそうですねー」  
「うーむ」

私なら『権能：全身全霊で何も頑張らない』になるのか。場違い感半端ないな。

ただ、魔人の発生機序を考えると、このページに載ってる魔人の権能はすべて人類の欲求から生まれたことになる。こんな恐ろしい考えを抑圧しながら繁栄してるんだから、人類の器用さには頭が下がる。

みんないろいろ溜め込んで生きてんだな。魔族の元になる負の情念だけじゃなく、叶わないと諦めた憧れ、望み、願いさえ抑圧し、それを受け取った魔法少女たちが平和な現実を守る。人と魔族を冷酷に線引きし、分断して考える。理性的に暮らすのはとても大変なんだろう。

魔人の私はそんなの知ったこっちゃないので、好きな子と一生ダラダラして過ごそうと思う。

スマホをソファの端に放って、隣に座るたゆと指を絡める。にぎにぎし合いながら頭を傾け、角はしまったまま肩にすりすりした。たゆ

も私の頭に頬ずりをしてくれる。甘い匂いとぬくもりに心が弛緩していく。

自分のすべてを任せられる人がすぐ隣にいるのは最高だ。私ほで  
きれば痛いのも死ぬのもヤだけど、たゆになら何をされてもいい。

えっちとは違う、ただ緩やかな時間を過ごしている間にも、つけっ  
ぱなしのテレビが音を垂れ流している。

『殺意の魔人はあのブルージェイスですら討伐できなかつた魔人で  
す。魔法少女たちは大丈夫なのでしょうか』

『大丈夫。レッドグラッジはブルージェイスの妹さんです。きっと大  
丈夫です』

『そ、そうですか』

珍しく根拠なしにおっさんが断言している。

私も同意だ。殺意の魔人がどれほど強力だろうと、魔族必殺に全力  
な機構とレッドグラッジが負けるはずない。なんたつて私たちの  
追っかけを中断してまであっちを優先してるんだから気合の入れ方  
がちがう。殺意さんはご愁傷さまだ。

「そういえば、そのブルージェイスとかいう魔法少女は今何してんの  
？ 引退した？」

「えっ」

たゆが意外そうな声を上げた。

別に変なことは言っていない。たしか封印したのもそのブルージェ  
イスだし、当時最強と呼ばれていたのも知ってる。レッドグラッジと  
協力すれば勝ち揺るがないはず。

「もう亡くなってます」

と、思ったんだけど。

「殺意の魔人と刺し違えて、そのとき固有魔法の封印に覚醒したって、  
レッドグラッジさんが。テレビでもそう言われています」

「……そうなの？」

そーです、とたゆがうなずく。

ブルージェイス、死んでるのか。言われてみれば、死に際に殺意を  
封印してつたって聞いたような。

だけど何か釈然としない。ブルーグレイスのことはネット情報ですらまともに調べたことないけど、なぜか死んでると言われてもピンとこない。本当はどこかで生きてるんじゃないの？

「なにこれ」

混乱してきた。私はブルーグレイスにどんな感情を抱いてるのか。私にとっては目障りな塔を遺していっただけの人物のはずなのに。

スマホで調べようとしても、さつきソファの端の方へ投げて手が届かない。

いちいち調べるのも面倒だ。また気が向いたときにしよう。

今はたゆにすりすりするのを優先することにする。

「たゆうー、好きいいー」

「私ですよお、サファイー」

あー、ダメになっちゃいそう。

――

実際に封印が消滅したのは、避難開始から六日後の夕方のことだった。

いつものようにたゆとイチヤつきながら、対岸の火事感と台風で学校が休みになった小学生のような非日常感を楽しんでいると、テレビの中の人たちが唐突に血相を変えた。

『封印が解除されます！・繰り返します、たった今、封印が解除される模様です！』

「お」

消滅の恐れとか可能性とか言うから、肩透かしもあり得ると思っただけ。ようやくこの騒ぎも山場を迎えるみたいだ。

画面がスタジオから赤茶けた荒野に変わった。遠方にたたずむ馬鹿げた大きさの巨塔に異常は見られない。

むしろ先に異常を示したのは、画面じゃなく庭からリアルに見える方の封印だ。画角の外にあたる塔の上方部分が、糸のようにはらはらとほどける。ほつれた有刺鉄線は光の粒子を散らして宙空へ消

え、上から下へ向けて塔がみるみる消えていく。

「サファイ、上からの方がよく見えますよ」

「抱っこ」

「もー」

テレビを消し、たゆに横抱きにされて二階へ。かと思ったら、たゆは庭へ出て軽く膝を曲げ、屋根の上へ跳んだ。

急な浮遊感でびっくりしたけど、ここは確かに最適な野次馬スポットだ。丘の上の立地だから封印周辺の荒野がよく見える。

今日の天気は曇り。円周十数キロは下らない塔が失くなった空は、思いがけず茫漠な灰色に染まっていた。

ゆっくりと十分近くかけてようやく塔の根元まで消失が及ぶ。目には見えないけど、あの赤茶けた荒野の中央に殺意の魔人がいるのだろう。

「うわ」

出し抜けに、山が降ってきた。

正確には、山と見紛うほど巨大な岩石だ。封印の塔に劣らないスケールの岩塊が、魔人のいるであろう地点に落ちていく。落着と共に爆発的な土煙が巻き上がり、数秒遅れてわずかな振動が屋根を揺らした。大体二十キロは離れてるここさえ揺らすあたり、直撃した魔人には洒落にならない威力だろう。

しかし出迎えはそれだけじゃ終わらなかつた。岩の真下、土煙に覆われた中でオレンジ色の閃光が連続して瞬く。

何かの爆発だ。岩と煙が閃光に吹っ飛ばされ、荒野に百メートル単位のクレーターをいくつも抉る。

一体何が起こってるのか、まったく分からん。

「解説のたゆさん、お願いします」

「へ？ 何をですか？」

「解説。何やってんのあれ。普通の武器とか兵器は効かないのに」

「ああ、あれ全部魔法ですよ」

「マジか」

てつきり大人たちが物理兵器を使ってるのかと思った。キロ単位



の土地を数秒でズタズタにする魔法とか超怖いんだけど。

手でひさしを作って眺めていたたゆは、顔をしかめた。

「たぶん、グリーンングルームの仕業ですね。どうやったのかは分からないですけど、岩と爆発にあの人の魔力が乗ってます」

先陣を切ったのは緑の怪物らしい。

爆発は今も秒間四、五発くらいの頻度で続いている。この家なんてあの爆発一つで跡形も残らない規模だ。開幕の質量攻撃といい、どんな手品を——固有魔法かな。

たぶん、万物に擬態するとかいう理不尽魔法で岩塊そのものに擬態していたんだ。あの爆発は空気に擬態して、水素とか酸素とかの濃度をいじって爆破してるんだろう。

だとしたら余計分らない。あれだけのことが出来るくせに、グリーンは私とたゆを結果的に見逃した。本当に何がしたかったのか。

「あつ、真打ち登場ですよー！」

たゆが弾んだ声を上げる。

爆破の連鎖が止まるや否や、赤い閃光が地を駆けた。一拍遅れて扶れた地面が広範囲にわたってめくれ上がる。

続けて赤く輝く無数の戟が、大地を突き破って一帯を針地獄と化した。一つ一つの戟が高層ビルに匹敵する大きさだ。きつと範囲攻撃なんだろう。

さらにそれらの戟は輝きを増し、穂先から極太のレーザーを雨あられと発射する。幾重ものレーザービームは一点で交差しながら、ここからでは見えない小さな何かを追い続ける。外れたレーザーが地面を焼切り、ケーキみたいに両断された大地が爆発していく。

レーザーの追従する先では、グリーンングルームによる空気爆破と質量攻撃が待ち受けている。暴力的な面制圧と一点突破のレーザーによる波状攻撃は、もはや悪夢だ。私ならゼロコンマで蒸発してる自信がある。

それでもその戦いは、終わらなかつた。日が落ち、目がチカチカして私がリタイアし、夕ご飯を食べてお風呂に入って、一夜明けてもまだやっていた。

「長すぎでしょ！ 何なのあいつら！」

「ふあ……うるさくて眠れなかつたです……」

寝癖の跳ねたたゆが、あくびをして目をしばしばさせている。実際ここまで届く音は地鳴りのように低い残響しかないけど、すぐそこで宇宙戦争のような光が瞬いていると眠りも浅くなるものだ。

朝のニュースは無論、この戦いのことで持ちきりだった。

『戦闘開始から十七時間が経ちました。がんばれ、がんばってくれレッドグラッジ！ グリーングリーム！』

『がんばれー！』

目の下にくまのできたキャスターが、原稿を放り出して身を乗り出す。スタツフたちの応援も続く。もはや番組の体を成していない。

決着が着いたのは、お昼まで二度寝した寝起きの頃だった。

「うみゆ……？」

寝ぼけ眼にガラス戸の外を見ると、すべてが赤く染まっている。空は原色の赤色でのつぺりと塗りつぶされ、色とりどりの自然も陰影のない赤一色だ。

「た、たゆ、たゆ！ 起きて、たいへん！ すっごく赤い！」

「えへへ……」

慌てているうちに、赤色の世界がうごめいた。

すべてを染め上げていた赤が、束ねた布のように撓み、一点に収束していく。元の色に戻った青空をバックに、赤は封印の塔に伍する極大の戟へと収斂した。

戟は穂先を下にして、ゆつくりと地へ落ちていく。落着と同時に、赤い火球へと姿を変え、広範囲を覆った。

「痛っ、うえ!？」

ここは火球の範囲外。にもかかわらず、光に触れただけで私はあのとときの、存在が削られる痛みを覚えた。

かざした手の指先が、ほつれて消えかかっている。あの戟はおそらく魔族必殺の象徴で、光にすらその効果がある――

「サファイー！」

たゆがすぐに庇ってくれなかったら、魔法の余波だけで死んでいた

だろう。闇堕ちしても魔法少女のため、その光は効果を及ぼさなかった。

その魔法を最後に、戦いの音は止んだ。色の戻った世界は驚くほど静かで、空は晴れやかな青空だった。

結果の予想はつく。あんな無茶苦茶な魔法を使えるレッドグラτζとグリーングリームが負けるはずない。必殺機構がここをかぎつける前に、引き払う準備をしなきゃ。

そんな風に考えていたので、決着から一時間後に発表された結果に「ほえ？」とアホみたいな声を出してしまった。

『たいへんな事態になりました』

キャスターが読み上げる。

『グリーングリーム氏は死亡。レッドグラτζ氏は殺意の魔人と刺し違い、意識不明の重体となった模様です』

――

あれだけ恐れていた殺意の魔人がいなくなったのに、その日のテレビとネットはお通夜ムードだった。いつも憶測に憶測を重ねてあることないこと喋り散らす局でさえ口数が少なく、ほとんど放送事故に近い絵面を電波に乗せてるところもあった。世間の関心を反映するSNSのトレンドは、よほど衝撃だったのか、午後三時頃になってようやく『レッドグラτζ重体』『グリーングリーム死亡』の二点がトレンド入りを果たした。

午後六時のニュースにて、目元を赤くしたキャスターが言葉を詰まらせながら原稿を読み上げる。

『グリーングリーム氏は、慈善団体「闇狩り」の代表として、八十年間立派に職務をまっとうし――うおおん！』

「ダメだこりゃ」

男泣きするキャスターから、しばらくお待ちくださいのテロップに差し替えられる。この愁嘆場は後を引きそうだ。正直そこまで悲しくない私としてはうっとうしい。

とはいえ、無理もない。魔法少女は、人々が現実を生きる上で捨てるを得なかった、正しい情念の受け皿。魔族とは逆に人類の愛着と期待を一身に背負う立場で、取り分けもつとも長く活躍してきた緑女が亡くなったわけだから、ひとしおに悲しいのだろう。いっぱい泣け。

さて、そんな人類であるたゆの様子はというと。

「たゆ、平気?」

「んー、複雑です。どうせならちゃんと仕返しをしておきたかったですね……サファイは?」

「特に何も」

食卓に肘をつき、むすつと口を尖らせて、たゆは悔しいとも嬉しいとも言えない表情だ。いつそ前に殴られたことを根に持って、いい気味だと笑えれば人生楽なんだろうけど。

私は特に感想はない。死んだら善人も悪人もないし、ナムアミダブツって感じ。

それより大事なのはレッドグラッジだ。意識不明の重体って具体的にどんな状態なのか。あいつは回復次第私たちを追っかけてくるだろうし、いつ復活するかが生活に直結している。

けどどの番組、どのネットニュースでもレッドグラッジの続報は流れていなかった。代わりにグリーングリムがいかに優れた魔法少女だったかを礼賛する追悼みたいな放送が増えてきてる。びつくりするくらいどうでもいいことしか言わないんだから、もう。

「んんーっ、はあ。なんか気が抜けました。先にお風呂入ってきます」「いてらー」

たゆが立ち上がり、リビングを出ていった。まだ夕飯前だ。私をソープ塗れにしていやらしいことをする気力すらないらしい。しばらくそつとしといてあげよう。

私も情報収集は疲れた。スマホをショートパンツのポケットに仕舞い、うるさいテレビを消してソファに寝そべる。

ああ疲れた。何もしたくない。靴下履いてるのと似た窮屈感が煩わしい、角を隠すのも止めだ。仰向けなら角も引つかからない。

死体みたくだらーつとして数分した頃、リビングに足音が入ってきた。

たゆが忘れ物でも取りに来たのか。そう思っていると、足音は不規則に乱れ、ぼたんと大きな音で終わる。つまりいたのかもしれない。まったくそそっかしいやつ。

腹筋で起き上がるのに失敗し、ソファの背もたれを這い上がるように上体を起こした。

「たゆ、大丈夫——」

「あ」

たゆ、じゃない。

リビングの床に這いつくばっていたのは、見知らぬ少女だ。夜闇のような黒髪が腰まで伸び、鮮烈な赤いメツシユが無数に黒の上を流れている。一糸まとわぬ華奢な体は、真新しい擦り傷や土埃で痛々しく汚れていた。

ここまでならよかった。百歩譲って痴女気質の美少女がうちに迷い込んできたと納得することもできた。

問題は、角だ。少女のこめかみの少し上から生えた、一対のおぞましいねじれ角。一方の角が半ばから折れているが、人がアクセサリーでつけることは絶対にあり得ないそれらは、少女が魔人であることを示している。おまけに尾てい骨のあたりから鱗のないエナメル質の尻尾みたいのが生えていた。どう見ても人類じゃない。

厄介な匂いがぶんぶんする。住居不法侵入で通報してやる。

だけどその前に、ケガが痛そう。服も用意しなきゃ。

「えつと……こんばんは」

「……」

「救急箱取ってくる。ちよつと待ってて」

たしかたゆ用に買って使わずじまいのやつが、物置部屋にあったはず。ついでにたゆも呼んでこよう。

その子の横を通ってリビングを出ようとする、手首が掴まれた。

「ちよ、ちよつとちよつと近いって！」

ぐい、と一気に距離を詰めてくる。黒と赤のオッドアイの嵌った、

端正な顔立ちが目と鼻の先だ。こんなたゆにバレたら浮気に見えるじゃんか。

離れようとしても両肩を掴まれ、その上しなやかな尻尾が腰に何重にも巻き付いてきた。

「落ち着いてよ、ほら、私も魔人だから。手当てしようって言うてんの、ね？」

「……」

言葉通じてない？　ここまでガン見されると同族でもさすがに怖い。

せめてもの意地で目をそらさず、じーっと鋭い魔人ちゃんアイで睨み返してやる。少女の赤と黒の目は瞳孔がなく、見ていると吸い込まれそうな深みがあった。

そうしてよく分からないにらめっこをしていると、ついに少女が口を開く。

「セーカ」

最初はぼつりとしたつぶやきで、

「セーカ、やっぱりセーカだ。あなた、セーカでしょう」

涼やかに伸びる声音が尻上がりに大きくなっていった。言葉の裏には隠しきれない喜びと確信を感じるけど、あいにく人違いだ。

「違うよ、私はサファイ。君の言うセーカって子じゃない」

少女は首を傾げ、私の体を頭から爪先まで見た。

「少し縮んだのね。でもその青く澄んだ目は変わってないわ。魔人の角も素敵よ、似合ってる。今はサファイと名乗っているの？　いえ、別に良いのよ。私にとってあなたはセーカ。それ以外の何者でもない」

「そ、そう」

「もう、セーカだったら今まで何をしていたの？　私、ずーっと良い子で待ってたのよ？　だけどセーカが意地悪するから、待ち切れずに出てきちゃった。おかげでひどい目にあったわ」

ぷくーっと頬を膨らませる少女は年相応にかわいらしい。

ただ、ふと最悪の予感と情報のすれ違いが頭によぎり、純粹にかわいいとは思えない。いやいや、まさかね。刺し違えたって言った

し。

「聞いてセーカ、ほんとにひどいの。やつと外に出たと思ったら、緑おばさんとヒノにいじめられたの！ とつても痛くて怖かった！」

「……えーつと、誰にいじめられたって？」

「だから、緑おばさんとヒノ！ 魔法少女のグリーングリームと、ヒノよ！」

うわあ。思わず頭を抱えた。レッドグラッジは本名ヒノっていうんだ、と軽い情報から受け止めていく。ちよつと間を置いて、一番重いやつを確認する。

「君、何の魔人？」

「殺意の魔人よ。知ってるでしょ？」

知りたくなかった。

最悪に凶悪な魔人がなぜかうちにやってきたなんて、知りたくなかったよ。たぶん報道が統制されてるってことも知りたくなかった。

レッドグラッジが私たちを放置してから、封印消滅の恐れが発表されるまで間があった。その間は必殺機構が情報を抑えていたのだとしたら、今回も特大のネタを隠蔽しているのだろう。殺意の魔人が健在であること——つまり、レッドグラッジの敗北を。

「でもよかった。こうしてまた会えたんだから……」

「いたた痛い痛い！」

「あつ、ごめんなさい！」

恍惚とした目つきで私を見ながら、尻尾は骨盤をぎりぎり絞め上げていた。すぐに解放されたけど、気分はまるで虎にじやれつかれる飼育員だ。

「大丈夫、セーカ？ こんなに弱くなっただけかわいそう……だけどごめんなさい、正直に言うとうれしいわ」

「何が」

「私のために、魔人に生まれ変わってくれたことが、よ。同じ魔族なら争う理由はないものね」

「ちよつと待てーい！ 色々と待てい！ えつ、何、まず私と君ってどこかで——」

「サファイーっ！　なんか知らない女の声でするんですけどお！」  
「今来るのかよっ!？」

ここでたゆがりビングに転がり込んできた。トゲトゲダークの背中が開いたアーマードレスを身にまとい、黒く染まったハートの大剣を構えている。いつでも強力な魔法を行使できる態勢だ。

だけど使い手はちよつとアホなたゆなので、使う前に処理落ちを起こしてしまった。

「ま、魔人さん……!?　えとえと、サファイのお友達……?」

困惑して私と殺意を見比べている。知らない女の声がしたと思っ  
て駆けつけてみれば、全裸の傷ついた魔人が私に尻尾を巻きつけてし  
なだれかかっているとくれば、まあ混乱もしよう。

そしてたいへん困ったことに、私もこの状況を把握しきれてない。  
とにかく一旦落ち着いて話し合いをしよう。

そう提案するよりわずかに早く、殺意がつぶやいた。

「魔法少女……そっか。ごめんねセーカ、全部分かったわ」  
「えっ?」

「私を迎えにこなかったのは、意地悪じゃなかった……この女に捕  
まって動くに動けなかったのでしょう」

全然違うけどそもそも私って殺意を迎えにいかなきやいけなかつ  
たの?　そこからしてすれ違いがある。

私とたゆが混乱している間に、殺意は自身の手首を口に運び、  
「今すぐ助けてあげるからね」

ぶちり、と骨と肉を噛みちぎった。

半月形に抉れた傷口からどろりとした黒い流体が滴り、フローリン  
グに接地すると共にうねうねと蠢き、五つの血溜まりを形成した。

血溜まりはそれぞれ上方へ伸び上がり、てかりのある太い触手へ変  
わる。触手の先端の肉が裂け、幾重にも枝分かれを繰り返し、無数の  
触手が絡まり合う魔物の姿へと変異した。

五体の魔物が私とたゆの間に立ちふさがる。

平気だ、なにしろたゆは闇墮ちする前でも魔物を瞬殺していた。今  
なら五体いても一瞬で細切れにできるはず。



でも殺意の魔人にとってはその一瞬だけで十分だったみたいで、  
「もう大丈夫！」

私を尻尾で巻き取ったまま、庭に通じるガラス戸を蹴破る。そして  
地面を踏みしめたかと思うと、私は浮遊感と圧迫感で何も言えなくな  
る。

その加速度はもうグリーングリーングリームのときの比じゃない。息が吸  
えない、掴まれた腰が痛い。もし人間だったらとつくに失神してる。  
また誘拐かよ。

(今度防犯グッズ買おう)

とりあえず防犯ブザーとちかん撃退スプレーから。

――

浮遊感と衝撃が交互に襲ってくる。夜闇に沈んだ田舎のあぜ道が  
濁流みたたく後ろに流れ、時折止まってはまた流れていく。着地と跳躍  
を繰り返して移動しているみたい。バツタじゃあるまいし。

どこに連れてかれるかは知らないけど、過去二回の誘拐経験からし  
てろくな未来は待っていないだろう。私は経験豊富なんだ。誘拐す  
るんじゃないってされる方の才能があるかもしれない。

でも今回ばかりは仕方ないと思う。いつ解けるか分からない封印  
の近くに私とたゆが居着いたとたん封印が消滅して、殺意の魔人は赤  
と緑の強襲を切り抜け、なぜか都合の悪いことにピンポイントで私の  
元へやってきた。予想も対策もできるはずない。

「いたた……」

理不尽な流れにやさぐれていると、殺意の足が止まった。アスファ  
ルトにヒビを入れて着地しつつ前へよろめき、膝をつく。お腹に巻き  
付いてた尻尾が力なく垂れ落ちる。

おそろおそろ近づいて顔を覗き込んでみると、殺意は目を固く閉じ  
て苦痛を堪えているみたい。よく見れば折れた片角や全身の生傷だ  
けじゃなく、肩甲骨のあたりに一對の細い楕円形の穴が穿たれてい  
る。場所と形からして翼が千切れた痕に見える。

魔人ならコアさえ無事ならどんなケガも致命傷にはならないけど、痛いものは痛い。

私は殺意の腕を首に回した。

「ほら、肩貸すからがんばれ。どっかで手当てして休むよ」

「痛い、痛いようセーカあ……」

「うんうん、痛いよな」

殺意はついに泣き出した。その情けなさといったら、セーカって誰とか何が目的とか、聞きたいことを後回しにせざるを得ないほど。

ひーこら言つて殺意を立たせ、周囲を見回す。久引町の郊外から中央街まで跳んできたらしく、大通りに真新しいマンションや雑居ビルが立ち並び、向かいにはコンビニや飲食店なんかひしめいている。避難した住民たちはまだ戻っておらず、深閑とした夜の街が街灯と信号機に照らし出されていた。

適当なマンションの居室に空き巣しようとしたけど、鍵がかかっている。そりゃそうだ。どうしよう。

「ここ、入る？」

ぐしゃ、と金属のひしゃげる音がした。

殺意の魔人の尻尾が、鍵穴もろともドアの一部を抉っていた。引き抜かれた尻尾の先端は槍のように尖っていて、「これでいい？」と首をかしげるような仕草をする。

いいとも、元の住人には申し訳ないけど壊しちゃったものは仕方ない。さっさと中へ入り、寝室のベッドに殺意を横たえ、救急箱を探し出して手早く手当てした。

消毒液をぶっかけて絆創膏と包帯をべたべたぐるぐるするしていくと、殺意の魔人は徐々に表情を和らげ、ついには笑顔を見せた。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

「じゃ、しばらく大人しくしててね」

殺意はいったん寝室に置いていて、次にやるべきことをやる。たゆへ連絡しなきゃ。

でもうまくいかない。私の権能スマホはいつでもネットにつながるしバッテリーは無限、壊れても再生するお役立ちアイテムなんだけ

ど、困ったことにたゆがスマホを持ってない。闇堕ちと同時に解約されたっぽい。だからなぜかつながるうちの固定電話に掛けてみると、留守電に切り替わってしまった。

たぶん、たゆは足止めの魔物を倒した後すぐに私を探しに出たんだろう。過去二回の誘拐を考えて、今も死にも狂いで探してるはず。

この町は過疎化しているとはいえ一人ですらみつぶしするには広過ぎる。どうにか居場所を知らせないといつ合流できるか。

「セーカ」

居間で腕を組んで唸っていると、お腹に何かが巻き付いた。殺意の尻尾だ。明るいところで見ると艶のない黒一色で、手触りのいいエナメル質の表皮の下に強靱な筋肉を感じる。さっきのドア破壊を思うとこれに巻かれるのはかなり怖い。

「……大人しく寝てろってば、けが人」

「平気、もう痛くない。それより、セーカを一人にする方が怖いわ。また私を置いて、どこかに行ってしまうそうで」

するり、と細い腕が後ろから首に回された。噛みちぎった手首はもう再生したのか、包帯の下に血の一滴すら滲んでいない。

「お互い魔人になったんだもの、もう争う理由はないわ。今度こそずっと一緒よ、セーカ」

「待てーい」

殺意の手と尻尾をタップした。力が緩んだところで抜け出して殺意と向き合おうと、きよとんとした顔をしている。その顔をしたいの私の方だ。

「セーカって誰。そもそも君と私は今日が初対面でしょ」

「えっ」

「わわ、泣かないでよ」

愕然とした殺意の瞳が涙で潤む。はらはらと溢れるしずくを思わず袖で拭ってやった。

「そんな、ひどい。セーカが言うから私、五年もあそこでじっとしてたのに」

「ごめん、ごめんってば、ね？」

その場にへたりこんで殺意が泣きじやくる。嗚咽してしゃくり上げる様は見た目よりも幼く見えるけど、魔人の尻尾は猫が不満を表すがごとく荒れ狂い、打ち付けるたび床板が紙のように捲れ上がる。

理由も分からず自分が女を泣かせている状況ほど心地の悪いことはない。謝るにしろ励ますにしろ、まずは事情を聞かないと。

セーカとは誰か。私と殺意の魔人はどんな関係なのか。

根気強くなだめすかしながら聞いていくと、ティツシユ一箱使い切る頃によく殺意が答えた。

「誰って、セーカはセーカじゃない。赤井青華。あつ、魔法少女のブルーグレイスって言ったら分かるかしら」

「はあ？」

「だから、ブルーグレイスよ。最強の魔法少女、軋む理性の矛を振るう、賢明なる理性の象徴。思い出した？」

言葉が出ない。頭が真っ白、目が点になる心地。

思い出したかと言われても心当たりは一切ない。そもそも私はブルーグレイスの本名が赤井青華であることすら今初めて知った。私が青華であり、魔法少女ブルーグレイスでもある記憶も実感もまったくない。私は間違いなく怠惰の魔人、サファイだ。

「えー、殺意ちゃん。この角を見て。どっからどう見ても魔人の印でしょ。実際私は二年ちよつと前に生まれたばかりの魔人だよ。魔法少女じゃあ断じてない」

「それはそうだけど……私のために、どうかして生まれ変わってくれたのではないの？」

「そんな都合よく生まれ変わりなんてないでしょ。まったく」

ため息が漏れ出た。どうも私は人違いで扱われたらしい。

魔法少女ブルーグレイスについては、殺意の魔人を封印した五年前当時の最強魔法少女だったことは知っている。殺意の魔人と並々ならぬ因縁があるのは察しがつく。今回はそこに巻き込まれたんだ。

殺意の魔人は捨てられた子犬のような目で小刻みに震えている。そんなかわいそうな目をしてても人違いの事実是不変ならない。ぷいと体を玄関へ向けた。

「どこに行くの?」

「帰るの」

「帰るってどこに……もしかしてあの魔法少女のところ? ダメよっ、魔人と魔法少女が一緒にいられる訳——」

「それが大丈夫なのさ。私とたゆは恋人だから」

たまに主人と猟犬とかヒモとダメ亭主みたいなにも思えるけど、なんにせよ私とたゆの関係は魔人と魔法少女の垣根を越えているのは間違いない。イカれた赤い連中との逃避行を共に切り抜けた仲に、部外者が挟まる余地はないのだ。たとえ殺意の魔人でも。

そんな余裕がちよっと顔に出ちゃったのか。殺意の魔人の目が据わった。

「恋人ですって?」

逃げよう、朝まで歩く羽目になっても徒歩で帰ろう。

そのつもりで駆け出したときにはもう遅かった。尻尾が両腕を巻き込んで巻き付いてきて、身動きできないまま無理やり殺意と向き合わされる。目と花の先で、深淵の黒と原色の赤の瞳がどんよりと淀んでいた。

「恋人、恋人、恋人……!?! ふぎけないでよっ、私がどうしてあんなところで五年も……ずっと待ってたのに、迎えに来てくれるって信じてたのに、待ちきれずに出てきてみたら全部忘れて浮気……信じられない!」

「だっ、だから! 私は魔人のサファイ! ブルーグレイスでもセーカでもないんだってば!」

「いいえ!」

鼻先がぶつかり、互いの吐息が混じり合う。殺意の瞳からとめどなく涙が溢れ、その滴はしだいに赤く濁っていく。

「あなたのその目! 空よりも海よりも深く、サファイアよりもきらめくその目っ! 間違いなくセーカの、ブルーブレイスの瞳よ。姿形が変わっても、私には分かる」

目の色程度でと反駁することはできなかつた。名無しの私にたゆが名前をくれるきっかけになった大事な部分だから。レッドグラッ

ジには決りたいとまで言われたが。

「決めたわ」

殺意の尻尾は蛇のように私の体を這い、腕と足をぐるぐる巻きにした。尻尾の長さは身長のご二倍程度だったはずなのに、今は十メートルを軽く超えている。腹立たしいほど便利な尾だよチクシヨ。

殺意が膝を抱えて座る。私も正面から向かい合う形で座らされた。「セーカが思い出してくれるまで離さない。どこにも行かせない。どこにもよ」

「ふんっ、今に避難した人たちが帰ってくるさ。たゆと、この町の魔法少女たちもすぐに」

「無理よ」

殺意は右腕の付け根を左手で握り、そのまま水風船のごとく握りつぶした。肉の破裂する音、太い骨の折れる音、細かな何かが千切れていく音を経て、右腕が丸ごと切断される。断面から漏れ出る真っ黒な靄は壊れた蛇口のように流れ落ち、落ちた右腕を呑み込んだ。

黒い靄は血ではなく、殺意の魔人を構成する負の情念——人類が抑圧して見ないふりをした殺意そのものだ。

濁った殺意の奔流は瞬く間に二つの球を形成した。バスケットボール大のそれらはぼこぼこ泡立ち、おなじみの触手の塊へと変じていく。

変異を終えて誕生した二体の魔物は、どちらも大型犬程度の大きさだ。しかし体を構成する触手の表面や先端に、返しの棘、鎬の浮かぶ刃、乱杭菌の生える口腔などがびっしり詰まっている。無差別な害意を具現化したような外見は、今までの魔物とは別格の威圧感を放っていた。

「この町に近づくと人間をみんな殺して」

魔物たちは頷くように体を震わせると、床へとぷんと沈み込み、姿を消した。

後に残されたのは私と殺意の二人きり。

尻尾の拘束はまったく緩む気配がない。たゆがあので二体をやっつけた上で、ここを突き止めるまで助けは望めない。

殺意はにっこりと、惚れ惚れするような笑みを浮かべた。

「もう絶対に逃さない。大好きよ、セーカ」

あー、ほんと。

モテる女はつらいなあ。

## 6. 再会／エピローグ

私は何もしないのが得意だ。スマホとテレビがなくてもただ寝転がって天井を見ているだけで一日を過ごせる自信がある。

だけど体の自由を奪われて、恐ろしい黒と赤の虹彩にガン見されながら怠惰に構えるのは無理だった。

窓の外に見える空が白んでいる。この状態になって六時間以上は経つたらしい。

「あのさあ」

「なーに？」

「トイレ行っていい？」

がつくり。何かを期待するようにキラキラした瞳を落胆に濁らせて、殺意はため息をついた。

「私、結構古株の魔人なのよ。トイレもごはんも要らないくらい知ってるわ」

「ちっ」

要らないというか、しなくてもいいししてもいいくらいの感覚だ。人の生理現象に忠実であれば気持ちよさを感じるけど、無視しても問題は無い。その程度殺意の魔人様は百も承知ってわけだ。

埒が明かない。私が魔人の言う昔のことを思い出すか、たゆが助けに来るまで一步も動けずならみ合いをしているなんて冗談じゃない。

「そんな怖い顔しないで」

「ひゃ、や、どこ触ってんの！」

睨みつけて抗議の意思を表明していると、殺意の手が裾の下から入り込んできて、背中に回され——尾てい骨のあたりをこりこり撫でられる。電撃にも似た強烈な快感が脳天まで突き抜け、声にならない悲鳴が漏れる。

その声を呑み込むみたいに、口が柔らかな感触で覆われる。甘い女の匂いと味、舌を絡め取られる快樂。弱点の尾てい骨から送られる刺激と相まって、気持ちいい以外に何も考えられない。

気づいたときには、口から唾液を垂らした殺意が微笑み、私の頭を



撫でているところだった。

「ふふっ、尾てい骨こりこりしたらすぐその気になっちゃうの、魔人になっても変わってないわ」

「さいってー」

「その顔で強がってもかわいいだけよ。どう？ 何か思い出した？」

思い出すわけねーだろ逆に気持ちよさで何か忘れそうだわ。

なんてことを言うと言行為がエスカレートしそうだ。思わず太ももを固く閉じる。

「普通に教えてよ」

「え？」

「乱暴する前に普通に言葉で教えろつつってんの。思い出せとか言われても何を忘れてんのかすらよく分かんない。とりあえず、話してみよ。君とセーカの関係とか、色々さ」

殺意の答えは抱擁だった。頬と首に顔をすりつけたかと思うと、首元に軽い痛みが走る。甘噛みしてるんだ。

殺意の片腕は服の下を這い回り、弱いところに近づくとたび私の喉からしぜんと声が漏れる。害意に満ちたグリーンの手付きよりも穏やかで、優しさに満ちたたゆのそれよりかは激しい、貪るような愛撫だった。

「そうやってあなたは、いつも私に向き合おうとしてくれる。手を差し伸べてくれる。だから好きなのよ」

「ん……くう……っ」

「最初はね、あなたに殺されそうだったの」

体中から送られてくる快感と共に、殺意の昔語りは始まった。

「久しぶりに生まれてよし頑張るぞってところに、あなたがやってきてね。こてんぱんにされちゃった。そしたら、『ごめんなさい、泣かないで』って優しくしてくれた」

よし、ちよつと慣れてきた。こちとらご機嫌斜めなたゆのねちっこい責めで何度となく失神させられてきたんだ、愛撫と囁きくらいじゃ屈しないぞ。

で、なんだっけ。殺意の魔人がボコボコにされた後優しくされて嬉

しかつたつて話か。

「DV男かよ」

「あはっ、あのときのセーカと同じこと言ってるわ」

「誰でも思うだろ、ふにゅっ!?!」

信じられないこいつ、胸触ってきた。

『まだ何も悪いことしてないのに、ひどいことをしてごめんね』。そう言っつて、家に招いて手当てしてくれた。ヒノは猛反発してたけど「ひ、ひのつて……んう」

「セーカの妹よ。赤井緋乃。今は魔法少女レッドグラッツで通ってるのかしら」

受け答えの余裕がなくなってきた。この魔人の手付きが達人級なだけじゃなくて、私の体に慣れている。素肌を触られるだけでじわじわと高ぶり、お腹の中心が熱くなっていく。膝をすり合わせ、呼吸を浅くして絶対死守の気持ちを固めておく。私は負けない。

ねつとりした手とは裏腹に、殺意の語りは淡々と進んだ。

一度は討伐寸前まで追い詰められた殺意はブルーブレイスことセーカの家招かれ、治療を受けた。

同居人の妹、ヒノの反対を受けながらもセーカは殺意に親しく接した。何も悪いことはしていないから、の一点張りだ。

実際に殺意はその当時、何もしていなかった。その身を構成する殺意に人類を曝露させたい本能は熱く滾っていたものの、それ以上にセーカと過ごす時間が愛しかったから。

ブルーブレイスとして戦うセーカをおかえりと迎え、ごはんを作り、お風呂に入り、歯磨きをして、一緒に寝る。早起きをして朝ごはんとお弁当を作り、いってらっしやいと送り出す。二人のことを思いながら家事をこなし、帰りを待つ。それだけの日常で殺意の魔人は満たされていた。当初は警戒心むき出しだった緋乃も次第に心を開き、殺意は妹として、緋乃はもう一人の姉として殺意を慕った。

緩やかでかけがえのない、穏やかな時間だった。

そんなある日、殺意の魔人は胸が痛んだ。存在の基盤を揺るがされているような、猛烈な激痛。

程なく末端から消滅を始める体を前に、殺意は本能的に悟った。

「核の情念に反すれば魔人は消える。初めて知ったけど、当然よね。魔人は思いなんだから」

「そして魔人は人を殺した。」

セーカと緋乃を送り出した後、別の州まで遠出した上で、殺意の権能を行使した。

「殺意の曝露っていつてね？ 見ないふりをした人類の殺意を曝して、人の内にある殺意を露わにさせる……要は殺人衝動ね。今世は権能が変に強くて、加減を間違えちゃったわ」

軽く百人くらいやろうとしたのに、うっかり隣町を含めた十二万人が権能の影響下に巻き込まれた。

犠牲者たちは一様に魔が差し、目につくあらゆる人類を殺しにかかり、挙げ句には自身の首を捻じ切つて絶命した。曝露した中には自身の腹を手指でめつた刺しにした妊婦や、大切な恋人の死体を機械のように壁へ叩きつけ続けるなど、殺意の魔人からしても壮絶なケースがあった。

「みんなよほど理性を強くして生きてるのね。で、肝心なのはこの後」  
殺意が役割を果たしても、消滅は止まらなかった。一般人だけでなく、駆けつけた魔法少女を二、三人殺してみても止まらなかった。

最早何をしても手遅れかと絶望していたとき、ブルーグレイスが駆けつけたのだ。

『殺意ちゃん、なんで？ どうしてこんなことしたの？』

「私は、消えたくなかったの。魔法少女に倒されても魔人は復活できるけど、消滅なんて初めてだった。すっごく怖かった。もうセーカやヒノに会えないなんてヤだった。だから殺したの、たくさん、たくさん」

それでも消滅は止まらない。

ブルーグレイスは黙って話を聞き、指先から胴体まで半透明になりつつあった殺意を見やると、哀しげに首を振った。

『殺意ちゃんとは、私も離れたくない……だけど悪いことするのはダメだよ……』

「なんでそんなこと言うの……好きって言ってくれたのに……私なんか消えちゃえって、結局セーカもそう言うの？」

『違う、そうじゃなくて……』

「何が違うっていうのよっ！」

殺意の魔人はブルーグレイスへ飛びかかった。深い考えなどない、ただの子供の癩癩だ。

それでもブルーグレイスなら大丈夫だと信頼していた。出会い頭に魔人を完膚なきまでに打ち負かした最強の彼女なら、自分の癩癩などものともしないだろうと。

しかし予想に反し、ブルーグレイスは魔人の癩癩に怪我を負った。

鋭い尻尾の先端が、胸を突き抜けていたのだ。

「なん、で……」

慌てて尻尾を引き抜くと、糸の切れた人形のようにブルーグレイスが崩れ落ちた。尻尾の穿った大穴からとめどなく血が溢れ出し、誰が見ても致命傷なのは明白だった。

抱き起こしたブルーグレイスの体が、徐々に冷たくなっていく。

魔人はこれでもいい、と思った。ブルーグレイスはきつと、消える自分と共に死にゆくことを選んでくれたのだと。

『お姉ちゃあああああんっ！　なんで、魔人さん、なんでだよっ?!』

いつやってきたのか、遠くから緋乃の慟哭が聞こえた。

魔人は一抹の申し訳なきを感じつつ、セーカと共に運命を受け入れ

『ごめんね、殺意ちゃん』

ハツとして顔を上げる。

ブルーグレイスの体は、末端からほつれ、幾筋もの有刺鉄線に変じていた。

鉄線は十重二十重に枝分かれして増殖し、途方もない量が二人を中心に円を形成していく。緋乃の姿は鉄線の濁流に吞まれ、外へ流されていった。

殺意の消滅寸前の体は鉄線に絡め取られ、宙へ磔にされる。

胸から上だけが残ったブルーグレイスは、うわごとのようにつぶや

いた。

『有刺鉄線は……抑圧と分断の象徴……世界の仕組みから分断して、その役割を抑圧すれば……消滅は止まるはず……』

すでに首から上だけしか残っていない。それすらも、有刺鉄線へ変わっていく。

『封印は永遠じゃない、から……いい子で待ってて、殺意ちゃん……きつとまた会える、迎えに行く……』

口から目元、つむじまで。すべてがほつれて消えゆく中、ブルーグレイスは確かに最期、こう言っていた。

『約束』だと。

そうして殺意の魔人は、有刺鉄線の抑圧と分断の力に縛られ、同時に守られながら待ち続けた。

体の消滅は止まった。ブルーグレイスの固有魔法はたしかに世界の仕組みへと影響し、殺意の魔人を守った。少なくとも殺意にはそう思えた。

「封印の中で、セーカのことを考えなかったときは一秒だってないわ。ずっとずっと、セーカのことを考えてた。そしたらちよつと前にね、セーカの気配を感じたの」

あのとぎ目の前で封印そのものへと変わっていったのには思ったが、約束を果たしてくれると考えると細かい疑念はどうでもよかった。きつと迎えに来てくれる、また会える。殺意の魔人はその日を心待ちにしていた。

が、セーカの気配は同じ場所から動かなかった。しばらくしてようやく動き出し、近くまで来たと思ったら、またそこで動かなくなった。もう待ってられない。こっちから会いに行つて文句を言つてやる。

殺意の魔人はいい子であることを止めた。力づくで鉄線を引きちぎり、分厚い封印の壁を破壊して外へ出てきた。

するとレッドグラッジと化した緋乃、緑おばさんことグリーングリームに熱烈な出迎えを受け、辛勝。なぜか動きのないセーカの気配の元へやってきて、なんだかんだで今に至る。

「うっ、うえええんセーカ、セーカあ……」

いつしか殺意の魔人の愛撫は止まり、私に抱きついて泣いていた。尻尾に縛られてるから抱き返したり撫でたりはできない。

こいつはこいつで悪いやつじゃないんだろう。消えたくないからって大量に人を殺したのは悪いことだけど、生まれたからには誰だって消えたくない。魔人だって生きてるんだから。

でもどうしよう、まったくピンとこない。

二年前に生まれた私を「セーカの気配」と認識し、ピンポイントで会いに来たことから、私とセーカの同一性は一応あるんだろう。けど話を聞いても一切、これっぽっちも当事者意識が湧いてこない。他人の昔話を聞いた感覚しかない。

こんなこと言ったらもつと泣いちゃうかな。適当な感想でごまかそう。

「君さあ……ちよつと優しくされたくらいで、セーカに懐きすぎじゃない？」

「ぐすつ……だって、初めてだったもん」

「優しさが？」

「そうだけど、そうじゃなくて……知ってる？ 魔族はね、世の中が平和なときだけ現れるのよ」

話変わったな。

「みんなが理性で心を抑えつけて、仲良く平和にしているとき、魔族が出てきて世を乱す。いつの時代、どこに行っても魔族は嫌われものよ」

「もしかして君、長生き？」

「古株って言ったでしょ。倒されて復活したのは今で十五回目よ。みんなみんな、私を嫌った。せつかく平和なのに邪魔だ、って。だから嬉しかったの。セーカの優しさが」

それから殺意の魔人は、優しさと救いに満ちたセーカとの思い出について、涙ながらに語った。

セーカはたいへんな働き者の魔法少女で、強力な魔族が現れるとどこへでも出向き、人々の感謝と尊敬を受けていた。しかし最強完璧なブルーグレイスのイメージとは反対に、家での生活態度はだらしないの一言だった。下着と靴下は裏返して脱ぎ散らかすし、スキあらば冷

凍ピザで食事を済ませようとするし、ベッドよりもリビングのソファで寝落ちしていた。

「それとおつちよこちよいなところがあってね、めんつゆ買ってきてって頼むと天つゆ買ってくるし、とんかつソースを頼んだらお好み焼きソースを買ってくるの」

「地味にうざいやらかしだなあ」

「あとあと、納豆のタレが天敵だったわ。こちら側のどこからでも切れねえじゃんか、って毎回キレるの、ふふ」

「ええ……」

結構ぽんこつだったらしい。殺意の魔人に情けをかけたせいではなくさん死人が出たのも洒落にならないポンと言えそうだし、意外ではない。

他にも緋乃、レッドグラッジが絡んだ思い出もあった。

親も親戚もない赤井姉妹は仲睦まじく暮らしていたけど、セーカは帰りが遅いため、緋乃は寂しい思いを抱えていた。殺意の魔人はその寂しさを埋めるように接し、急速に仲を深めたという。

「私のこと、さつちゃんさつちゃんって呼びながら甘えてくるのよ。あの頃の緋乃、かわいかったな……ああ、それと——」

遠い目をして語り続ける。一つ終わったかと思えばまた一つ、ぽろりぽろりと過去の幸せが浮かんでは消えていく。

昔日を惜しむ老人のような殺意の言葉を聞いていると、ついしんみりした気持ちにはなる。

だけど当事者意識はまったく湧かない。

他人の昔話。たまたまつけたテレビのドラマで、犯人が動機を自分語りしているのを見るような感覚だ。

窓から太陽の光が差し込み、傾き、部屋が薄闇に包まれていく。それだけの時間聞くのに徹しても、私には何もピンとこない。

夕闇の中に浮かぶ殺意の顔が、悲痛に歪む。

「セーカ、何か思い出した？」

「ううん、何も」

「そう……」

きゅつと唇を引き結んで、目をうるうるさせる殺意。

かわいそうだけど、だからこそ嘘はつけない。こんなに真剣な子にいい加減な気持ちで話を合わせるのはダメだ。

好きなだけ語るといい。えっちなことをして気が済むならしたらいい。どうせ私は逃げられないんだから。

なんて風にどっしり構えていると、殺意は立ち上がって、

「よーし、じゃあ次の一手よー！」

「何すんの？」

「たゆつて子に乱暴するわ！」

は？

今なんて言ったこいつ。

「セーカの今の恋人なんでしょう？ 大切な子なんでしょう？ その子にひどいことをするの！」

「え、ちよつと、はあ？ なん、なんでそういう発想になんの？」

「今すぐセーカが前世を思い出したら、何もしないわ」

理解が追いつかない。ないはずの心臓が早鐘を打ち、嫌な汗が背筋を伝う。

「セーカは自分よりも、他人のために頑張る子だった。誰かを助けるため、守るためなら無理をしてでも道理を捻じ曲げる。だからセーカ、頑張つて思い出して？ さもないと——」

たゆちゃんを殺しちゃうわよ？

そう言つて微笑む殺意の表情に、後ろめたさは微塵もない。さも素晴らしいアイデアを思いついたような晴れ晴れしきがある。

私はふぎけんなど叫ぼうとするけど、溢れ出す感情と言葉が喉に詰まつて声にならなかつた。

ふぎけんなよこいつ。セーカが他人のために頑張れる優しい子だったから、たゆを傷つけるだど？ おかしいだろ私一人だけやればいいのに、つて考えてる時点でこいつの思いつきは理に適つてるんだろうちくしょーめ。

待てよ、前のグリーンルームもそうだった。まさかあいつは私の中のセーカを引っ張り出すために——



「あと十秒以内に思い出さないと、たゆちゃんを探しに行きまーす」  
「ちよつと、待っ」

「ダメー。はい十うー！」

どうしようどうしよう、たゆが殺されちゃう。

でもたゆだって強い魔法少女だし返り討ちに、いやダメだ、寝起きにレッドグラッジとグリーングリームと戦って生き残るようなやつが相手じゃさすがに――

「きゆう、はーち、ななー、手足を切り落としてー、ろくー、尻尾でちよつとずつ締め上げてー、ごー」

たゆの苦しむ顔が目には浮かぶ。グリーングリームにお腹を殴られていたときみたいなのに、幼げな顔を苦痛に歪め、血を吐く姿――

「よん、さん」

そんなのダメ、許せない。

二度とたゆにあんな苦しい思いをさせるものか。たゆを傷つけるやつは私がぶっ飛ばしてやる。

けどどんなに手足へ力を込めても、殺意の魔人の尻尾に巻きつかれてびくともしない。傷口を作って魔物の触手を召喚するのは間に合わない。

『そうじゃないよう、頑張つてえ、もう一息』

唐突に、グリーングリームの間延びした声が脳裏をよぎる。うるせえよどう頑張れつてんだよ。

「にー、いーち」

たゆが死ぬ、殺される。

私が頑張らないと。私がどうにかしないと。私が、私が。

私が。

「ぜ――」

ろ、と言い切る直前。

私の中で何かが弾けた。

――

ぶちぶち、と聞き覚えのある音がした。肉が千切れる音だ。前に聞いたのは、グリーングリームの拘束魔法に手首を切断されたときだった。

今が二度目。

「あはは、さすがよセーカ」

はだけた胸の内から、刺々しい灰色のヒモが飛び出していく。私の胸の肉を内側から抉り、皮膚を裂き、食い破りながら一本、また一本と飛び出す。

それらは有刺鉄線だった。体の内部——魔人の急所であるコアを源に、無数の有刺鉄線が皮膚を突き破っていく。

「……………っ!？」

痛みと呼ぶのすらおこがましい肉体を内側から抉られる感覚。少しでも気を抜けば今すぐ失神してしまいそう。

けどその前にやることがある。

勝手な理由でたゆを傷つけようとする、殺意の魔人をぶっ飛ばすのだ。

「あら危ない」

殺意が尻尾を巻いて軽やかに距離を取る。逃がすか。意思に呼応して有刺鉄線が動いた。

胸から生えた鉄線は幾重にも枝分かれして増殖しつつ、殺意の魔人へ殺到する。

灰色の濁流を殺意が半歩動いて躲す。

「すごいすごい！ これセーカの魔法よ！ やっぱりセーカはセーカだった！」

知ったことか。

有刺鉄線の束は大蛇のごとく鎌首をもたげ、殺意の魔人へ追い縋った。圧倒的質量と棘に床が抜け、壁が崩れ、天井に穴が穿たれていく。

さすがはかつての最強の魔法というべきか、荒れ狂う有刺鉄線は壁もその奥の鉄筋コンクリートでさえも紙のごとく削り取っていく。当たれば殺意の魔人だったただじゃ済まないはず。

だけど当たらない。ひらひら身を躲す魔人に掠りもしない。

まずい、頭がくらくらしてきた。胸の痛みがひどい。ただ痛いんじゃない、この感覚は以前消滅しかけたときと同じ――

「んもー、暴れすぎよ」

不意に殺意の尻尾がお腹に巻き付く。抵抗する間もなく引つ張られ、意識が朦朧とする中世界が崩れ落ちるような重い音を聞いた。

気づけばごつごつした地面にぶつ倒れ、夜空を見上げている。黒い空は濃い土煙で陰っていた。視界の端にひしゃげた鉄骨と大きな瓦礫がたくさん見える。

「うぐ……」

胸を割いた有刺鉄線は勢いを弱め、ほんの一、二本の細いそれが胸から飛び出ているだけだった。

力を振り絞って起き上がろうとすると、めまいがして前のめりに倒れてしまう。

それきり痛みと疲労感で動けない。指一本の感覚すらない。疲れた。

するとひよっこり、視界に殺意の魔人が現れた。赤と黒の目が上機嫌に細まっている。

「建物が潰れちゃったわ。ここに住んでる人は気の毒ね？」

「……」

「ね、思い出したでしょ？ 魔法まで使えたんだもの、ねっ？」

そういえばそういう趣旨だった。とにかくこいつをぶっ飛ばしてやりたくて忘れてた。

でも残念ながら、思い出すことは何もない。先程の思い出話を反芻しても他人事の印象は変わらない。

魔人の私が、かつての魔法少女の魔法を使ったことには何か意味があるのだろう。

だけどそれについて考える余裕はなかった。

「わわっ」

殺意の魔人が振り返りざま、尻尾を薙ぎ払う。ぎいん、と火花を散らして何かが弾かれた。

たゆが来てくれたんだ。私の居場所が分からなくても、マンション

が崩落する轟音を聞きつけてやってきた。殺意は倒せなくても思いがけない合図になった。

でもたゆ一人じゃ殺意の魔人に敵わない。どうにかもうひと頑張りして、たゆを助けなきや——

「あつは★ 見つけたよー殺意ちゃん★」

呼吸が止まった。絶対に聞きたくない高周波めいた少女の声。

瓦礫の山をゆらりゆらりと踏み越えて、近づいてくる影が見える。先程弾かれた何かはくるくると回りながら、その影に向かって落ちていく。

それは戟だった。穂先に槍と三日月状の横刃を備え、長大な黒地の柄にマール模様赤が散らされ、血流のようにうごめいている。

無造作に戟を受け止め、土煙から姿を現した赤い魔法少女。黒地のレオタードに真っ赤なフリルをひらめかせ、原色の赤い瞳をぎらつかせるその姿は、

「みんな大好き魔族必殺★ レッドグラッジがあなたを必殺してあげるっ★」

レッドグラッジだった。

……たゆは？

——

「んもーっ、グラッジさん！ 今サファイもまとめて狙ってたでしょー！」

「もろとも死ねば僥倖だ。魔族必殺こそ我が定め」

「もう、もうっ！」

「牛さんみたーい★」

こちらを振り返りもしないレッドグラッジに、たゆは地団駄を踏みたくなかった。しかし強烈な殺気と魔族の気配を前に、文句は呑み込むしかない。

レッドグラッジの見据える先、崩落した建物の瓦礫の上に、異形が佇んでいる。

男物のシャツ一枚を羽織った少女。漆黒の髪が足元まで伸び、ラン

ダムな赤いメッシュユがその上を走っている。長い前髪の間からどんなよりとした赤と黒の虹彩がこちらを睨めつけていた。

頭には魔人の証である一対のねじれ角。異形の証はそれに留まらず、三メートルはあるしなやかな尻尾がリズムカルに揺れている。頭や、シャツの裾から覗く太もも、膝に絆創膏と包帯があるもの、もつとも目立つ左腕の千切れた痕はそのままむき出した。

しかしたゆにはその少女よりも、少女の後ろで倒れる小さな影の方が重要だった。

「サファイ……!?!」

拐われたサファイはまたも、ひどい有様だった。衣服は上下ともに破れて全裸に近く、ぐったりうつぶせに倒れて動かない。サファイアのように青い瞳はかすれ、たゆたちに朦朧とした視線を投げかけていた。

まただ。

また、サファイが何もしてないのに辛い目にあっている。

「落ち着け、パステルエッジ。死ぬぞ」

「く……っ」

沸騰した感情は、冷静な声に鎮められた。大剣の柄を握る手が震え、力任せに剣先を瓦礫に突き立て、獣のように熱い息を吐く。

「えらいえらいっ★ よくできましたー★」

「約束ですよ。殺意の魔人を倒すまではサファイに手を出さないこと」

「分かっているよっ、さっきのはついで★ ヤツを前にして貴様と怠惰まで相手取る余裕はない」

「ならいいです」

たゆはレッドグラッジの横に並び立ち、身を低くして大剣を構える。レッドグラッジも戟を殺意の魔人へと向けるものの、その切っ先は頼りなく揺れていた。同じく体もふらふらと揺れており、いつ倒れるかたゆは不安を拭えない。

レッドグラッジは満身創痍だった。頭に包帯を巻きつけ、レオタードのところどころには血がにじみ、ひらひらしたフリルの下に覗く素肌には痣や擦り傷が大小無数にある。殺意の魔人と相討ちになった

傷がまだ癒えていないのだ。

しかし明らかに本調子でない格好ながら、魔人を見据える赤い瞳には一切の揺らぎがない。陰らぬ必殺の意思が自分たちに向けられませんようにと、たゆはひそかに祈った。

――

サファイが拐われてたつぷり半日、たゆは足止めを食らった。

殺意の魔人が自ら生み出した五体の魔物は、自然発生するそれとは格が違ったのだ。とにかく固く、速く、強い。黒い大剣の刃がまともに通らず、わずかな切り傷を少しずつ切り広げ、触手を一本ずつ切断していくことでどうにか一体屠った。

これをあと四度繰り返すなど馬鹿げている。が、逃げる素振りを見せると一転攻勢とばかり触手が雨あられと乱れ打ちされる。

焦燥と危機感に煽られて動きが鈍りだした時、赤い救世主がやってきたのだ。

『必殺の時間だよー★』

黒地のレオタードに赤いフリル、マール模様マール模様の赤い戟。レッドグラッジだ。

レッドグラッジは戟のひと振りですべて、魔物を瞬殺していった。一撃ごとに魔族を必ず殺す運命の力が込められており、それは殺意の魔物が相手だろうと関係なかった。

台風のような瞬殺劇にたゆが啞然としてみると、レッドグラッジはたゆを無視して踵を返す。

たゆはその後を追いかけた。

無人の田舎道を走り抜けながら、グラッジが言った。

『なんでついてくるのかな？』

『グラッジさんの向かう先にサファイが居そうだからです！ あと助けてもらってありがとうございます！』

『どーいたしました★ でも怠惰ちゃんは今どうでもいいんだ★ 殺意の魔人を何としても殺さねばならん』

『えっ、相討ちで倒したんじゃ?』

『仕留め損ねた。パニックを避けるため情報統制を敷いている』

たゆは殺意が必殺を免れたことに驚きを覚えるとともに、サファイを拐った謎の魔人の正体を理解した。

あのかわいらしいねじれ角は間違いなく魔人のもの。しかし身にまとう禍々しきはサファイとは比べ物にならない。なぜか分からないがサファイは殺意の魔人に拐われたらしい。

ということは、やはりレッドグラτζが向かう先にサファイがいる。殺意の魔人と共に。

『闇狩りは専門外だよ★ 見逃してあげるから失ーせーてっ★』

『協力させてくーだーさいっ』

『なんだと』

『実はですね』

サファイが拐われたことを話すと、

『ふん、ヤツもあの目に感化されたか』

『目?』

『なんでもないよ★ 邪魔しないならごじゅーにどうぞ★』

『邪魔どころかお手伝いします! かわりに、殺意を倒すまでサファイには手を出さないでくれませんか?』

『いいよ、どうせそんなヒマないし★』

『約束ですよ』

市街地へ向けて全力疾走しながら、こうして二人は共闘を取り決めた。

田舎道が終わって市街地へ差し掛かったところで、二体の魔物に遭遇。たゆ一人では苦戦は確実な殺意の魔物だったが、レッドグラτζの固有魔法によって秒殺された。

苦戦したのはここからだ。

『くんくん、くんくん。このあたりだと思っただけど……』

『結構大雑把なんですね』

レッドグラτζは鼻が効く。魔族の気配をなんとなく感じ取ることが出来る。

とはいえ精密に居場所を絞れるわけではなく、集合住宅の立ち並ぶ一帯に大雑把な目星をつけるのが限界だった。

避難した人々がまた住むことを考えると建物ごと消し飛ばすわけにはいかない。レッドグラッジは鍵のかかった居室の一つ一つに鼻を近づけ、魔族の匂いを探した。たゆはあてずっぽうに扉を蹴破ろうとしたが、『人様の家を壊すな』と真顔で怒られ、仕方なくベランダや窓から覗くにとどめた。

そうしているうちに日が沈み、かと思うと建物の一つが倒壊した。駆けつけてみると、瓦礫の山と土煙の中に、異形の人影が見える。そこへすぐさまレッドグラッジが戟を投てきし、遅れてたゆが追いかける。

こうして二人は、それぞれ求める魔人へ遭遇したのである。

――

よかった、ちゃんとたゆも来てくれた。

しかも一人じゃなくて、状況的に一番頼もしい赤い魔法少女、レッドグラッジを連れてくる。殺意の魔人は怪我をして弱っているし、二人ならきつと問題ない。

共闘の経緯は察せられる。レッドグラッジの優先順位は私より殺意の方が高いから、一時的に手を結んだんだろう。散々追い回されただけに、あの赤いのが味方についた頼もしさはすさまじい。がんばれ赤いの。

「ヒノ、ふらふらじゃない。無理しちゃだめよ」

「……『みなごろせ あかきえんさよ』」

殺意の声には応えずレッドグラッジがつぶやくと、体が赤に輝く。髪が逆立ち、ひらりとした赤いフリルが炎のように燃え上がった。

瞬間、赤い眼光をなびかせてレッドグラッジの姿が消える。気づくと私の目の前、殺意の背後に回り込んでいた。戟の刃が頑強な尻尾と鏢迫り合いをしている。

「ごめんね、ヒノ。私は殺される相手にはこだわりたいの」



「分かった、死ね★」

「女の子がそんな言葉遣いはダメよ」

「姉ヅラをやめろ汚らわしい魔人が」

二人が動くとき、私の目には追えなくなった。夜闇の中で赤い閃光とエナメル質の尻尾が火花を散らし、言い争う声だけが聞こえてくる。と、そこに黒い剣閃が飛び入りした。ひとときわ高い剣戟の音を響かせ、動きが止まる。

「あれえ、不意をついたと思っただけですけど」

「私は殺意の魔人よ？ 殺意には誰より敏感なの、よっ」

我がたゆの突進突きは、切っ先を尻尾の先端で抑えられていた。器用にも尻尾の半ばでレッドグラスの戟まで受け止めている。

殺意が隻腕を軽く振るうとき、慌ててたゆが距離を取った。しやらん、と軽やかな金属音が鳴る。

殺意の右手首、尺骨の突端から鎌のように湾曲した刃が生えていた。腕の倍ほどの長さがあり、峰は尻尾と同じ漆黒で、鎬のある刃は鋼色の鋭い輝きを発している。

「とーう」

逆手に刀剣を握るようにして、殺意がその鉤爪を振るう。

空気が悲鳴を上げて裂かれる。幾百もの火花が爆ぜたように爆発的な火花を散らし、たゆとレッドグラスが吹っ飛ばされた。

近くのコンクリート塊が紙吹雪みたくバラバラになっただけ。あの一瞬で何百回切り裂いたんだろう。

距離を取って仕切り直し。よかった、たゆには怪我はない。レッドグラスは元々包帯でぐるぐる巻きだからよくわからん。

殺意は前腕鉤のある右腕を前にして半身に構え、長くしなやかな尻尾で自身を囲んでいる。

「お互い弱ってるけど、この分なら私の方が優勢ね。どう、目を改めない？ セーカとまだ話したいことがあるの」

「殺意さん、お姉ちゃんはもういないんだよ★ その魔人ちゃんはただ目の色が似てるだけ★ 現実見ようね★」

「そんなことないわ、だってさつき」

「スキありっ！」

「ないってば」

たゆが正面から斬りかかる。あえなく前腕鉤に防がれるも、そのまま力づくで振り切って体を横へ逃した。離れ際に大剣を振るい、刃から黒い三日月型の光波が発射される。これは尻尾にかき消され、スキを見たレッドグラッツジが追撃し、またも視認不可能な攻防が始まった。

三人が戦うのを見ながら、ふと考える。

結局私ってなんなんだろう。

二年前に生まれたその瞬間から、私は怠惰の魔人としての自我があった。たゆと出会いサファイの名を貰ってその認識を強めたけど、殺意の魔人が言うには、私は魔法少女ブルーグレイスこと赤井青華でもあるらしい。

そんなの殺意の勝手な思い込みだと思ってたら、なぜか身に覚えのない魔法が使えた。魔物の触手でも怠惰の魔人の権能でもない、魔法の有刺鉄線。この事実があるから殺意の妄言だとは言えなくなった。

グリーングリームの思わせぶりな発言も今になって意味が通る部分がある。私の心はどこから来たのか。人々の抑圧された思いが集まったからといって人格が果たして生まれるのか——生まれないとあいつは言いたかったんだろう。

魔法少女は人類の思いの受け皿。死後もその魂が受け皿として機能し、負の情念を受け取って魔人になる……のかもしれない。

曖昧だけど証拠なんてないし、今でもセーカとしての記憶が出てこないし。もしかすると魂というより、魔力の残滓みたいなものが魔人の核になるんじゃないか。知らんけど。

世界の仕組みなんて知らん。

とにかく大事なものは、私がセーカの魔法を使えること。

そして——

「いいわ、終わりにしましょうヒノ」

「グラッツジさん！」

魔法少女がピンチってことだ。

どんなチャンバラアクションを挟んだのか見当もつかないが、魔人の尻尾がレッドグラッジの脇腹に突き刺さっている。

レッドグラッジは知らぬとばかり斜め前へ踏み込む。腹の肉が引きつり、傷口が横へ広がる。血しぶきを上げながら殺意の魔人へ迫る。

前腕鉤と戟が激しく打ち合い、鏢迫り合いを挟んで両者が離れた。膝をつくレッドグラッジ。たゆが慌てて駆け寄るも、荒々しく振り払われた。

「死んじやいますよ!？」

「知ったことか。魔族は殺す、必ずだ」

血を吐き、足を震わせながらも戟を杖にして立ち上がる。たゆはドーン引きしていた。

おいこら、引いてる場合か。レッドグラッジが死んだら一人になるんだぞ。そしたらどうやって殺意の魔人に敵わない。たゆは殺され、私は一人になる。殺意の魔人に覚えのない愛を延々語られることになる。

以前の私なら、そうならないようこの時点でたゆを突き放していたかもしれない。私は殺意の魔人と結婚するのでたゆは捨てます、みたいな。そしたらたゆが殺意にこだわる理由なくなるし。

でも、今の私は欲張りだ。たゆに傷ついてほしくないし、レッドグラッジも死んでほしくないし、私もたゆと一緒にいたい。

だから頑張ってみよう。もうひと頑張り、頑張らない怠惰の魔人ちゃん最期の頑張りを見せてやろう。

「んもう、時間稼ぎますからせめて血止めてください！ そのくらいの魔力はあるでしょ!」

「ないんだなーこれがっ★ あっは★」

「ちよっ」

夥しい流血を撒き散らしながら戟を振り回すレッドグラッジ、慌ててその援護に回るたゆ。殺意は目を細め、確実な止めを刺すときを窺っているみたい。

時間はあまりない。

私はうつぶせのまま、手を胸の穴にあてがう。そこから飛び出た有刺鉄線の端を思い切り握った。鋭い棘に指が焼けるように痛む。

それから全身に力を入れて仰向けになる。胸の有刺鉄線を全力で外へ引っ張った。

「――」

ちよつと意識が飛んだ。

人の思いで出来た肉が千切れ、胸の内にある核はがりがり削れていく。このまま大事なものが削れて死んだらどうしよう、怖い。

怖いけど、たゆが殺される方がもつと怖い。

じゃあやるしかない。

両手で鉄線を握り直し、

「く……うああああつ！」

一息に引き抜いた。

栓を抜いたように、体の内から有刺鉄線が溢れ出す。これをみんな殺意にけしかけてやればきつと――

と思つていたら、鉄線が言うことを聞かなくなった。

「な、なに……う？」

噴水みたく湧き出る有刺鉄線。私の体積の数十倍はありそうな鉄の束は、私の頭上でとぐるを巻き、小さく高密度に圧縮されていく。

がりがり、じやらじやらと金属が擦れ合い、やがて現れたのは長柄の槍だ。柄から穂先までまじりつけのない原色の青い槍、いや穂先の肉厚な両刃を見ると矛だろうか。レッドグラッジの戟と同じくらいの長さだ。

柄の半ばから刃にかけて、鉄線が巻き付く。青く刺々しい矛の形に収束した。

時間にして二秒もない高速の出来事だった。

「グラッジさんっ!?!」

切迫したたゆの声。

見ると、レッドグラッジが血飛沫を上げて垂直に宙を舞っていた。しかしその瞳は輝きを失わず、なぜか殺意の魔人ではなく私の方を凝視している。そのスキをつかれたんだろう。

殺意の魔人の尻尾と鉤爪は、この瞬間どちらもたゆに向けられている。

痛みと疲れが認識の彼方へぶっ飛ぶ。

飛び起きて走り出す。

手をかざした。青い矛がひとりでに手へ収まる。

走りながら槍を引いた。

殺意の魔人の背中がみるみる眼前に迫る。

容赦はしない。狙いは心臓、魔人の核。背中を晒している、大丈夫。

と、魔人が振り返った。尻尾が揺れ、前腕鉤がざらりと光る。

相討ちでもぶっ飛ばす。

そのつもりだったのに。

殺意の魔人は笑っていた。

幸せそうに片腕を広げて、まるで受け入れるように。

その意味を考える時間も、今更躊躇する余裕もなくて。

私は走る勢いそのままに、矛を突き出した。

――

魔人は殺されるために生まれてくる。

見ないふりをした思いを人に思い出させた後、魔法少女に殺される。それがすべての魔人の役割。何度となく魔人として生まれ、殺されるうちにそう悟った。

だからせめて、好きな人に殺してほしかった。

初めて優しくしてくれたあなたに。初めて認めてくれたあなたに。

ただ消えるなんて嫌だった。

あなたは優しいから、きつと頼んでもやってくれない。

だからあのとき、あなたを殺しちゃったあのときはチャンスだと思った。私の痍癩を返り討ちにしてくれる。殺してくれると思っただから。

なのにあなたは私を檻に閉じ込めて逃げちゃった。

封印の中は寂しくて辛くてつまなくて、外に出たら今度こそ、つ

て張り切ってたの。ヒノでも緑おばさんでも世界の仕組みでもない、私、が大好きなあなたに、私の死をあげたい。

やっと受け取ってもらえた。

ありがとう。

またね、セーカ。

――

貫いたコアから、矛を通して思いが伝わる。殺意の魔人からセーカへの、ひたむきでまっすぐな感情だった。

殺意の魔人の体は繊維がほつれるように光の糸へ変じ、空气中へ消滅していく。あれほど強大な力を振るっていたのに似合わず、あっさりとほんの数秒で、魔人の存在は欠片も残さず消えた。

それは私の矛も同様だった。矛に絡んでいた有刺鉄線がぼつんと千切れ、青い槍は煙のように霧散してしまふ。

そのとたん、力が抜けた。指一本動かさない。

「サファイ！」

たゆが受け止めてくれた。トゲトゲしたダークなアーマーは抱かれ心地最悪だった。ちくしょー。

「サファイ、さっきのつて一体、つて胸に穴あいてる!?! あわわわどうしようしょー!」

「落ち着け、痛くないから。寝たら治る」

たぶん。手首千切れたのも治ったんだし治るだろ。自分よりパニックなたゆを見てると逆に冷静になった。

さて、怖い魔人もいなくなったしあとは家に帰ってしばらく休み、たゆとイチヤイチャ――

「ふざけるな」

とはいかない。

がきん、ともはや聞き慣れた金属音。レッドグラッジの戟をたゆの大剣が受け止めた音だ。

たゆは素早く剣を払い、距離を取る。全身血だらけでわなわな震え

るレッドグラッジが、血走った目で私を睨みつけていた。

「今のは我が姉の武器だ。軋む抑圧の矛。なぜ貴様の、魔人の体から出てきた」

「あー、たぶん、私の何割かはブルーグレイスっぽいよ。死に際の遺志か、それとも魔力の残滓かは分からんけど。それでちよつと使えるみたい」

感覚的な推測だけだね。しかも使えるといっても、ほとんど自爆に近い。なんたって魔族を倒すための魔法を魔人の体で使うわけだから、見た目通り超痛いしコアにも悪い。

「サファイってハーフなんですか？」

「半分かは分かんないよ。魔法が使えるってだけだし」

「ふーん」

不思議そうに首をかしげるたゆ。

するとレッドグラッジは、まなじりが裂けそうなほど目を見開き、無表情で言った。

「固有魔法は世界で唯一つ。ましてや同一の武器など存在せん」

「そ、そうなの」

「本当に……お姉ちゃんなのか……」

がつくりと頭を垂れ、戟の穂先が瓦礫に落ちる。赤い体は小刻みに震えている。

お姉ちゃんなのかと言われても、私にセーカだった頃の記憶はない。うう、言いにくいことを言うしかないのか。

気まずい空気をとりなすように、たゆは口を挟む。

「もう会えないはずの姉妹がまた会えた。よかったですね、二人とも！」

「よかった、だど？」

がきん、と例の音。

たゆは慌てて剣を払いながら飛び退り、信じられないものを見るような目をしていた。

「な、何やってるんですか？ サファイはグラッジさんのお姉さんなんですよ？」

「違うよっ★ お姉ちゃんは五年前に死んだの★ その魔人ちゃん  
は、お姉ちゃんの力を偶然取り込んだだけの魔族っ★」

戟を裏拳のように振り抜き、大きく両腕を広げた姿勢で、レッドグ  
ラτζジは満面の笑みを浮かべている。

「魔族は殺す★ みな殺す★ どんな性質であろうと、有害無害にか  
かわらず、魔族は絶対必ず決して殺すっ★」

流血と腹からわずかに漏れるハラワタをもともせず、必殺を語る  
レッドグラτζジの姿は異様だった。

私とレッドグラτζジはボロボロだけど、たゆはほぼ無傷に近い。す  
ぐに逃げれば撒くのはたやすい。

でも逃げる前に、聞いてみたかった。

何が彼女を必殺に駆り立てるのか。

「ねえ、レッドグラτζジ。どうしてそこまで——」

「どうして？ どうして、と聞いたのあなた？ がはっ」

うわっ、食い気味に応えたと思ったならめっちゃ血吐いた。たゆが頬  
を引つらせて一歩引く。

だけどそれ以上動くことはできなかった。

レッドグラτζジが不意に浮かべた、泣く寸前の子供のような表情  
に、そろって言葉を失ったから。

「決まっている……必殺を怠り……魔人に情けをかけ……それ故に殺  
されたのは——」

戟が大きく後ろに引かれ、

「貴様なのだぞ、お姉ちゃんッ！」

必殺の突きが放たれた。

が、狙いは逸れている。切っ先は私たちの足元の瓦礫に突き立つ  
た。

戟を手放したレッドグラτζジは、今にもつまずきそうな、ふらつい  
た足取りで近づいてくる。

たゆは息を呑み、距離を取ろうとしない。私は一歩も動けないほど  
疲れているけど、もし動けたとしても逃げたりはしなかっただろう。

レッドグラτζジは泣いている。血の涙を流している。



一人で泣いている女の子を放っておくわけにはいかないのだ。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん……！」

たゆに寄りかかる私に、レッドグラτζジが縋りついてくる。穴の空いた胸板に頬をすりつけて、大声で泣きわめく。

「必殺しなきや……使命だから……私たちみたいに、悲しいことになるから……魔族は、魔法少女はみんな……」

「うん、そうだね」

「うう、うわああああん！」

「ぐすつ、ひつく、ずず……」

レッドグラτζジ、もとい赤井緋乃が慟哭している。たゆももらい泣きだ。

どうしよ、この子の姉としての自覚はまったく蘇ってないんだけど。ていうか「姉の力を偶然取り込んだだけの魔族」って言ってなかったっけ。私は赤井青華その人ではない。

たぶん、理性では分かっているんだろう。それでも私に姉の断片を感じ取り、縋っている。もうちよつと付き合おう。

時間にして数分ほど、緋乃は大粒の血涙を流してさんざん泣きわめく。もらい泣きするたゆの分も合わせ、私は美少女二人の涙と鼻水にまみれた。全然嬉しくない。

その流れを断ってくれたのは、空気をパタパタと叩く轟音だった。音に釣られて見上げてみると、夜空に真っ赤な色合いのへりが飛んでいる。

へりは緩やかに旋回して私たちの真上につけ、徐々に高度を下げてくる。近づくにつれ、赤一色の機体のそこかしこに「必殺」と白抜きされているのが見える。

色と文字からして間違いなく魔族必殺機構のものだ。へりまで持つてるのか。

「お迎えだね★」

緋乃が私の体から離れた。涙と鼻水でぐちゃぐちゃの泣き顔を、くしやりと笑顔の形に歪める。

くるりと背を向け、ホバリングするへりの元へ緋乃は歩いていく。

「レッドグラッジさん！」

たゆが鼻水をすすりながら、ローターに負けない大声で叫んだ。

「お友達になりましょう！ サファイに、お姉さんに好きなときに会いに——」

「勘違いしないでよね★」

緋乃は振り返り、抉れた脇腹を手で抑えながら、

「魔力も血も足りないから、今日だけ見逃してあげる★ 必殺の意思に変わりはないよっ★」

「そんなあ……」

「でもね」

思い出したように手をかぎす緋乃。瓦礫に突き立った戟が自律して動き、すんなり緋乃の手に帰る。

肩で武器を担ぐと、今度こそ緋乃は振り返らない。

「あなたたちには借りができちゃった★ それに、不毛な鬼ごっこよ  
り殺せる魔族を殺した方が、世のため人のためっ★ だから——貴様  
らを殺すのは最後にしてやる」

それきり垂直にジャンプして、低空のヘリに飛び乗る緋乃。血まみれスプラッタな緋乃を迎え、ヘリの中が阿鼻叫喚と化しているのが見えた。

ヘリはわたわたと上昇し、来た時よりも気持ち素早い動きで飛び去っていった。

後には無人の瓦礫の山と、私とたゆが残される。

東の空が白んできていた。もうじき夜が明ける。避難民が帰ってくる前に退散しないとイケない。

「たゆ、帰ろ……」

もちろんそんな元気が残ってるわけないので、たゆの体に寄っかかって、そのまま寝落ちした。

疲れた。

——

『レッドグラッジ、療養へ』『ありがとうレッドグラッジ』『グリーングリーン、惜しむ声』『マンション倒壊、魔物の仕業か』

「世の中は今日も忙しない」  
「ですなー」

いつもの丘の上の一軒家、リビングのソファにて。たゆの膝に座った私は、後頭部でたゆのおっぱいを楽しみつつ、意味のないネットサーフィンに興じていた。

私が拐われ、有刺鉄線まみれになってから一か月後のことだ。暑い夏は終わり、外では蝉の死骸が転がる上を赤とんぼが飛んでいる。

魔人が魔法を使った影響なのか、長期間昏睡に陥りたゆには大層心配をかけた。目覚めたときにはぎゃん泣きしながら私を抱きしめ、なかなか離してくれなくてたいへんだった。

テレビやネットは殺意の魔人と、それに関わったレッドグラッジ、グリーングリーンのことをしきりに語っている。

グリーングリーンが盛大に惜しまれているほか、もつとも熱いのはレッドグラッジへの称賛だ。

表向き、殺意の魔人は封印消滅直後の戦いで討伐されたことになっている。ではその後、殺意に拐われた私がぶっ壊した建物についてはどうなったかというと、魔物が壊したとされた。

レッドグラッジは瀕死の重傷を負いながらも、町を壊す悪い魔物を無理して退治に行った、とされているのだ。

ニュースのキャスターや専門家は、この働きぶりを鼻息荒くして褒め称えていた。

『まったくレッドグラッジ氏の献身には脱帽という他ありません。全治二ヶ月の怪我を押しまで自らの使命を果たそうとするその赤心、心意気！ まさに魔法少女の鑑でありましょう』

『本当にそのとおりですね。最新の情念予報によりますと、魔物の発生はしばらくなくないので、どうかこの機に休んでいただければというところです』

『政府は殺意の魔人を討伐したレッドグラッジ氏、グリーングリーン氏らに魔性栄誉賞を授与すると――』

『両氏は史上初の魔法少女等身大ファイギュア化する見通し——』

「へいへい、すごいすごい」

まったく同じことばかり、飽きちゃった。電源を消す。

カバーストーリーとはいえ、レッドグラッジが怪我してるのに無理して働いたのは事実だ。その点を褒めるばかりなのは変な感じ。人類は頑張つて働くのがよほど好きなんだな。

私は何一つ頑張りがたくない。こんな私をもっと見習うがいい。

「いやあの、サファイが『頑張らない』とか言つても説得力皆無ですからね?」

「言いたいことは分かる。でも最近のはみんな不可抗力さ」

「だからって……はい、もういいです。これからはなんにも頑張らなくていいですからね」

「もちろんだとも。うへへ」

スマホを放り出し、たゆと対面で向き合う。おっぱいに顔を埋めるとたゆの匂いと柔らかさに包まれ頭がぼうつとしてくる。鼻をすりつけると、くすぐったいのかたゆの体が小刻みに揺れ、「んふ」と熱っぽい吐息が漏れる。かわいい。

好きな女を抱いたり抱かれたりするの最高だ。私はもう何一つ頑張ることなく、食べて寝てえっちして過ごすのだ。

今回は私の方からちゅーしてやろうとすると、

『やあやあ、すっかり元気みたいだねえ、よかったよかったあ』  
「曲者おー」

もう二度と聞きたくない声が空気を震わせた。

たゆが瞬時に変身して大剣を横薙ぎするも、曲者の姿はない。立ち上がったたゆの後ろで、私も胸に手を当てて警戒を強める。痛いからこの力は使いたくないけど、場合によっちゃやむを得ない。

『争うつもりはないよお』  
「どうだか」

「正直死んでほしかったなー」

空気そのものが喋っているような感覚、間延びした声。間違いなく最年長魔法少女、グリーングリームだった。

固有魔法は何にでも擬態する力だから、そりゃ致命傷でも死体でも死を装える擬態はいくらでも使えるだろう。なぜ生きているとは今更聞かない。

『ひどいなあ。今日は感謝しにきたんだよお』

「何にですか？」

『闇狩りへのご協力、ありがとうございますあ』

「は？」

意味が分からない。

たゆと顔を見合わせていると、空気は一方的に長々と語りだしたのだった。

現代の闇狩りは魔法少女の心に巣食う闇を狩る——ぶっちゃけ魔法少女専門のメンタルケア担当である。

その代表であるグリーンルームが担当していた少女こそ、レッドグラッジだった。

『あの子はねえ、人類の怨嗟で魔法少女になったんだよお。大切な人を魔族に奪われた、やるせない思い。行き場のない怨み、無力故に抑え込む他ない魔族への怨嗟。本人も魔族憎しだから力ばかり強くなってえ、心は砕ける寸前さあ。その心を救いたかったのお』

ただ、具体的に何をすればレッドグラッジの闇を狩れるものか、グリーンは悩んだ。殺意の魔人を倒せば復讐を果たして怨嗟が晴れるのか。

そうして悩む内、たゆが闇狩りの対象になり、噂を聞きつけやってきたとき、私に出会った。

『ブルーグレイスにあんまりそっくりでびっくりだったよお。まー確証はなかったけどお、キサマの内からブルーグレイスを引っ張り出しちゃえばあ、殺意の魔人もイチコロだしレッドグラッジは大好きなお姉さんに再会できる。一石二鳥だったわけえ』

「確証もなしにあんなことしたんか……」

ちよつと、いやかなり引いた。

たしかにブルーグレイスが再来すれば、レッドグラッジの心の闇を

あらゆる面で癒せるかもしれない。殺意の魔人を取り逃がすこともなかっただろう。だからってあの仕打ち……思い出したら腹立ってきた。

『追い込んだら出てくると思ったんだけど、甘かったねえ。まあまあ、ボクもそのせいで殺意にひどい目に遭わされたし、おあいこおあいこ』

「しばくぞお前」

『考えうる限り最悪だったんだよねえ。殺意は倒せなかったしグラちゃんは大怪我するし。そしたらなんか、知らないうちに魔人も闇も狩ってくれたじゃん？ だからありがとお。おかげで私も隠居できて大感謝だよお』

こいつありがたいが出来てもごめんが出来ないやつだ。

世間的に死を装っているのは隠居するためらしい。こいつほどの大ベテランなら引き止めが激しそうだ。だからってあの地形が変わるレベルの大乱闘を自分の老後生活に利用するあたり、本当に食えないやつだった。

レツドグラツジの闇が狩られたと言われても実感が湧かない。

でも別れ際の、『貴様らを殺すのは最後にしてやる』という言葉。どこか晴れ晴れとしたあの言い方を思い返すと、闇狩ったのかなあ、なんて気にはなる。

『それだけええ、じゃあばいばい』

「待つて待つて、ついでに聞きたい」

『なあにー？』

こんなろくでなし魔法少女にはさっさとどっかに行つてほしいけど、その前にこれだけは聞かなきゃ。

「魔人は魔法少女なの？」

結局私は何なのか。ブルーグレイスの魂が魔人のコアになったのか、それとも魔力の残滓が怠惰な思いと結びついているのか、はたまた別の理屈があるのか。魔人と魔法少女の関係と仕組みをこの際ハッキリ知っておきたい。意味深な言動を繰り返す最長老魔法少女なら知っていてもおかしくない。

だけど返ってきたのは、身もフタもない内容だった。

『その質問に意味はないよお〜』

「どゆこと?」

『問いにも答えにも需要がないからさあ〜。世の中ねえ、需要のない情報はなかったことにされるんだよお〜? たとえそれが真実でも事実でもねえ〜』

「はあ」

『だから、そうだねえ……』

イマイチ分かるような分からないような物言いだった。

空気はしばらく言い淀むと、

『キサマはキサマの思う自分であればいいと、思うよお〜』

そう言いながら、徐々に遠ざかっていった。沈黙がリビングに満ち、張り詰めた空気が緩んでいく。

やがてたゆが大きく息を吐き、変身を解いた。

「魔力消えました。帰ったみたいです」

「ほんと訳の分からんやつちやな」

「そうですよもおく、サファイ〜」

「よーしよしよし」

無駄に緊張した分を埋め合わせるように、抱き合ってソファに倒れ込む。

互いに薄い服の下へ手を伸ばしながら、息の合ったちゅーを交わす。唇をついばみ、なめ回し、中へ舌を入れて絡め合う。両手は気持ちいいところを探って激しく動き回っている。ここ最近のどたばたをふつとばすため、手付きは少し乱暴だ。

でも気持ちいい。頭が真っ白になりそう。

たゆも気持ちよくなってくるといいな。

その日はご飯もおぎなりにして、一日中えっちした。

――

私の思う私というと変に哲学的だけど、要は今の私が私なんだから

う。

食べて寝てえっちして、寝たらまた食べてえっちする。必要最低限だけ頑張りながら、好きな女を抱いて抱かれて、呆れるほど無為無目的に時間を浪費していく。

私は怠惰の魔人のサファイ。中身の何割かは魔法少女らしいけど、基本使わない。えっちの気持ちよさに脳みそを溶かすだけの怠惰な魔人ちゃん、それが私だ。

最近頑張りすぎたせいか、マジで何もしたくない。どいつもこいつも私とたゆを引き裂こうとしてくるから頑張るほかなかった。

でも、もう安心だ。レッドグラッツは丸くなったし、近所の危ない魔人もいなくなった。緑の怪物は行方をくらまし、闇狩りトリオは私たちの仲をむしろ応援してくれている。脅威はみんな去った。

だから今度こそ、金輪際、一生涯がんばらないぞ。

魔人ちゃんは、がんばらない。